

## 高野山納骨習俗の地域差

—和歌山県北部を中心に—

藤井弘章

はじめに

死者の骨や髪の一部を聖地に納める納骨という習俗がある。この習俗については、考古学・歴史学・民俗学などにおいて注目されてきた。聖地への納骨は高野山から始まったと考えられている。高野山への納骨は、一世紀後半から確認できるといい〔坂本 二〇一六〕、一二世紀には成立したようである〔田中 一九七八〕。中世には、高野山を極楽浄土とする考えがおこり、高野聖の勧進活動が盛んになった。その結果、高野山に納骨する人々は階層も地域も拡大し、各地の霊場への納骨習俗に影響を与えていった〔狭川 二〇一六など〕。

一方、和歌山県北部では、現在でも高野山に納骨する習俗が盛んにおこなわれている。民俗事例としては、後述するように、大正時代から報告がみられる。コツノボセ（骨上せ・骨登せ）・コツノボシ（骨上し・骨登し）・コツノボリ（骨上り・骨登り）などと呼ばれ、和歌山県北部から奈良県西部・大阪府南部にかけて分布している。高野山周辺の納骨習俗については、宗教民俗学の研究、学会・大学の民俗調査報告、自治体史などで取り上げられてきた。きわめて興味深い習俗であるにもかかわらず、特徴的な事例が宗教民俗学的に考察されるか、特定の自治体史のなかで事例が示されるか、いずれかの場合が多かった。したがって、高野山麓全体における納骨習俗の分布や地域差の詳細はいまだに明らかになっていない。

筆者は平成初期（一九九〇年代）から和歌山県において民俗調査をおこなっている。最初のころは意図的に納骨について質問することはなかったが、高野山と山麓集落のかかわりについて話をうかがうなかで、話者からは納骨について語られることもあった。その後、紀美野町において集落ごとに聞き取りをおこなっていくなかで、コツノボシという方とコツノボリという方がいることに気が付いた。呼称のみならず、納骨に行く日程や持参するものなどにも地域差があることも分かってきた。また、この習俗は現在も盛んにおこなわれているものの、交通手段の変化、日程の変更、持参するものの簡略化など、習俗が変容していることにも気が付いた。こうしたことから、平成二五年（二〇一三）ごろからは、和歌山県周辺で調査をする際には、意図的に納骨についても質問するようになった。さらに、平成二七年（二〇一五）に筆者の祖母の納骨をおこなったことも、高野山への納骨習俗を考える契機となった。

本稿では、地域ごとに筆者の聞き取り事例をできる限り列記し、これまでの報告事例と合わせて紹介する。そのうえで、高野山納骨習俗の地域差や変化を考え、和歌山県北部における文化圏の検討も試みたい。

## 一 先行研究と筆者の調査

筆者が確認したなかで、高野山への納骨習俗を記した文献としては、大正五年（一九一七）に『郷土研究』に掲載された与田倉之助の「骨上り」という文章が最も古い（与田 一九一七）。以下、全文を引用しておく。

我地方（紀伊那賀郡田中村辺）に於ては、人が死ぬと骨上りと称して其遺骨を高野山に持って行く風習がある。遺骨と云つても一般に土葬であるから髪の毛を以て遺骨とするのである。普通は中陰の間に、然らざるも必ず其年の内に、日を択んで近親の者二名ばかり、遺骨を白紙に包み若干の銭を添へ、之を元結で結んで首に掛けられるやうにして持つて行く。汽車の出来る迄は皆徒歩であった。途中食事や休憩の為に掛茶屋などに入る時は、骨上りちやと告げると茶屋の者も心得て居て、遺骨を適

当の処に安置し、御茶の香よきを供へ香を焚いてくれる。高野に著した上は寺坊に著いて法事をして貰ふ者もあり。又は簡略に其ま奥の院の骨堂に持つて行くもある。途中は必ず弁当を用意し、握り飯などでも決して全部を食べ尽さず些し残して置く。普通の参詣にはそんな事は無いが、骨上りの者に限つて必ず犬が付いて来る。其犬に与へる為に弁当を残して置くのぢやと云ふ。但し自分も一度骨上りに上つたことがあるが、犬が付いて来ることは心付かなんだ。納骨堂には前面に連子の格子が立つて居る。遺骨は其隙間からそつと中へ御し、さきの元結で末を連子に結び付けて置く。決して投込むやうなことはせぬ。納骨が済んで帰りには、直ちに我家へは帰らず、親戚か隣家へ立寄つて御茶を吞ませてもらうたりなどする。普通は其家にちよつとした膳部を用意して居て、軽いもてなしをすることになつて居る。

次いで、大正一二年（一九二三）に刊行された『和歌山県那賀郡誌 下』には「第一編 風俗誌」の「六 最近の風俗」の「6 葬儀」に「骨登し」が取り上げられている（和歌山県那賀郡 一九二三）。

死人の遺髪を高野山骨堂に納むるは一般の習慣なり。山間部にては血族のもの姻戚のもの二人連立ち家を出づる時、小草鞋一足と飯に塩味噌を入れたる藁苞とを携へ、途中一つの谷又は川を越したる所にて之を棄つる習あり。

『郷土研究』、『那賀郡誌』ともに那賀郡の事例であるが、呼称も異なり、持参するものにも違いがあるようである。『郷土研究』のほうは平野部（現在の紀の川市）、『那賀郡誌』のほうは山間部（現在の紀の川市・紀美野町付近）の事例となつている。

こうした事例のうち、柳田国男は『那賀郡誌』の事例に注目し、『葬送習俗語彙』のなかで「火葬」の一項目として「コツノボシ」を取り上げた（柳田 一九三七）。『那賀郡誌』のほうには、草鞋や藁苞の弁当を持参することが記されているため、柳田は草鞋や藁苞弁当を持参する点に注目したのではなからうか。その後、『綜合日本民俗語彙』においても、「コツノボシ」が取り上げられ、『那賀郡誌』の事例が紹介されている（財団法人民俗学研究所 一九五五）。

その後、宗教民俗学者である五来重は、紀州・大和の高野山への納骨習俗を以下のように紹介している〔五来一九五二〕。

この地方では葬式の翌日、近親者が亡き人の遺髪を木箱や壺に入れて首にかけ、「餓鬼の弁当」という藁苞に入れた握り飯を下げて、三里、五里の山道を高野の山へとのぼる。旧高野街道の谷々でこの弁当を餓鬼に手向け、ここは押上岩、ここは鏡石、などと遺髪に生ける人のごとく名所を告げながら、奥之院にこれをおさめ、水向地藏でトーバ供養をして、すぐ帰路につく。どんなに遠くとも泊らずに往復するという。家族は孫を先頭に途中まで坂迎えに出でいて、すぐその足で寺へ参り、暗くなつても仕上げ法事をしてしまう。「骨のぼり」または「骨のぼせ」という、かなしくもゆかしい習慣である。

五来の記述は、地域が明記されていないが、後述するように、かつらぎ町天野地区および花園地区での事例をもとにしていると思われる。花園地区については五来自身が調査しており〔五来一九五二〕、天野地区については五来の指導により収集された報告をもとにしているようである〔土生川一九五二〕。

五来の場合には、日本全体の葬制・墓制のなかで高野山の納骨習俗を取り上げ、大きな枠組みで考察している。五来によると、高野山は詣墓であるという。高野山は平安末期に納骨の霊場になる前は、麓の村々の霊魂供養の場であり、庶民の詣墓の機能を果たしたと推測している。高野聖の勧進の結果、全国的に拡大され、日本全体の詣墓になった、という〔五来一九七六、七七〕。さらに、五来は「納骨・納髪は、本来は四十九日忌をすませてから、高野のぼりをしたものと私は考えている」とし、本来は七日七日の法事で浄化された霊魂を霊場に移していたといひ、高野山の奥之院は共同の詣墓であり、日本総菩提所と呼ばれる高野山は国民的詣墓であるとする〔五来一九五二〕。

また、四九日の法要がすんだあとに、粉河寺（紀の川市）などに忌明け参りをするを取り上げ、高野山に納骨することも忌明け参りであったが、「非常に変質」して、葬式の翌日に納骨するようになったと指摘する〔五来



一九九二)。このように、五来は納骨に行く日程に違いがある点を理解している。そのうえで、五来は四九日後に納骨するのが本来の姿であり、葬式の翌日に行くのは変化した姿であるという。

五来の教えを受け継いだ宗教民俗学者の日野西眞定も「骨のぼせ」(または「骨のぼり」として、花園村の事例を紹介している〔日野西 一九八二〕。日野西は、この習俗は高野山に近いほど嚴重におこなわれているといい〔日野西 一九八二〕、ごく近くの花園村(現在のかつらぎ町)・天野村(現在のかつらぎ町)などでは葬式の翌日、少し離れた伊都郡・那賀郡では四九日前後に行くと言っている〔日野西 一九八四〕。この日にちのずれに注目し、四九日前後に納骨する場合は「一応浄められた骨＝魂を高野山へ送り込むことになる」という。一方、葬式の翌日の場合は、傘を差す行為、道中で水を供える儀礼などから考えて、「かつて、死体そのものを高野山の山麓に運んだことの残存儀礼ではないか」という〔日野西 一九八四〕。納骨に行く日程の差に注目した点は五来と同じである。ただし、高野山は浄化された靈魂を移す詣墓であるとする五来の説と異なり、翌日に行く行為は山麓に死体を運んだ名残ではないか、というのである。

高野山の納骨習俗は、和歌山県の民俗をまとめた文献の中にも取り上げられている。県内三〇地区の民俗調査をおこなった『和歌山県民俗資料緊急調査報告書』には、九度山町古沢(こさわ)・かつらぎ町天野において高野山への納骨、下津町(現在の海南市)大窪において本山への納骨をコツノボセと呼ぶという事例が報告されている〔和歌山県教育委員会社会教育課 一九六五〕。ただし、この報告はいずれもごくわずかな記述のみである。

その後、『日本の民俗 和歌山』には「十 人の一生」の「8 忌み明け・年祭り」に「コツノボセ」が取り上げられている〔野田 一九七四〕。湯灌のときに頭髪を分けて剃り、左の髪の毛は高野山へコツノボセをし、右の半分はムセ(埋め墓)に葬って塔婆を立てる。伊都郡をはじめ、有田郡・日高郡にも以前は多かったとしている。

また、松本保千代は和歌山県の葬送・墓制を取り上げるなかで、「骨のぼせ」を紹介している〔松本 一九七

九。九度山町古沢の事例〔和歌山県教育委員会社会教育課 一九六五〕、橋本市の事例〔橋本市史編さん委員会 一九八五〕、清水町（現在の有田川町）の事例〔近畿民俗学会 一九七六〕はそれぞれ文献から引用している。松本は九度山町・橋本市・清水町の事例は葬式の翌日に行くことを述べたうえで、打田町（現在の紀の川市）・粉河町（現在の紀の川市）・清水町の二川<sup>ふたがわ</sup>などではオコツはひとまず仏壇に置き、シアゲがすんでから高野山へのぼせを納骨した、と記している。ここでも、納骨の日程に違いがあることが指摘されている。

松本と同時期に和歌山県がまとめた『和歌山県民俗分布図 民俗文化財緊急分布調査報告書』には「宗旨とコツノボセ」という分布図が掲載されている〔和歌山県教育委員会 一九七九〕。ここでは、呼称の違いにより高野山への納骨習俗の分布が記されている。コツノボリと呼ぶ地域は、高野町中筒香<sup>つづが</sup>・同町神谷<sup>かみや</sup>・かつらぎ町大久保・桃山町（現在の紀の川市）畑野・同町中畑・美里町（現在の紀美野町）毛原宮、コツノボシと呼ぶ地域は貴志川町（現在の紀の川市）北山・同町岸小野・美里町円明寺<sup>えんみょうじ</sup>・清水町（現在の有田川町）久野原<sup>くののはち</sup>・金屋町（現在の有田川町）小川・中津村（現在の日高川町）三佐、コツノボセと呼ぶ地域は花園村（現在のかつらぎ町）北寺・野上町（現在の紀美野町）東野となつている。また、この分布図の解説文として、和歌山県北部では、真言宗が高野山周辺、浄土真宗が海岸部、浄土宗が農村部に多いことを指摘したうえで、以下のように記している。

コツノボセの場所は圧倒的に高野山であるが、檀那寺・知恩院・本願寺等もまれにはある。高野山に最も近接した地域では、このことを多くコツノボリと称しており、貴志川・美里町円明寺・清水町久野原を結ぶ線を境に、それより西側の地域では、コツノボシと呼ぶところが多い。

事例は多くないものの、コツノボリとコツノボシの地域差を推測している点は興味深い。また、高野山への納骨習俗は県南部に分布しないことも分かる。

学会や大学の民俗調査のなかでもしばしば高野山への納骨習俗は取り上げられている。近畿民俗学会の調査報告

では、清水村（現在の有田川町）・貴志川町（現在の紀の川市）・かつらぎ町天野において事例報告がある（近畿民俗学会 一九七六・一九八〇a・一九八〇b・一九八〇c）。国学院大学による旧五西月村（現在の有田川町）調査（国学院大学民俗学研究会 一九六二）、東京女子大学のかつらぎ町四郷調査（東京女子大学文理学部史学科民俗調査団 一九八五）でも、納骨習俗が報告されている。田中久夫氏は、高野山納骨習俗の歴史的な成立過程を考察しているが（田中 一九七八）、貴志川町（現在の紀の川市）の民俗事例についても触れている（福田アジオほか 一九九九）。

一方、自治体史のなかでも、納骨習俗が取り上げられることがあった。ただし、和歌山県においては、民俗研究者が限られていたこともあり、自治体史における民俗調査は盛んではなかった。したがって、納骨習俗が取り上げられていても、ごくわずかな記述にとどまっているものも多い。そのなかで、『粉河町史 五』・『九度山町史 民俗文化財編』・『橋本市史 民俗編・文化財編』・『高野町史 民俗編』においては、民俗研究者が編纂にかかわることにより、地域の特徴的な民俗として納骨習俗が取り上げられている。とくに、『粉河町史』では、以下のような解説文が付けられている（『粉河町史専門委員会 一九九六』）。

死者の霊を山へ送るといふ基調文化に、山上の他界である高野山の寺院が骨を受け入れる習俗と影響しあつて、髪をコツと称して納骨するコツノボリが伝承されることになったようである。したがって納骨場へ行く途中で、骨を供養し、弁当を供える行為は、より基調の姿を伝承したものと考えられる。

和歌山県北部における高野山への納骨習俗については、これらのほかにも納骨に関する短い報告・研究は多数みられる。<sup>(1)</sup>それらについても、おもな研究・報告の内容とともに、次章以下において市町村ごとに紹介する。そのうえで、筆者の聞き取り内容を市町村ごとにできるだけ詳細に紹介していく。そして、市町村ごとに、①名称、②日程、③納骨するもの、④行く人、⑤持参する物、⑥行くときの作法、⑦納骨する場所、⑧帰りの作法、⑨買って帰

るもの、⑩納骨後の供養、に分類して特徴を明らかにしていく。

ここで、筆者の納骨習俗調査の進め方について記しておく。筆者の聞き取り事例については、長期間にわたる調査であること、目的が必ずしも納骨ではなかったこと、などにより聞き取り内容にばらつきがある。たとえば、紀の川市鞆淵は年中行事、かつらぎ町天野は祭祀・年中行事・生業など、高野町は年中行事・生業、紀美野町は生業、などを当初の調査目的としていた。したがって、和歌山県北部における納骨習俗の分布、地域差を明確に把握するためには、補足調査をおこなう必要があった。まずは、筆者の調査空白地帯であった橋本市・九度山町・かつらぎ町（天野以外）・紀の川市（鞆淵以外）などにおいて調査を進めた。調査地の選定には、山間部と平野部、紀ノ川北岸と南岸、江戸時代の紀伊藩領と高野寺領など、地域差があると推測される地域を選定するように心掛けた。さらに、高野山納骨習俗のさまざまな要素の有無、具体的な行動、時代による変化などに注意しながら聞き取りを進めた。なお、部分的に、近畿大学文学部学生による聞き取りや情報提供も使用・参照した。次章以下で示す個別の事例の末尾には、地区（大字）、話者、調査年月日を記した。聞き手の名前、情報提供者名のない事例については筆者の聞き取りである。

## 二 高野町の事例

### 1 地域の概要と先行研究

高野町は伊都郡とに所属しており、高野山を中心とした山間部に位置している。江戸時代までは高野寺領であった。明治時代には高野山周辺の高野村（のち高野町）と東部の富貴村が存在した。昭和三年（一九五八）、高野町と富貴村が合併して現在の高野町が成立した。現在、高野町には一九の集落（大字）が存在している。高野山もひとつの大字である。山上の宗教都市である高野山を取り囲むように、一八の集落が立地している。集落としての

高野山納骨習俗の地域差



地図1 高野町（国土地理院ウェブサイト地図に加筆）



高野山を山内、その他の集落を山外と呼んでいる。次章以降の納骨習俗にかかわるため、山麓の人々が高野山へと至った道を示しながら、本章で取り上げる高野町の集落の立地を記しておく。

高野山には高野七口と呼ばれるように東西南北に入り口がある。それぞれの入り口には、各方面から街道が通じていた。このうち、高野山北西麓からは町石道ちよういしと西高野街道が通っていた。九度山町の慈尊院から高野山へと登る道は平安・鎌倉時代などによく使われた道である。一町ごとに町石が建てられていることから町石道と呼ばれている。西高野街道は紀ノ川下流部の人々や西国の人々が通った道である。町石道と西高野街道は高野町の花坂で合流した。これらの街道を通って高野山に向かうと、花坂が最後の集落となる。ここからは急な上り坂が続き、高野山の正門である大門へと至る（大門口）。花坂から高野山までは歩いて一時間半程度である。花坂付近は檀上伽藍からおおよそ五〇町にあたるため、高野山麓の人々は、花坂から高野山までの坂道のことを「五十町」と呼んでいる。

高野山北麓からは東高野街道や黒河くろく道が通っている。東高野街道は、橋本市の学文路から登り、九度山町の河根、高野町の西郷を通り、不動口から高野山へと入る。江戸時代、京都・大坂からの最短ルートとして盛んに用いられた。昭和時代になると、東高野街道に沿うように南海線とケールが開通し、このルートで高野山に至る人が増加した。黒河道は橋本市の賢堂から登り、高野山北側の黒河口へ到達する。

高野山西南麓からは、高野町の湯川（湯川辻）を通過し、大門へと至った（龍神口）。高野山の南側の相あいノ浦うら



写真2-1 奥之院（2015年8月）

## 高野山納骨習俗の地域差

から高野山に入るルートもあった（相ノ浦口）。高野山東南麓にあたる奈良県方面の人たちは、高野町の大滝を通って高野山の太滝口から高野山へと入る場合と、山越えで奥之院付近へ至って大滝口から高野山へ入る場合があった。

高野町の集落のうち、街道沿いにあたる花坂・西郷にしごう（神谷かみや）には茶屋が多かった。湯川の湯川辻にも茶屋があった。最も高野山に近い集落として、西ヶ峰・林・南などの集落が立地していた。西ヶ峰からは歩いて三〇分程度、南からは一時間程度である。これらの集落は摩尼山の麓になる。主要な街道ではないが、富貴や奈良県方面への道は通っていた。

筆者は平成二〇年（二〇〇八）八月～二三年（二〇一一）年三月に高野町史編纂の調査、平成二二年（二〇一〇）八月～二三年（二〇一一）一月に富貴調査（近畿大学民俗学実習）、平成二三年（二〇一一）九月・二四年（二〇一二）一月に花坂調査（近畿大学民俗学実習）などをおこなった。結果的に、高野町域すべての地区で民俗調査をおこなったことになる。

ただし、町史における筆者の担当



写真2-2 奥之院前の玉川（2015年8月）



写真2-3 高野山の宿坊（2005年6月）

は生業と年中行事であり、また、調査段階では納骨習俗に関する明確な目的意識がなかったため、意図的にこの問題について聞き取りをおこなっていない。ただし、上湯川については、町史編纂後に、あらためて納骨習俗についての聞き取りをおこなったものである。高野山・南・大滝・東富貴については、本稿をまとめる最終段階で確認をおこなった。これら以外の事例については、生業や年中行事の聞き取りをする際、高野山とのつながりなどを聞いていたときに話者から語られたものである。

高野町域における納骨習俗としては、富貴地区の事例が報告されている〔垣内 一九六七〕。

葬式の翌朝、早くから遺髪納めに七霞峠を越え河合橋を経て高野山に詣でて帰る。その晩は連夜といって、僧侶を招いて読経し、精進上げをする。(筆者要約)

『高野町史 民俗編』の「第一部 高野町の民俗」の「第二章 人の一生」の「第一節 誕生から死まで」には「骨のぼり」が取り上げられている〔高野町史編纂委員会 二〇一二〕。この部分は森本一彦氏の記述である。

土葬のときには、葬式の翌日に、高野山の奥之院へ死者の髪や爪を納めに行った。火葬になると、納めに行く日は遅くなり、四九日まで置いておくことが多くなった。納骨は男三名ほどで朝から出かける。七個の握り飯や草鞋などを持って行き、途中の地藏や水場などに供える。花坂の矢立のサンマイのところは水も湧くので、「骨のぼり」のときに草鞋を吊るす場所になっていた。自宅・親戚の家・途中の茶屋・高野山の食堂・位牌屋などでお茶を供えるお茶湯をおこなう。細川では、子どもなど、血の濃い男性三名で行ったが、最近は女性も行くようになった。表参道を通って行った。二軒ほど茶を出してもらう。途中の三辻や四辻などの道の角で、小さい握り飯一つか二つを置いていく。これを犬の弁当という。花坂でも親戚の家が茶と花を供えてお茶湯をする。他所の人には焼餅屋がお茶湯を出した。六個の握り飯を作って持って行き、途中の水の飲むところに草鞋や弁当を供える。普段は六個の握り飯をしてはいけないという。高野山に着くと、菩提寺か奥之院へ行く。その後、位牌屋に行き、出来上がるまで昼食をして時間待ちをした。菩提寺に行く場合は菩提寺が食事を出した。東富貴では菩提



## 高野山納骨習俗の地域差

寺に行くことも奥之院へ直接行くこともあった。位牌屋に行き、位牌を注文しておいて、奥之院に納骨し、食事をして、午後三時ごろに位牌を受け取って帰った。(筆者要約)

### 2 高野山地区(旧高野町地域)

事例二——「骨のぼり」という。「骨のぼせ」は聞いたことがない。今は火葬して、戻ってきてお経を唱える。あくる日に奥之院へ行く。土葬のときは髪の手や爪を持って行った。(弁当を持って行かなかったか、と問うと) 洗米を白い紙に包んで、家から奥之院へ行く道中の沢とか谷とか、お米をおましながら(供えながら)登ってくる。今もやられている人はいらないう。昔は炊いた米だったのかもしれない。草鞋・傘は知らない。一人で行ったらあかんという。喪主は行かない。人数は決まっていない。四・五人で行くことが多い。奥之院へ納骨して、帰りに位牌売つてるところで位牌を買って帰る。帰ってから位牌供養をする。焼餅やコウヤマキは買わない。

高野山、下勝己(東又の下貞治(昭和六年生まれ)の息子)、二〇一七年六月  
二三日聞き取り(電話)

事例二——「骨のぼり」という。葬



写真2-4 位牌屋と高野山の町(2017年6月)



写真2-5 コウヤマキの販売(2014年3月)

式のある日にお骨を持って行く。今は葬式を下（橋本）でしてくるので、家で四九日祀ってから行く。高野山で葬式をする人もいる。親、ひいばあちゃん、みな土葬だった。埋葬後、一週間、毎日朝に墓へ参る。そのあとは、一週間ごとに参る。土葬のときは、爪と髪の毛を半紙に包んで持って行った。髪の毛はどこでもかめへん。「お日さん見たら恥ずかしい」といって、傘を差して行った。夫の文雄さんのときは傘は差さなかった。首から骨をぶらさげる。骨を持った人に傘を差す。家を出るときは、お茶と線香とろうそくを供える。濃い親戚が来て、エンタ（縁側）でお茶を一杯ずつ供える。「骨のぼり」に行くのは四人とか五人とか。文雄さんのときはみんなで参ってもらった。左手だけでおにぎりを小さく握って、メリケン粉をまぶして、二つずつ半紙に包んだ。道中の水のあるところや、地藏さんに供えていく。地藏さんがあるところは水がなくても供える。四か所か五か所供える。今はしない。今でもこらで下の人が谷に供えてあることがある。今はサランラップやから、腐れへんから気持ち悪い。ときどきある。子安には二四歳までいたけど、親がおったから、どうしていたのか知らない。南から歩いて高野山まで一時間もかかれへんと思う。（草鞋や杖は持って行かなかったか、と問うと）棺の中へ杖から帽子から入れる。土葬のときは六文銭も入れた。掘り出すと六文銭が出てくる。今は火葬なので、



写真2-6 酒まんじゅう屋と大門（2017年6月）



写真2-7 大門（2017年6月）

紙に書いたお金を入れる。昔は奥之院へ行った。ヘンコ（遍照光院）へ納めたらいいといって、今は寺へ納める。位牌は買ってくる。「骨のぼり」には朝行つて、昼には帰ってくる。昔は男の人が行つた。この日は、洗濯の日という。女の人は、川で亡くなった人の布団などを洗濯した。「骨のぼり」に行く人と、川で洗濯する人がいた。布団の綿を出して、きれいを洗濯して、干した。昔でも汚いのは捨てた。今は故人の布団は捨ててしまふ。「骨のぼり」に参つたら、高野山で肉とか魚とかを買ってきて、帰ってきてから炊いてみんなで昼に食べた。ブクアケという。今は高野で食べてくる。焼餅などを買ってきて配ることはない。マキはあるし。

四九日の間は家の棟でぐるぐる遊んで、という。針の山に登らんなんといつて、亡くなった人の浴衣を北向きに干して一週間、乾かんように杓で水をかけた。仮の位牌は四九日の間、半紙を折つかぶせておいて、一日一日上へ上げる。四九日で取る。四九日にオシヨネ（お性根）を入れてもらう。「骨のぼり」の日には何もしない。食べてもらうだけ。寺には位牌はない。一周忌はムカワリという。一周忌のときなどは、家から位牌を寺へ持つて行つて、拜んでもらう。一〇〇か日に天野へ参る。ブクアケというか。

盆。経木は一週間ほど前に区長さんがもらつてきて配ってくれる。昔からもらいに行つてきてくれる。八月一五日の朝、奥之院の水かけのところに、仏さんを送るといつて送る。経木を半紙に包んで持つて行く。

南、橋詰イチ子（昭和九年生まれ、檜原（子安）出身）、二〇一七年六月三〇日聞き取り

事例二一三 「骨のぼり」という。「骨のぼせ」はいわない。登つて行くから



写真2-8 摩尼隧道入り口から東側を望む（2010年11月）

か。葬式のある日に行く。お骨をさげた人が黒い傘を差す。自分で差す。弁当を持って行く。小さいおにぎりをかかなりこしらえていく。地藏さんが道のあちこちにあり。地藏さんにお供えしめて行く。車で行くときも止まって供える。親が亡くなったときも、教えてもらってしたことがある。(片手で握るのか、と問うと)それは知らない。寺には行かない。自分らで奥之院へ行く。拜んでもらうだけ。買って帰って配るものはない。帰ってから、精進揚げで肉などをみんなに食べてもらった。

南、大谷富雄(昭和九年生まれ)、二〇一七年六月三〇日聞き取り

事例二一四 古い人は「骨のぼせ」という。今は「骨のぼり」という人がいる。過去帳のあるお寺に行く。高野の東は遍照光院さんが多い。葬式の翌日に行く。晴れても黒い傘を差して行く。小さいおにぎりを作って行く。道中のあちこちの滝におにぎりを供えて行く。おにぎりは今でもしている。ところどころに滝がある。地面に直接置く。二・三か所に置く。紀ノ川筋だと、高野へ登るまで決して下ってはいけないという。出発するとき近所を回ってオチャトする。(西ヶ峰でもそうですか、と問うと)近所、一軒か二軒に寄ってオチャトする。まず位牌屋に行く。戒名が決まっているので、位牌を注文する。それからお寺に行く。喉仏を入れた小さな骨壺をお寺へ納める。その後、位牌屋に行くと、位牌ができています。今は葬儀屋がもうけにならないことは勧めない。位牌も葬儀屋で買わせる。高野の位牌屋は風前のともしび。高野の位牌のぼうが立派で値段も安い。高いのを買ったはずなのに、おじいちゃんの位牌と並べると見劣りすることになる。位牌供養は四九日でする場合もある。緑色のネットみたいなのを位牌にかぶせておき、初七日とかにちよつとずつ上へ上げる。四九日にとつてし



写真2-9 南の集落から高野山を望む(2010年11月)

## 高野山納骨習俗の地域差

まい、本位牌に交換する。寺の指導でさまざま。これは遍照光院式のやり方。高野では家族の行事なので、焼餅などを買って帰って配ることはない。

一〇〇か日で天野大社（丹生都比売神社）へ参る。ブクが明けるという。それで神社へ参れるようになる。亡くなるとブクがかかるという。

高野山、尾上恵治（西ヶ峰出身の尾上洋子（昭和九年生まれ）の息子、二〇一七年六月三日聞き取り（電話）事例二一五）店は一〇〇年以上たっている。定かではない。花園・清水・毛原・天野・古沢などの人が酒まんじゅうを買ってくる。納骨のときに買って帰る。昔から買って行く。

高野山、南峰堂（杉原裕仁）、二〇一七年六月三〇日聞き取り

事例二一六 「骨のぼり」という。「骨のぼせ」はいわない。葬式のある日に行った。昔は焼かんと埋葬した。爪とか髪を切ってコツにして、小さな竹の筒へ入れて、奥之院へ納めに行った。今は焼くのでコツ取れるけど。（髪の毛を切る場所を言うか、と問うと）



写真2-10 大滝から高野山（薄峠方面）を望む（2017年6月）



写真2-11 高野龍神スカイラインから高野山・和泉山脈を望む（かつらぎ町花園久木付近、2015年8月）

知らない。行くのは一人ということはない。二人か三人。行くときにお茶は供えない。近所からお参りはない。親類の濃い者が二人ないし三人で行く。ただ弁当を持って行く。骨納めに行くのに、故人の弁当を持って行く。小さいおにぎりを二つずつ半紙へ包む。おにぎり二つ包んだのを一つとする。最初にお墓の一つ。橋のところに一つ。大滝の真向いの山に町石がある。ビクという。そこにも弁当を置く。そこに比丘尼がおつたらしい。墓石と町石が一緒になったと思う。また、水呑みというところがある。薄峠の下。そこにも一つ置く。薄峠にも一つ置く。もう一か所置いた。五か所か六か所置く。草鞋や杖は知らない。どんと昔はあったけれどもしれないけど。野迫川の人も草鞋や杖を持つてくるのは見たことがない。子どもころはなかった。野迫川の人は弁当を置くところは違う。だいたい似てると思う。傘を差すのは知らない。聞いたことがない。

奥之院へ行って骨堂へ納める。寺には行かない。今は寺へ行って、寺から納めてもらうか、奥之院へ行くか。昔は直接、奥之院へ行った。

歩いて行って、昼に帰ってきた。位牌は行きつけの位牌屋に寄って彫ってもらおう。「骨のぼり」と同じ日か。奥之院へ行ってから金剛三昧院で拜んでもらう。丁寧にするところは、初七日ぐらいに寺へお頼みして、坊さんに来てもらい、三五日を仕上げてもらう。それまで位牌をかぶせておく。三五日か四九日にお勤めにきてもらって、みんなに食べてもらう。

何かを買ってきて配ることはない。「骨のぼり」の日も食べてもらう。肉や魚ではない。精進料理。四九日すむまでは精進料理。

埋葬して一週間は墓参りをした。家族だけ。一週間お参りする分の経木をもらう。経木を一枚ずつ墓へ置いていく。その後は一週間ごとに墓参りをする。四九日で集落の人に来てもらって、拜んで、食べてもらって帰ってもらおう。シアゲという。

ブクアケは一〇〇か日して天野さんへお参りした。大滝でも、お参りする人としらない人がいる。

盆。最初の盆には七日から祀る。金剛三昧院から経木をもらう。ふだんの盆でも銘々が経木をもらいに行く。新しい仏を迎える人は七日に行く。そうでなければ、一二日か一三日に行く。家の都合で行く。送るのは昔も墓までだった。

## 高野山納骨習俗の地域差

大滝、西喜好（昭和三年生まれ）、二〇一七年六月三〇日聞き取り

事例二一七 葬式のある日に「骨のぼり」に行く。土葬だったので、爪と髪の毛を取って、骨として持って行った。半紙か何かに包んで行った。お天道さんに見せたらあかんのか、コウモリ傘を差して行った。湯川辻からかなり行って、ヘリポートからもうひとつ向こうの尾を曲がると、水呑というところがある。今でもマキで桶をこしらえておいてある。ここで一休みする。おなかへらんように、弁当をおいてくる。カシワ（孟宗竹の皮）へおにぎりを包んでおいてくる。仏さんが食べるもので、人は食べない。最近はしない。傘を差して大門をくぐって行く。今は中門を再建しているが、金堂・大塔のところを、骨を持った者が一巡する。年寄りが言っていた。高野山に親戚がおったら、寄って一服してお茶を供えてもらう。このごろは車で行くので寄らない。今は

中の橋まで行く。奥之院に納骨堂がある。昔は、お金はいらなかった。自分たちで行って、そこに爪や髪の毛を入れた。戦後、奥之院の建物はコンクリート造りに建て替えた。左側に納骨堂はあった。今でも、同じ場所に納骨堂はある。

上湯川、西浦孝（大正一三年生まれ）・西浦トミ子、



写真2-12 高野山（高野山駅～大門の間）から橋本市方面を望む（2007年9月）



写真2-13 望遠レンズにて大門から西側を望む（紀の川市貴志川町・和歌山市の和歌山港と紀ノ川河口付近・紀淡海峡・淡路島が見える）（2017年6月）



二〇一四年三月五日聞き取り

事例二一八 「骨のぼり」という。髪の毛と爪を半紙に包んで首から掛けて高野山へ持って行った。水飲みというところで仏さんに水を飲ませた。湯川辻から一〇〇〇メートルぐらい行ったところ。ヘリポートのちよつと向こう。何も祀っていない。水が湧いている。井戸があつたけど、道より下になっている。仏さんに「水飲みや」といって、そこで休憩して、にぎりこを 持つて行って供えた。身内が三人か五人で行つた。

下湯川、安井精一（大正一三年生まれ）、二〇一〇年二月九日聞き取り

事例二一九 「骨のぼり」という。葬式のある日。このころ復活している。水のあるところで一服させる。おにぎりを三つ

藁でくくって、藁草履とおいでくる。二か所ぐらいする。花坂ではあまりやっていなかった。下（下流）のほうの人は熱心にやっている。

花坂、田和新吉（昭和二三年生まれ）、二〇一一年九月一三日聞き取り

事例二一〇 高野山に七く なつた人の喉仏を納めに行く。「骨のぼり」は基本的に式のあくる日に行く。なかには四九



写真2-14 花坂の集落（2010年1月）



写真2-15 花坂の焼餅屋と五十町坂の登り口（「仏様を休ませてからお登りください」と書かれた看板が立っている）（高野町花坂、2010年1月）



日おいたり、一年おく人もいる。「骨のぼり」に持って行ったのは、草鞋・弁当（藁で包んだおにぎり）・こうもり傘など。こうもり傘は亡くなった人の日よけにする。途中で休んだときに、弁当や線香を供える。最近はカラスなどが食べるため、自分たちで食べていく。「骨のぼり」は無量光院へ行く。途中で位牌を頼んでおく。押んでいる間に位牌はできている。（掛氏は焼餅屋を経営しているため）「骨のぼり」に来た人が店によって接待を受ける。このとき、骨壺にお茶を供える。これをお茶湯という。「骨のぼり」の帰りにも店によって、土産などを買って帰る。

花坂、掛正和（昭和二六年生まれ）、二〇一一年（聞き取り・久芳瑞樹）

事例二一一 「骨のぼり」という。頼まれて、お茶を出すことがある。盆の上に骨を置き、ろうそく・線香・お花・お茶をあげる。最後のお茶という。焼餅を供える人もいる。

花坂、西垣内文代（上きしや）、二〇一二年一月七日聞き取り

事例二一二 「骨のぼり」という。葬式したら次の日に行った。このごろは葬儀場でするので、しばらくおいておく。土葬のときは爪と髪の毛を持って行った。今は骨を持って行く。途中でお供えをする、決まった場所はない。

盆には仏さんを迎えに高野山へ行く。奥之院へお参りするだけ。八月一〇日に行く。仏さんが新しいときには迎えに行った。一六日ぐらいに、奥之院へ送りに行った。高野山近くの人は供え物を奥之院まで持って行っていった。

西郷（作水）、紙谷良子（大正一五年生まれ）、二〇一一年二月三日聞き取り

### 3 富貴地区（旧富貴村地域）

事例二一三 盆前後に高野へ参ることはなかった。亡くなったときの「骨のぼり」ぐらい。

東富貴、庵地前栄治（昭和七年生まれ）、二〇一〇年八月一三日聞き取り

事例二一四 三〇年ほど前から火葬になった。葬式のある日に高野山へ参る。「骨納め」という。高野参りともいう。

（「骨のぼり」と言わないか、という問いに）「骨のぼり」という人もいる。土葬だったので、髪の毛と爪を持って行った。（左右の髪の毛のことは知らない。）家でおにぎりを七つほど作る。弁当という。にぎりことつけもん。竹の皮へ包んだ。今は薄板などに包む。谷があるところへおましもて（供えながら）行く。歩いて行ったさかい、場所が決まっていた。今は知っている家と、知らない家がある。旧家で年寄りが気が付くと弁当を持って行く。若いもんで気がつかないで行く人もいる。あくる日に行かないで、長いこと置いてる家もある。（傘を差さなかつたか、という問いに）子どものころは土葬だったので、坊さんに傘を差した。鎌、飯なども持って行った。納骨のときには傘は差さない。稲葉さんの家の寺は遍照光院やと思う。遍照光院のことはヘンコという。稲葉さんは奥之院へ直接行く。奥之院へ直接行く人が多いと思う。中筒香・下筒香では高野の菩提寺へ行く人も多いのではないか。筒香は高野山に近いので拜んでもらう人もいる。

出発するとき、「水向けしたって」、とシキビの葉で水を向ける。オチャトはしない。盆にはオチャトするけど。納骨に行かずに残ったもんは連夜の準備をする。連夜もなくなりつつある。今は葬儀場を使うので満中陰を連夜にすることもある。葬式のときにインゲさん（檀那寺の住職）に戒名をもらう。高野参りのとき、位牌屋に寄って注文をする。数珠屋とか三島天狗堂など。戒名を彫ってもらう。奥之院で納骨して、高野の町を歩いて土産を買う。孫やひ孫に、鶯笛などを買う。手伝いの人に、行ってきたしるしに焼餅とか弥勒石を配る。今は胡麻豆腐とかも買う。マキもいっぱいあるので買わない。位牌屋さんに寄って位牌をもうて帰る。三時ごろ帰る。水をおます。賄いをしてくれた人と、葬式の支払いに行った人と、三〇人から三五人ぐらいで連夜のお参りをしてくれる。お坊さんも参ってしてくれる。位牌は四九日まで仏さん（仏壇）へ入れへん。四九日まで別に祀る。四九日の間は家の棟にいるといい、家を空けない。線香を切らさない。今は仕事があるので、家に寄って違う。

東富貴、稲葉敦美（昭和二〇年生まれ）、二〇一七年六月三日聞き取り（電話）

事例二一五 高野山へは、葬式のある日、「骨のぼり」をする。道中のお地藏さんにおにぎりを供える。

上筒香、福西勝久（昭和二五年生まれ）、二〇一〇年八月二三日聞き取り

事例二一六 葬式の翌日に「骨のぼり」をする。「骨のぼり」のときに、歩いて行く人たちを、寺の前にあるイチョウから見送った。車で行くようになって、道までは歩いて行く。

八月一八日に高野へ参った。ソウノボリといった。一軒に一人は行つた。奥之院・明神さんへ参つて、いっぱい飲んで帰る。

下筒香しもつづが、中山富十代（昭和六年生まれ）・中山博子（昭和一五年生まれ）、二〇一〇年八月五日・一四日聞き取り

#### 4 高野町における納骨習俗の特徴

事例から特徴をまとめると以下のようになる。

- ① 呼称 コツノボリという。コツノボセという人もいた。
- ② 日程 葬式の翌日に行く。
- ③ 納骨するもの 土葬のときは髪の毛と爪を持って行つた。今は骨の一部を持って行く。
- ④ 行く人 一人では行かない。

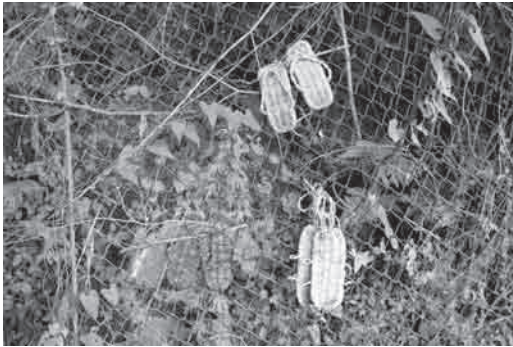


写真2-16 花坂から大門までの道路脇に掛けられた草鞋（高野町、2011年9月）



写真2-17 2-16と同じ

い。かつては男性ばかりで行った。

- ⑤ 持参する物 握り飯など、弁当を持って行く（東又・南・西ヶ峰・大滝・上湯川・下湯川・花坂・細川・東富貴・上筒香）。握り飯を「犬の弁当」というところもある（細川）。握り飯は半紙に包む（南・大滝）、竹の皮に包む（上湯川・東富貴）。握り飯は左手だけで握る（南）。草鞋を持って行くところもある（花坂）。
- ⑥ 行くときの作法 傘を差して行く（南・上湯川・花坂）。理由としては「お日さん見たら恥ずかしい」（南）、「お天道さんに見せたらあかん」（上湯川）、「亡くなった人の日よけ」（花坂）、などという言い方であった。水が出ているところに握り飯などを供える（東又・南・西ヶ峰・大滝・上湯川・下湯川・花坂）。地蔵に供える（南・上筒香）、辻に握り飯を置く（細川）、というところもある。弁当は「故人の弁当」（大滝）、「仏さんが食べる」（上湯川）、「仏さんに水を飲ませた」（下湯川）、などという。

⑦ 納骨する場所 菩提寺か奥之院へ納骨する。

⑧ 帰りの作法 当日に帰ってから肉や魚を集まった人に食べてもらうところもあった（南）。

⑨ 買って帰るもの 位牌を買って帰る。

⑩ 納骨後の供養 納骨当日の晩に供養をする（富貴）。奥之院へ参って仏を迎えるところもある（西ヶ峰・細川・西郷）。

高野町では、町内すべての地区において、高野山とのつながりなどを聞いたが、話者から納骨のことが語られたのは、下湯川・花坂・西郷・富貴・筒香のみであった。高野町域の人々にとっては、調査者から高野山に行く機会を尋ねられても、納骨のことは積極的に語らないことになる。そのこと自体が高野町における納骨の特徴といえよう。

高野町域では真言宗の檀家が多く、高野山に納骨する習俗は一般的であった。町域では基本的にはコツノポリと呼ばれる。握り飯を持参するのはほぼ共通している。傘を差す習俗は、高野山周辺のごく一部に見られた。ただし、高野町域では後述するような周辺地域に比べると納骨の際の作法が少ないように思われる。また、他所から納骨に来る人々に対して、お茶を出し、焼餅・まんじゅう・コウヤマキ・位牌などを販売することも高野町の特徴である。

一見すると、高野町域の納骨習俗は他地域に比べて簡単なように見えてしまう。しかし、それは町域の集落と高野山との距離やかかわりに関係しているように思われる。高野町域の集落は、高野山を取り巻くように位置している。高野町域の人々にとって、高野山は身近な地元山という感覚が強いように思われる。高野町域の集落は、どこからでも高野山まで徒歩で日帰りできる範囲である。近いところでは、歩いて三〇分で着くところもある。平均、一〜二時間で高野山に着くという集落が多い。こうした高野山周辺の山間部に位置する集落にとって、高野山は信仰面だけではなく、経済的な結びつきが強かった。高野山は標高八〇〇mほどの高さにあり、大勢の僧侶が生活をする山上の宗教都市である。山間部の集落では、生産した野菜・薪・炭・位牌・箸などを高野山に販売し、年末の市などの際には高野山で買い物をした。山間部の集落は、近くに高野山があることで日常生活が支えられている。また、高野山の僧侶たちの生活を支えてきたのも周辺の山間部の集落であったといえる。高野山地区では、集落ごとに堂はあるが、住職はおらず、高野山内の宿坊が檀那寺となっている。集落ごとに宿坊が決まっている場合が多く、葬式や盆には高野山の僧侶が供養をおこなっている。盆には高野山の宿坊に経木をもらいに行く場合もある。高野山に最も近い西ヶ峰・林・南では、盆には奥之院に先祖を送っている。先祖を奥之院から迎える家もある。毎年は参らなくても、新仏がある場合は、高野山に参るところもある〔高野町史編纂委員会 二〇一三〕。高野町の人々にとって、高野山は日常生活圏内の聖地であった。したがって、高野町域の人々にとって、コツノポリ

は死者が身近な山に登って行くという感覚であり、死者を遠くの聖地へ送り届けるというものではなかったといえよう。

### 三 橋本市の事例

#### 1 地域の概要

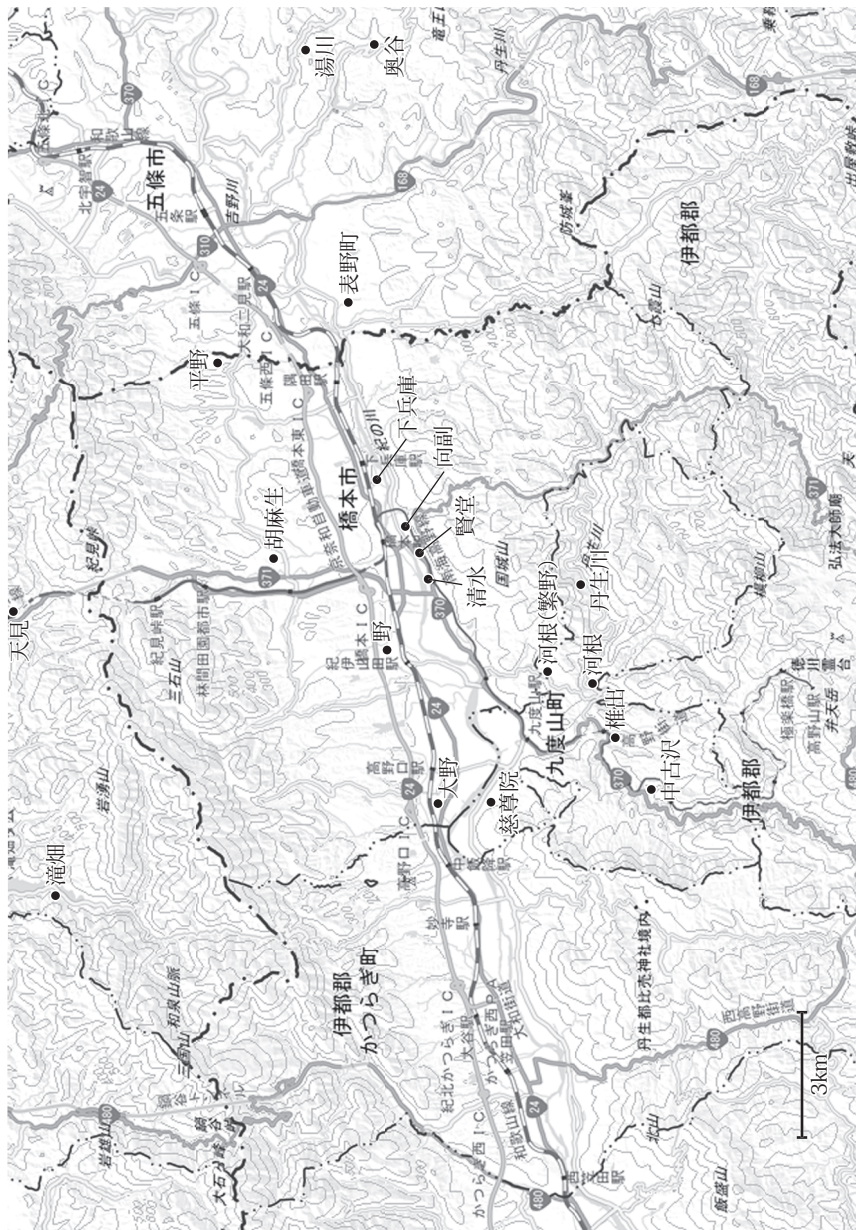
橋本市は高野山の北麓に位置している。市域は伊都郡に所屬していた。昭和三〇年（一九五五）、伊都郡橋本町と岸上村・山田村・紀見村・隅田村・学文路村が合併して橋本市となり、平成一八年（二〇〇六）、高野口町を合併し、新「橋本市」が誕生した。

市域の中央部を東から西へ紀ノ川が流れ、紀ノ川を挟んで北岸と南岸に平野部が広がっている。市域の北部は和泉山脈であり、南部は紀伊山地へと連なる山である。南部の山を登って行くと高野山がある。清水・学文路から東高野街道が高野山へと通じていた。これは、江戸時代から明治時代にかけて、他地域の人々が高野山へと登る主要な参詣ルートであった。また、賢堂かしどうから高野山へと登る黒河道もあった。橋本の町は古代から東西と南北の街道が交わる交通の要衝であった。地元で生産するもののみならず、他地域から搬入されるものも含めて、高野山で必要な物資を送り出す拠点でもあった。橋本市域は、高野山と信仰面だけではなく、経済的にも密接に結びついていた。現在も鉄道・道路が東西南北に交わる交通の要衝であり、大規模なスーパーなどが立地する高野山麓の経済的な拠点でもある。

橋本市における調査は、平成二八年（二〇一六）に集中的におこなった。地域差を検討するために、紀ノ川の北岸・南岸、市域の東部・西部などを考慮し、さまざまな地区を選定して、おもに納骨習俗や盆行事などを中心に調査をおこなった。



高野山納骨習俗の地域差



地図2 橋本市・九度山町（国土地理院ウェブサイト地図に加筆）

『橋本市史 下』では「民俗編」の「第一章 行事・習俗」の「二 冠婚葬祭」の「(五) 喪・葬」のなかに「納骨(骨登り)・高野登り・骨納め」として取り上げられている(『橋本市史編さん委員会 一九八五』)。

葬式の翌日、遺族・親族のなかから二人が、遺骨と仮位牌を持って、納骨と位牌新調の目的で高野山に行く。明治・大正のころは草鞋ばきで、山坂を越えて、弁当持ちで行った。弁当のほかに小さなおにぎりを「犬の弁当」として持参し、神谷あたり休憩から奥之院にいる犬に食べさせた。位牌を購入して、その位牌を持って奥之院へ納骨した。(筆者要約)

『橋本市史 民俗編・文化財編』でも「民俗編」の「第三章 人の一生」の「第三節 葬と墓」の「1 葬式」の「湯灌」・「忌中」に「コツノポリ」がある(『橋本市史編さん委員会 二〇〇五』)。

湯灌のときに、死者の髪や爪を切ることを「骨を取る」という。今は火葬したあとの骨を骨壺に入れる。葬式の翌日に、「コツノポリ」をする。朝、墓参りをし、奥之院へ骨を納めに行く。親戚の者二・三人と行く。出発する前に家でオチャトといてお茶を供える。高野山へ行く途中でも、親戚などに寄ってオチャトをする。繰り返しすることが供養になるという。道の谷に、犬の弁当といって、握り飯を置いていく。高野山で位牌を作って持ち帰る。恋野では、翌日に位牌供養をする。「コツノポリ」の翌日は、精進上げといって魚を食べる。「コツノポリ」の翌日から七日間、死者の着物を北向きに掛けて水を掛ける。(筆者要約)

また、盆の行事として以下のようなことも紹介している(『橋本市史編さん委員会 二〇〇五』)。

学文路・柱本では、八月一〇日に高野山に登り、奥之院から経木をもち帰ってくる。高野山で開かれている市で盆の花などを買ってきた。高野山に行けないときは、慈尊院から経木を持ち帰ったが、新仏のときには必ず高野山から迎える。(筆者要約)

## 2 隅<sup>す</sup>田地区

事例三一一 「骨のぼり」という。葬式のある日に行く。団子<sup>だんご</sup>をこしらえて、「犬の餌にせー(餌にしる)」という。蓮華定



院で拜んでもらう。位牌屋さんで位牌を注文して、帰りにもらって帰る。その晩は供養しない。

隅田町平野、辻貢（昭和一一年生まれ）、二〇一六年八月四日聞き取り

事例三—— 「骨のぼり」という。「骨のぼせ」という人もいる。四九日まで、軒下に魂がいるという。そのあと「骨のぼり」をする。お別れするのに、なごりおしい。翌日には行かない。今はあくる日に行く人もいる。このごろはなんでも早くなってしまうっている。お別れになるのに、四九日おいといてもええと思う。土葬だったので、髪の毛と爪を持って行った。オチャト（お茶湯）をする。極楽橋駅で降りて、歩いて行った。女人堂へ行く道を登った。弁当を三つほど持って行く。勝手に判断して、三か所ほど置かせてもらおう。餓鬼さんか無縁さんか分からん。その都度、拝みながら行く。戒名を持って行き、先に位牌を頼んでおく。その足で奥之院に行く。四九日は白木の位牌。帰りに近所に配るものを買うことはない。

隅田町下兵庫、瀬崎浩孝（昭和一一年生まれ）、二〇一六年七月一日・八月五日聞き取り

### 3 紀見地区

事例三—— 「骨のぼり」という。長いことおいとくともあるみたいやけど、ここらは葬式すんであくる日にのぼる。焼き場へ行くと、納骨用の小さいのと、普通の骨とくれる。土葬のときは髪の毛を持って行った。お通夜して、葬式して、高野参りする。高野の寺は決まっていた。土屋さんの家は五大院。奥之院に参ったらええと、インゲさん（檀那寺の住職）も言ってくれるので、奥之院へ行くようになった。土葬のときは髪の毛を持って行った。爪はガンバコに入れた。身内や知り合いの家へ寄ってオチャトしてもらおう。今は車で行く。昔は電車で行った。むすびを六つ作る。「両手でしたらあかん」といい、片手で握る。竹の皮に包んで持って行く。これは「犬の餌」という。傘や草鞋を持って行くことは知らない。電車に乗っても、「骨は置いたらあかん」という。「ずっと持っとれ」という。白いきれを首にくくって、骨を包んで持っている。納骨堂の下は深いので、中へ骨を入れるとき、首から掛けてある白いひもでゆっくりと入れた。位牌屋に位牌を頼んで、帰りにもらってく

る。その日に、インゲさんに来てもらって、位牌にオシヨネ（お性根）入れてもらう。昔は近所の人も呼んだ。二時か三時に帰ってきて、お膳を取って、いただいてももらう。弥勒石（まんじゅう）か胡麻豆腐とか、持って帰ってもらう。マキは買っていない。仮の位牌は三五日か四九日に、墓へ持って行っていける（埋める）。土葬だったので、一週間ほど、毎朝、近所の人がお墓へ参ってくれた。納骨以外の骨は四九日おいとく。

八月一〇日に高野参りをする。十日参りという。先祖を迎えに行く。新仏がなくても行く。奥之院へ参る。お骨を納めてから迎えてくる。大人になってからは、新仏できたときには必ず参った。今も行く人はいる。土屋さんは最近行かない。胡麻生、土屋吉子（昭和二年生まれ）、二〇一六年八月五日聞き取り

#### 4 山田地区

事例三―四 「骨のぼり」という。葬式の翌日と思う。

野、小林房代、二〇一六年八月五日聞き取り

#### 5 学文路地区

事例三―五 「骨のぼり」という。葬式の翌日に行く。ところによったら、四九日待つてから納骨するところもある。高野山に菩提寺があるところもある。松井さんの家は高野山に菩提寺はない。奥之院へ直接行く。葬式のある日の朝、近所の人、骨のぼりの前に墓へ参る。小さい団子を四九個こしらえて、墓へお供えした。ベツカ（別家）で団子を作った。喪主の家に団子を置いておく。家の者と一緒に墓へ行く。墓参りが終わってから「骨のぼり」。朝早く参ってくれた。火葬



写真3-1 野から高野山方面を望む（2016年8月）

になつたので墓参りはなくなつた。「骨のぼり」の朝は、近所の人がオチャトにきてくれる。玄関先へお骨と仮の位牌・お花（だいたいシキビ）・線香・ろうそくを置く。番茶をコップについて、入れ替わり立ち代わり拝んで、新しいお茶に入れ替える。仏さんの身内、近所の心安い人、二・三軒を回って、その家でオチャトして拝んでもらう。母の場合、実家が近くだったので、実家に寄つた。正芳さんのいとこ、近所の友達達の三軒回つた。同じ道は通らない。嫁に行く時も、戻ってきたらあかんということと同じ道は通らない。「骨のぼり」も、高野山まで同じ道を通らないで行く。喪主は「骨のぼり」に行かずに家にいる。親戚が何人かで行く。骨は白いさらしの布で首からかけて持つ。弘法大師は犬に導かれて高野山に行つたというので、犬の弁当を持つていく。握り飯を作つて、犬の弁当ということを持つていく。竹の皮へ入れて持つて行つた。山内に入つてから、辻々へ握り飯を置いた。車で行く場合は、大門の周辺で置いた。途中では置かない。今はゴミになるということで、山内に入つてから、道角のゴミ箱へ入れる。傘を持つて行くことは記憶にない。数珠屋などで位牌を作る。位牌を頼んでおいて、納骨して、食事していると、位牌が出来上がつている。位牌を持つて帰り、その晩に位牌供養をする。坊さんに来てもらう。親戚の賄いもある。位牌をたばつてきて、坊さんに来てもらつて、オシヨネを入れてもらう。親戚も来る。「骨のぼり」に行つたときには、土産を買つてくるものではない、といった。最近では買つてきて配っている。母のときは、友達が見送りに来てくれたので、護摩豆腐を三〇ほど買つてきて配つた。マキはこらであるので買つてこない。

盆の仏迎えに行くのに、年一回、高野山へ行つた。八月一〇日に参る。マキを土産に買つてきた。高野参りの土産としてマキを買つてきた。そのころはマ



写真3-2 向副から高野山方面を望む（2016年8月）

キはこのへんに植えてなかった。

向副（松本）、松井正芳（昭和一年生まれ）・松井カヨ子（昭和一八年生まれ）、二〇一六年八月四日聞き取り

事例三一六 「骨のぼせ」と母は言っていた。母は北馬場（橋本市）の出身。明治生まれ。若い人は「骨のぼり」、という。松永さんは「骨のぼり」、という。自分が登るのではなく、登らせるから、「骨のぼせ」という。必ず葬式のある日に行く。習慣的にあくる日に行った。このごろはあとでもいいと任職が言う。土葬のときは髪の毛、爪を持って行った。八時に出発と決めておく。七時半ぐらいからお茶をしに来てくれる。オチャトという。友達や近所の人が並んできてくれる。茶瓶にお茶を入れておき、故人が使ったお茶碗にお茶を入れて、いちいち捨てる。バケツを前に置いておく。親戚や故人とつながりのある家に行く。本家へも行く。そこでオチャトをしてくれる。弁当は持たない。傘も持たない。白い布を巻いて、骨を持って首からかける。車か電車で行く。必ずお骨に話しかけるといふ。「こんなことあったね」とか、思い出話をする。高野山へ行くと、お位牌を頼んでおく。奥之院で拝んで、菩提寺の清浄心院でお布施とお骨を渡してお願いする。寺には位牌を渡さない。お金を渡しておく、全部やってくれる。終わってから、ついて行ってくれた人になるべくごちそうを食べさせる。帰ると、焼餅などを近所に配る。焼餅のときもあるし、胡麻豆腐でもかまわないという。夕方、家に帰るとすぐにインゲさんが来てくれ、近所の人がかみ経をあげる。前へ位牌を置いて、シヨウネ（性根）を入れてくれる。最近、骨を墓へ入れるのは四九日すぎからという人が多くなっている。

清水、松永定治（昭和二年生まれ）、二〇一六年七月一日聞き取り

## 6 高野口地区

事例三一七 葬式の翌日に高野に「骨のぼり」に行く。土葬の人は毛を持って行く。身内の三人ほどが行き、奥之院に骨を納める。先祖の位牌は光台院に祀ってもらっている。隣近所でも寺は違う。高野へ行くとまず、土産屋で戒名を渡して位牌を頼

み、奥之院に納骨する。帰りにその土産屋で食事をし、位牌を受け取って、家に帰って精進上げをする。その晩にインゲさんに来てもらい、位牌にオシヨネを入れてもらい、開眼供養をする。

大野、井浦輝作（昭和四年生まれ）、一九九九年一月一日聞き取り

## 7 橋本市における納骨習俗の特徴

事例から特徴をまとめると以下のようなになる。

- ① 名称 コツノポリという人が多い。なかにはコツノボセという人もいる（隅田町下兵庫・北馬場）。
- ② 日程 葬式の翌日に行く。四九日まで軒下に魂がいるといい、そのあとに納骨する人もいる（下兵庫）。最近はずばらくあとに行く人も出てきた。
- ③ 納骨するもの 土葬のときは髪・爪を持って行った。今では骨の一部を持って行く。骨壺を白い布で巻いて、首から掛ける（胡麻生・向副・清水）。
- ④ 行く人 身内が三人ほどで行く（大野）。喪主は行かない、という家もある（向副）。
- ⑤ 持参する物 握り飯・団子など、弁当を持って行く。握り飯を「犬の餌」、「犬の弁当」などといって持って行くところもある（平野・胡麻生・向副）。握り飯は片手で握る（胡麻生）。握り飯は竹の皮へ包む（胡麻生・向副）。
- ⑥ 行くときの作法 自宅・親戚の家などでオチャト（お茶湯）をする。骨壺は首から掛けて、道中で下に置いてはいけない（胡麻生）。骨に思い出話などを話しかけながら行く（清水）。同じ道を通らないで高野山まで行く（向副）。
- ⑦ 納骨する場所 菩提寺か奥之院へ行く。最近では奥之院へ行く人もいる。

⑧ 帰りの作法 納骨後、高野山で食事をする。家に帰って精進上げをする（大野）。

⑨ 買って帰るもの 位牌屋で位牌を注文し、帰って帰る。高野山のまんじゅう・胡麻豆腐、花坂の焼餅などを買って帰る。

⑩ 納骨後の供養 当日に位牌供養をする。買って帰った位牌にオシヨネ（お性根）を入れてもらう。当日に位牌供養をしない家もある（平野）。四九日後に行く家では、四九日は白木の位牌を安置し、納骨後に高野山で買った位牌に替える（下兵庫）。参ってくれた人に、まんじゅう・胡麻豆腐・焼餅などを配る。初盆に限らず、八月一〇日に「十日登り」と称して、高野山に仏を迎えに行く（胡麻生・柱本・向副・学文路）。新仏のときには必ず高野山へ迎えに行った（胡麻生・柱本・学文路）。

橋本市域では真言宗の寺院・檀家が多いが、真言宗以外でも高野山に納骨する習俗が広がっていたようである。市域では基本的にコツノボリと呼ぶ。ただ、わずかであるが紀ノ川北岸でコツノボセという人もいた。周辺地域と違いがある点としては、葬式の翌日に行く、弁当を持つ、弁当のことを「犬の弁当」という、当日に位牌供養をする、などである。盆に先祖や新仏を高野山に迎えに行くことも特徴的である。

市域内での地域差は確認できなかった。江戸時代の橋本市域は、紀ノ川北岸が紀伊藩領、南岸は一部を除いて高野寺領であった。紀伊藩領の地域においても、高野寺領の地域と同じような納骨習俗がおこなわれてきたということになる。

賢堂から最短ルートの黒河道を歩いて高野山に登ると六〜七時間ほどである。橋本市域の集落からは、歩いて高野山まで日帰りができるところが多かった。紀ノ川周辺の平野部から南を望むと高野山を含む山々が目に見える。新仏に限らず、八月一〇日は「十日登り」と称して、高野山へ仏を迎えに行くこともあった。橋本市域の人々

にとつて、高野山は祖霊の鎮まる霊山であり、コツノボリは死者が集落を見下ろす山に登って行くという感覚であつたと思われる。

#### 四 九度山町の事例

##### 1 地域の概要と先行研究

九度山町は高野山の北西麓に位置し、伊都郡に所属している。紀ノ川南岸の平野部、およびその南部の山間部に大別される。東高野街道は橋本市の学文路から南下し、町域の河根<sup>かね</sup>を通り、高野町の西郷を経由して高野山へと登って行く。紀ノ川に面した慈尊院は、古代から高野山との政治的・経済的な関係が深かった。慈尊院からは町石道というルートも高野山へと通じていた。江戸時代には町域は高野寺領であつた。

九度山町では、平成二八年（二〇一六）に集中的におこなつた。中古沢<sup>なかつさわ</sup>・椎出<sup>しいで</sup>・河根の三か所で調査をおこなつた。盆行事を中心に納骨習俗についても調査をおこなつた。

九度山町域の事例としては『和歌山県民俗資料緊急調査報告書』の記述がある（和歌山県教育委員会社会教育課 一九六五）。

古沢では死者の左の頭髮を高野山へ納骨する。このことを「骨上り」と記している。（筆者要約）

その後、『九度山町史 民俗文化財編』には「民俗編」の「第七章 通過儀礼」の「五 葬墓制」の「(四) 死者供養」に「4 骨のぼり」が取り上げられている（九度山町史編纂委員会 二〇〇四）。

河根では葬式の翌日に「骨のぼり」をしている。土葬のときは、死者の爪・髪を半紙に包んで持って行った。片手でおにぎりを五〜六個握り、半紙に包んで、山中で犬に食べさせた。出発のとき、近所の人は喪家でお茶湯をする。親戚や近所の家もお茶湯をした。

推出では骨を持った人は傘を差す。死者の身近な人が三〜五人で行き、喪主は行かない。後戻りしないように行く。一心口から高野山に入り、菩提寺で拜んでもらったあと、奥之院に骨を納める。高野山から戻った晩に、葬式に参加した人が集まり、位牌供養をする。

丹生川<sup>にうかわ</sup>では葬式の翌日に行く。土葬のときは、死者の爪・髪を半紙に包んで持って行った。左手だけでおにぎりや六つ作って半紙に入れ、三人の足の達者な者が高野山に登った。出立のとき、縁側または玄関でお茶湯をする。親戚や親しい家があれば、そこでもお茶湯をする。谷の水のあるところに行くところ、ろうそく・線香を立て、骨壺に水を掛ける。仏壇屋に寄り、本位牌を注文する。ここでもお茶湯をしてもらい、奥之院へ納骨する。

中古沢では告別式の翌日に「骨のぼり」をおこなう。土葬のころは、爪を切つて、古沢紙に包んだ。近所の人が縁側でお茶湯をすると、骨壺を入れた箱をさらして首に掛けて高野山へ向かった。小さいおにぎりを三〜四個ぐらい作り、竹の皮に包んで弁当とした。奥之院に入ると、犬に与えたりした。高野山では本位牌を頼んでおく。帰りに中古沢の親戚に立ち寄りお茶湯をする。これをオチツキという。(筆者要約)

## 2 町域の事例

事例四——「お骨のぼり」。葬式のある日に行く。おにぎり七個を持って行く。辻へ置く。今は持って行かない。傘を持って行くのは知らない。近所の人がお見送りに行く。オチャトする。昔は見送ったあと、墓へ参った。首から白い切れで巻いて



写真4-1 蔵王峠から橋本市・九度山町方面を望む(2006年8月)



骨を持って行った。

盆の一〇日に高野山へ迎えに行く人はいる。新仏に関係ない。

中古沢、野口勝弘、二〇一六年八月一四日聞き取り

事例四―二 「骨のぼり」という。葬式をすませて、翌日に「骨のぼり」をする。朝の八時〜九時ごろに出発する。出発は九時が多い。その前に自宅でおチャトをする。簡単な盆を用意する。家によつて違う。低かつたら台の上に置く。おチャトしてもらいやすいようにする。ろうそく立、線香、おチャトの湯飲み、鯛、シキジかマキ、お水を用意する。シキジで位牌に水掛ける。班の方、親類の方、親しい人がお参りに来て、お見送りする。出発のとき、骨壺に三回ほど水を振り掛ける。落としたら大変なので、骨壺はさらして巻いて首から掛ける。今は、若い人は首から掛けずを持って行く。男性四・五人で行く。後ろを振り返ると、未練残して戻ってくるという。後ろを振り返らずに行く。二か所ぐらい親戚に寄っておチャトしてもらう。家を含めると三か所ぐらいでおチャトをする。おチャトをお願いされた家でも、同じように用意しておく。いったん、骨壺を置かせてもらって、近い方にお参りしてもらう。高野山に登るときは、いい天気でも傘を差して行け、という。こうもり傘を持って行く。差さないけど持って行く。高野山は不意に雨が降ることがあるのではないか。河合さんは傘を差して行くのは見たことない。弁当も持って行けという。傘と弁当が必須。握り飯を持つ。自分たちのものではない。最近では、カラスやイノシシが食べるので持って行かない。奥之院の参道に置いた。野犬が多かった。野犬にやったのではないか。お大師さんは犬に導かれたというし、犬を大事にしたのではないか。奥之



写真4-2 高野参詣大橋から高野山方面を望む  
(2007年3月)

院の前の休憩所の人に、お金を添えて弁当を渡してきたこともある。山中に置いてきたこともある。ここ数年は持つて行かない。今は車で行く。高野山に着くと、位牌屋に行く。戒名を控えて行き、店へ寄って、位牌を注文する。家にある位牌の高さを図っていき、同じような形にする。位牌屋でもオチャトしてくれる。奥之院では拜んでくれるのは午前中に三回ほどある。八時〜九時に出発して、位牌を注文して、奥之院へ行くと、拜んでくれる時間になる。三〇〜四〇分拜んでくれる。申し込みをして納骨する。帰りにご飯を食べる。必ずおまんじゅうか花坂の焼餅を買って帰る。四〇〜五〇個買う。お世話する人が喪主さんに進言し、相当の数を買って帰る。ご飯を食べて、おまんじゅうを買って、位牌屋に寄ると、位牌ができています。位牌をいただいて家に帰る。その日の晩に位牌供養をする。坊さんが来てくれる。和讃講の人も四〜五人来てくれる。チンチン講という。交代で当番に当たっている人が来る。班の人、親戚も来てくれる。ベツヤがある場合は、班の人はベツヤ（別家）で待機し、準備ができたので班のみなさん来てくださいと、喪主がお願いに行く。位牌供養のときに、高野山で買ってきたまんじゅうを配る。食べる人もいるし、持って帰る人もいる。チンチンさんには、お札に粉石けんを渡すことが多い。チンチンさんは御詠歌を唱える。マキは土産としては買つてこない。

班の人たちは、「骨のぼり」を見送つたら墓へ参る。班の人は、それから七日ほど（現在は一日〜三日ほど）、朝、墓参りに行く。喪主の家の軒先に花を置いていく。四九日までは白木の位牌を祀っている。四九日がすむと、仏さんになったというので、高野山で買ってきた黒い位牌を仏壇に入れる。高野山に納骨する以外に、墓にも骨を納める。「骨のぼり」の朝に、家の人が墓へ持つて行く場合もある。一月おいてから納める人、一年してから納める人もいる。

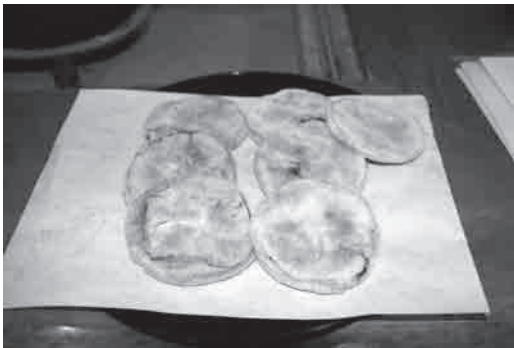


写真4-3 花坂の焼餅（高野町花坂、2011年9月）

盆の一〇日に高野山へ迎えに行く人がある。初盆は関係ない。めいめい勝手に行く。お参り行くだけ。最近は一〇日に高野山へ行く人は減ってきた。

椎出くだ、河合達哉（昭和一八年生まれ）、二〇一六年六月二四日聞き取り

事例四―三 「骨のぼり」という。葬式のある日に行く。出るときには、親類のうちに寄ってオチャットをする。下古沢に親類がいるので寄った。母は昨年亡くなったので、下古沢に寄った。高野山で位牌を作ってもらい、帰ってきて、その晩に位牌供養をする。

河根かね（硯水すずりみず）、六〇代ぐらいの男性、二〇一五年八月二日聞き取り

事例四―四 「骨のぼり」という。葬式のある日に行く。傘を持って行くのは聞いたことがない。奇数の人数で行く。人数が足らんかったら人形でも乗せていけという。団子を六つ持って行く。晩に供養をする。焼餅なんか買ってきて、供養のときに出す。

河根（繁野しげの）、道上敏晴、二〇一六年八月一四日聞き取り

### 3 九度山町における納骨習俗の特徴

事例から特徴をまとめると以下のようになる。

- ① 名称 コツノボリという。
- ② 日程 葬式の翌日に行く。
- ③ 納骨するもの 土葬のときは髪・爪を持って行った。今では骨の一部を持って行く。骨壺を白い布で巻いて、首から掛ける（中古沢・椎出）。
- ④ 行く人 男性五人ぐらいで行く（椎出）というところもあるが、三人（丹生川）というところもある。奇

数の人数で行き、人数が足りない場合は人形を乗せて行くというところもある（河根）。喪主は行かない、という家もある（椎出）。

⑤ 持参する物 握り飯や団子を持って行く。辻に置くというところもある（中古沢）。犬に食べさせた、という人もいる（中古沢・河根）。握り飯は片手で握る（河根）。握り飯は竹の皮へ包む（中古沢）。

⑥ 行くときの作法 自宅を出発するときには、シキジで水を掛ける（椎出）。自宅・親戚の家などでオチャトをする。二か所ぐらいに寄る。傘を差していく家もある（椎出）。後ろを振り返ると未練を残して戻ってくるので、振り向かずに行くというところもある（椎出）。後戻りしないように行く（椎出）。谷の水のあるところで骨壺に水を掛ける（丹生川）。

⑦ 納骨する場所 菩提寺か奥之院へ行く。

⑧ 帰りの作法 納骨後、食事をする。オチツキといって帰りに親戚の家に寄ることもある（中古沢）。

⑨ 買って帰るもの 位牌屋で位牌を注文し、帰って帰る。高野山のまんじゅう、花坂の焼餅などを買って帰る。

⑩ 納骨後の供養 当日、家に帰ってから位牌供養をする。参ってくれた人を買ったまんじゅう・焼餅などを配る。盆には高野山に仏を迎えに行く。

九度山町域では真言宗の寺院・檀家が多く、高野山への納骨は一般的であった。基本的にはコツノボリと呼んでいる。周辺地域と違いがある点としては、葬式の翌日に行く、弁当を持つ、傘を差す、当日に位牌供養をする、などである。盆に先祖や新仏を高野山に迎えに行くことも特徴的である。町域内での地域差は認められなかった。

九度山町域の集落からは、歩いて高野山まで日帰りすることができる。新仏に限らず、八月一〇日は「十日登

り」と称して、高野山へ仏を迎えに行くこともあった。九度山町域の人々にとつて、高野山は祖霊の鎮まる霊山であり、コツノボリは死者が集落を見下ろす山に登って行くという感覚であつたと思われる。

## 五 かつらぎ町の事例

### 1 地域の概要

かつらぎ町は、高野山の西側から南側にかけて南北に長く伸びており、伊都郡に所属している。町域の北部には和泉山脈があり、その南に紀ノ川が東から西へ流れている。紀ノ川を挟んで北岸と南岸に平野部が広がる。紀ノ川南岸から山がそびえ、紀伊山地へと連なっている。江戸時代には、紀ノ川北岸は紀伊藩領、紀ノ川南岸から山間部にかけて高野寺領であつた。一方、花園地区は、高野山の南側に位置し、有田川の上流であり、山深い地域である。江戸時代には高野寺領であつた。平成一七年（二〇〇五）にかつらぎ町と合併した。

このように、かつらぎ町では、北部の和泉山脈山間部、紀ノ川平野部、中部の山間部、南部の山間部において集落の立地や歴史的背景が異なるため、民俗にも差があることが予想される。したがって、町域を広範囲に比較するため、北部山間部の四郷地区、紀ノ川平野部の妙寺地区と見好地区、中部山間部の天野地区、南部山間部の花園地区を調査対象とした。天野地区の調査は平成一七年（二〇〇五）から開始し、『丹生都比売神社史』の編纂調査、国学院大学日本文化研究所の調査、和歌山県の六斎念仏調査、近畿大学民俗学実習（平成一九年（二〇〇七）九月）などとしておこなない、神社の祭礼・地域の信仰・生業・年中行事などを調査してきた。その他の地区については、地域差を検討するために選択し、平成二八年（二〇一六）に集中的に調査をおこなつた。このときは、納骨習俗や盆行事などを中心に調査した。

かつらぎ町域の事例としては、四郷地区・天野地区・花園地区における報告がある。天野地区・花園地区の調査



地図3 かつらぎ町(国土地理院ウェブサイト地図に加筆)



は、五来重・日野西眞定がかかわり、四郷地区の調査は福田アジオ氏がかかわっている。先行研究の事例については地区ごとに紹介する。

## 2 四郷地区

『紀北四郷の民俗』には「第五章 人生儀礼」の「第四節 葬制」の「(二) 死後の供養」に「コツノボリ」が取り上げられている。「東京女子大学文理学部史学科民俗調査団 一九八五」。

コツマイリともいう。葬儀の翌日、高野山へ死者のオコツ（お骨）を紙に包んで持って行き、納骨堂に納める。オコツは男は左のびん髪と五本の爪、女は右のものであった。昔は四九日に行つたが、繰り上げて行っている。大久保では子どもが二〜三人で行く。途中、親戚の家でオチャトをしてもらう。死者の弁当として握り飯四つと梅干一つを途中に置いていく。高野山の宿坊は恵光院で、位牌を書いてもらって持ち帰る。帰りにどこかに寄って精進上げに飲食してくる。平では家の人と親戚の二〜三人で行く。オチャトをしてくれる店がある。オコツを出してチャトしてもらった。親戚で拝んでもらうこともある。死者の弁当として、小さい握り飯七つを紙か折に入れて、途中の道端に置いて、犬に食べてもらう。蓮華定院を宿坊とする家が多い。位牌は店で買って、インゲさん（檀那寺の住職）に戒名を書いて拝んでもらって持ち帰る。帰りに精進上げに飲食し、穢れをホガス。（筆者要約）

事例五——昔から「骨のぼり」という。「骨納め」、「高野のぼり」ともいう。土葬のときは、爪と髪の毛を半紙に入れて持って行った。インゲさんが左右を書いてくれた。昔はたいがい、葬式のある日に決まっていた。今は、四九日までの間に、都合のええ日に行くようになった。昔は「骨のぼり」の日に四九日をした。今は、四九日まで、家へ骨を置いている。四九日にインゲさんにきてもらって墓へ骨を納める。昔は、遠くから来る親類には泊まってもらった。何度も来るのは大変なので、繰り上げてあくる日に四九日した。「骨のぼり」は一人参るもんやないという。親類の人に行ってもらう。親類を手分

けして、高野山へ行く人と、粉河寺へ行く人に分けた。参ってくれてる間に、食事を準備した。インゲさんに来てもらう。粉河へも髪の毛と爪を持って行ったと思う。粉河寺の後ろの方に、納めるところがあると聞いた。艶子さんは行ったことがない。息子も行ったことがない。このごろは、粉河へは行かない。朝、参るときに、班の人がオチャトしにきてくれる。骨を出しといて、参るのを見送ってくれる。高野山へ行くまでに、親類などに寄って一服する。オチャトする。おにぎりを六個持って行く。梅干も六個。途中に供える。道の横に置くところがある。何も無いけど。谷みたいになっている。最近はおまりしない。草鞋は持って行かない。傘も持って行かない。「骨のぼり」までは白い位牌を祀っている。高野山で位牌を買ってくる。戒名を持って行き、数珠屋で頼む。宿坊でも位牌を作ってくれる。木村家の宿坊は恵光院。平は恵光院か蓮華定院。「骨のぼり」は、朝早く参って、昼に帰ってくる。歩いていったときのことは知らない。昼からインゲさんが来てくれて、墓へ白木の位牌を持って行った。高野山で買ってきた位牌には、オシヨネを入れてもらう。帰ってきたら、班の人は参らない。高野山から帰るじぶんにも、インゲさんが来てくれて拜んでもらう。参ってくれた人に、焼餅やら胡麻豆腐を持って帰ってもらった。班の人には配らない。マキは買ってこない。四九日のときに、残りの骨を墓へ納めに行く。その後、宿坊から、三年とか七年とかで連絡が来る。参るときもある。

平、木村艶子（昭和二年生まれ）、二〇二六年七月二三日聞き取り

事例五十二 葬式したら、座敷ついでに、親戚が来てくれているので、あくる日に「骨のぼり」をする。中谷家は蓮華定院。粉河へも手分けして参る。粉河へは髪の毛は持って行かない。高野山にだけ持って行く。

平、中谷肇（昭和一〇年生まれ）、二〇二六年七月二三日聞き取り

### 3 妙寺地区

事例五十三 「骨のぼり」という。葬式が終わって、あくる日に行く。喪主と、亡くなった方とかかわりの深い親戚が数人で



行く。行くときは、町内会の人が見送りしてくれる。オチャトみたいにお茶を供えてくれる。骨は入口へ持つてきてくれる。知り合いの家、三軒ぐらいに寄ってから高野へ登る。道すがらの家へ寄って挿んでいただく。白い布で骨を肩からかける。仮の位牌も持つて行く。おにぎりは記憶にない。傘や草鞋も知らない。関係のお寺へ行くか、奥之院へ行ってお参りする。その間に、位牌を作っていた。位牌をいただいて帰ってきて、仏壇に位牌をお供えして、町内会の方が集まって、その家でお経をあげる。その日の晩に供養する。弥勒石などを買ってくる。夜にお参りしてくれる人に出したりしている。ぜひしなくてはいけない、というわけではない。「骨のぼり」のあと、家族で墓へ参る。昔は近所の人が三日ぐらい必ず墓参りをした。今はよほど関係の深い人だけ行く。

妙寺、下村克彦（昭和一四年生まれ）、二〇一六年八月五日聞き取り

事例五―四 「骨のぼり」という。葬式のある日に行く。小麦粉で団子を作つて持つていく。自分は「骨のぼり」に行つたことがない。団子を並べてくれるという。どこに並べるか知らない。自分の家でオチャトしてから、親戚の家によつて、オチャトしてから行く。弥勒石や焼きまんじゅうを買ってくる。いろいろ買う。若い人は買つてくることを知らないの、家の近所でまんじゅうを買つて配つたこともあつた。マキは買つてこない。夜にインゲさんが参つてくれる。位牌のオシヨネを入れてもらう。垣内の人が参つてくれる。垣内の人を持つて帰つてもらふ。コウヤマキは、たまに高野山へ参ると買つてくる。近所に渡すこともある。

盆に高野には行かない。高野の寺は決まつていない。盆に粉河寺の施餓鬼には行かない。慈尊院の施餓鬼に行く人がいる。妙寺、妙中洋子（昭和一六年生まれ）、二〇一六年八月一三日聞き取り

#### 4 見好地区

三谷は紀ノ川南岸に位置する。三谷から三谷坂を上れば天野へと至る。

事例五―五 「骨のぼり」とい

う。葬式のある日に行く。

「骨のぼり」のときは、近所の人は来ない。親戚に寄ってオチャトする。二軒寄らなあかんという。シキビで骨壺に三回水をかける。おにぎりは持つて行かない。持つてくる人もいと聞いた。草鞋を持つて行くことはない。傘を持つて行くのは聞いたことがない。焼餅などを買つてきて、個人的にあげたこととはある。配らない。弥勒石をもらつたことがある。「買うてこんなん（こなければならぬ）」ということはない。マキを買つてくることもある。濃い家の人にはマキを持つて帰つてと渡したことがある。三谷にはマキはない。ここらでは枯れてしまふ。位牌を買つてくる。「骨のぼり」の晩にインゲさんが来て供養をする。

三谷、大倉一磨（昭和六年生まれ）・大倉妙子（昭和一一年生まれ）、二〇一六年七月二二日聞き取り

## 5 天野地区

天野地区には、天野・志賀・新城の集落がある。紀ノ川平野からひと山越えたところに天野盆地がある。山間部



写真5-1 三谷の集落と三谷橋（この山を越えると天野になる）(2016年8月)



写真5-2 他家のコツノボりに際してオチャトを準備する（かつらぎ町三谷、2008年8月、大倉一磨氏提供）

の小盆地である天野には、高野山の地主神である丹生都比売神社が鎮座する。歴史的に高野山との結びつきが深く、江戸時代までは神社周辺の上天野に高野山の僧侶が冬期に過ごす里坊が立ち並んでいた。

天野の納骨習俗については報告が多数ある。最も古いものとしては、高野山大学歴史研究会の『仏教民俗』に「骨登り」という記述がある〔土生川 一九五二〕。当時、高野山大学の教員であった五来重の指導のもとに採集されたものと思われる。

納骨は近親親族衆の中より二人以上高野山の奥院に参る。必らず羽織を着て、洋傘を所持するの慣例がある。途中親類一ニヶ所へ立ち寄り、茶湯の供養を受ける。握飯三個宛三包を携帯し、途中亡者のためにも又餓鬼共へ供養する。道中では「サア押上石迄来たよ。此処は早や鏡石だ」などと生けるものに物云ふ如く教えながら登山するのである。又護摩壇付近では必ず溪谷の冷水を手向ける。高野山で各家の宿場（筆者注・宿坊のこと）へ立寄って回向を頼むもあり、奥の院へ直接納骨するもある。位牌を誂へて持ちかへる。

天野小学校の教員がまとめた『伊都郡の隅から隅』では「出産・婚礼・葬制」のなかに報告がある〔大西 一九五六〕。

葬式の次の日、血の濃い者は骨を持って高野に納めに行く。「骨ノボリ」という。仏のための弁当を三つ作る。天野では、神田道の弘法大師の碑のところ、花坂の不動野の水の湧いているところ、五十町坂の「ごまざん」というところ、の三か所で弁当を供え、水を向けて拝む。

（筆者要約）



写真5-3 下天野から高野山への登り口（2007年9月）

近畿民俗学会の天野調査でも納骨のことが記録されている。天野共同調査報告(一)の「葬制・墓制」には、葬式の翌日は高野へ行くこと、これをコツノボセということが記されている〔近畿民俗学会編 一九八〇b〕。天野共同調査報告(二)の「葬制・墓制補遺」にはやや具体的な記述がある〔近畿民俗学会編 一九八〇c〕。

湯灌のときに、死者の髪の毛・爪を切る。これは高野山へ「骨上げ」に持って行く。葬式の次の日、死者の髪と爪を持って高野に参る。一人では魔がさすといつて必ず二人で行く。弁当・団子を持って行く。途中、ゴマダン、シズクノタチ(五十町街道にある)の二か所で水向けし、供える。帰りに本位牌を買ってくる。(筆者要約)

なお、天野の神道の家では「骨上り」はないという記録もある〔和歌山県教育委員会社会教育課 一九六五〕。

事例五一六 高野山へ参るのは、御影会と盆の一日と人が亡くなったときの「骨のぼり」だった。新盆のときは盆の一日に十日登りをしたが、それ以外でも参る家もあった。天野から高野へは歩いて三時間もあつたら行く。八時ころに出て昼前には着いた。土葬のときも今も、葬式のある日に行く。宿坊は家によって決まっている。古谷家では別の宿坊であつたが、無量光院の住職が古谷家の親戚にあたるため、無量光院に変えた。奥之院には納骨せず、宿坊に納骨する。遺髪・爪を左と右に切り分けて、二つの袋に入れて首から掛けて登った。半紙を折って袋にし、元結に通して首へかけてぶらかった。納骨のときには、握り飯をこしらえて、途中の水の流れているところがあつたら骨に水を手向けて、握り飯を「犬の餌」といつておいてくる。今では、花坂より上の左側に、水溜をこしらえてくれる。握り飯はその辺におくといけなから、山へ投げ込む。昔は髪と爪を奥之院の納骨堂に投げ込んだ。高野では位牌を買ってくる。戒名を刻んでもらう。その日の夜には家で位牌供養をする。オシヨネ入れをする。

下天野、古谷敏晴(昭和一七年生まれ)、二〇〇七年三月三日聞き取り

事例五一七 高野には葬式のあと「骨納め」にも行った。

下天野、堂坂政弘(大正一三年生まれ)、二〇〇七年九月二日聞き取り

事例五―八 高野山へは歩いて行ったことがある。不動野から山へ入った。「骨のぼり」に行ったとき、休憩で骨を忘れていったのを見つけて、枝を吊っておいた、という話を聞いた。奥之院へ行ったらどうするんやろ、といっていた。「骨のぼり」は葬式のある日に行く。今では火葬が多くなってきた。土葬のときは、髪と爪を持って行った。ふだんは、足の爪と手の爪をいっぺんに切るなどという。帰ってきて、位牌供養がある。手伝ってくれた人に集まってもらおう。四〇〜五〇人は手伝いにきてくれる。四九日は垣内（大字のなかに存在する）だけ来てもらう。

下天野、奥沢甚兵衛（大正一〇年生まれ）・奥沢佐江子（昭和三年生まれ）、二〇〇七年二月七日聞き取り

事例五―九 通夜のときに故人の爪と髪の毛を切って、高野山の奥之院へ納めるために、葬儀の翌日に「骨のぼり」をおこなう、高野山に参る。葬儀の二日後に「骨のぼり」をする家もあり、家によって時期は異なる。故人と血の濃い人々が四・五人で向かう。握り飯を五個、弁当として持って行き、高野山への道中の沢に置いていく。昔は五つの沢に握り飯を一つずつ置いていったが、今は一か所の沢に握り飯を五つ置いておく。昔は握り飯と一緒に幡を立てていったこともあった。高野山に爪と髪を納め、位牌を受け取って帰ってくる。「骨のぼり」の日の夕方に垣内の葬儀の参加者や親戚を招き、位牌供養をおこなう。

下天野、上野寛万（昭和二年生まれ）、二〇〇七年（聞き取り…足立大輔）

事例五―一〇 神田からは一緒に高野へ参ることはなかった。あんまり膝元すぎて。死んだ翌日に「骨のぼり」に行くぐらい。高野へ行って、位牌に戒名を彫ってもらおう。奥之院の納骨堂に髪を納めてくる。喪主や親戚が五・六人で行く。車がないときは歩いていった。



写真5-4 下天野（神田）から花坂方面を望む（2007年5月）

町石道を通って高野山へ参る人が、晩になって泊めてくれと言ってきて、北さんの親が泊めたことは知っている。町石道からは北さんの家が一番近かった。昭和一五・六年ごろか、晩になって、女の人が北さんの家に来たことがあった。東京の方の女の人で、一人息子を亡くして、息子さんの遺骨を持って高野山へ参る途中だった。親は、そういうことであればとチャト(茶湯)をしてあげた。女性は喜んで、息子と一緒にいるので怖くないと、北さんの親から火を借りてそのまま高野山へ上がっていった。その後、その女性はお礼を送ってきた。また、夜に手帳を落としたといって、北さんの家に来て、親と一緒に探したこともあった。

下天野(神田)、北康吉(昭和二年生まれ)、二〇〇七年五月二一日聞き取り

事例五一一 「骨のぼり」。葬式のある日に行く。矢立から五十町を歩いた。死者の爪・髪の毛を包んで、腹がへったら悪いといつて、にぎりこを藁で包んで行った。新城の少し上流で、木の枝にぶらさげとった。奥之院の納骨室に地下室があった。無料で髪の毛や爪を納骨した。歩いて参ったとき、「お日さんに骨を当てるもんでない」といって、日傘をして行った。終戦後ぐらいまでしていた。兵隊から帰ったときもしていた。道中の身内のところ、祭壇をこしらえて、オチャトをしてもらう。なるべく新城領内でお願した。縁へ祭壇をこしらえて、その家の人がオチャトをしてくれる。今でもやっている。

このへんから奥之院まで三里。月に一回か二回、ソウジ(雑事)をした。野菜を天秤棒で担いで、奥之院へ奉納した。高野山へ野菜を売りに行く人も多少はいた。藁草履を作って、納めに行ったり、売りに行ったりした。高野山へは毎月二日に参ったり、ミエク(御影供)にも参った。

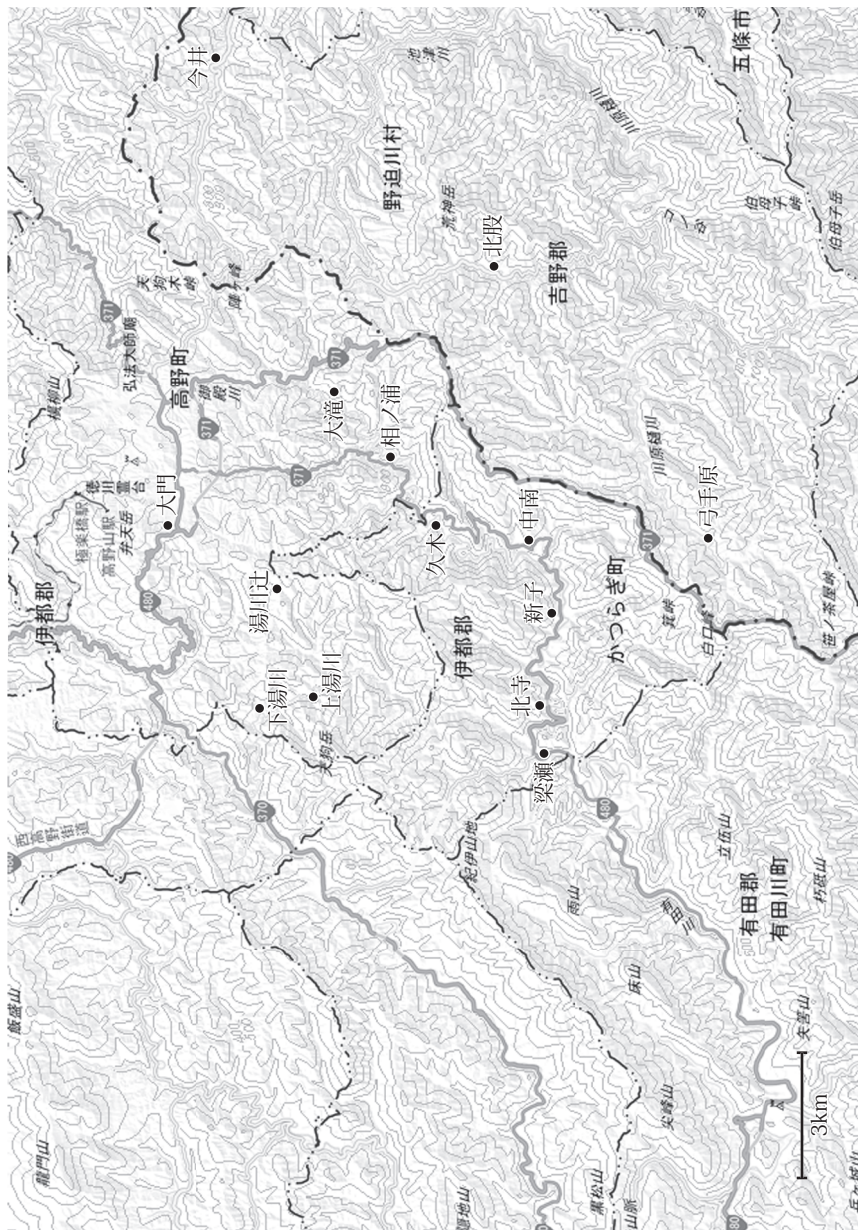
新城、浦正造(大正二一年生まれ)、二〇一一年九月一四日聞き取り

## 6 花園地区

花園地区は高野山の南麓に位置し、有田川の上流域にあたり、周囲とは隔絶された山深い地域である。納骨習俗



高野山納骨習俗の地域差



地図4 かつらぎ町花園地区 (国土地理院ウェブサイト地図に加筆)

に限らず、かつらぎ町の他地域とは異なる民俗がみられる。

五来重は終戦後まもなく、花園村梁瀬やなせにおいて、コツノボセから帰ったときの仕上げ法要を見たことがあるとい、以下のように記している〔五来 一九五二〕。

梁瀬から高野まで往復六里で、コツノボセに行った二人は夕方帰ってきた。親族の者が大勢待っていて、二人を出迎え、すぐに本堂の横の墓地に行った。住職が読経をし、杓子塔婆やくしとうばが立てられた。（筆者要約）

日野西眞定も花園村の事例を以下のように紹介している〔日野西 一九八二〕。

葬式の翌日、死者の髪の毛の一方を奥之院へ納める。もう一方の髪は詣り墓へ納める。家を出発するとき、親戚などが別れの茶湯に来る。藁苞わらぼうに握り飯一つを入れた弁当と草鞋を持って行く。骨を掛けた者は必ず傘を差す。高野山に入ってから、食堂や位牌屋に立ち寄り、茶湯をする。金堂・御影堂・大塔など、壇上のおもだった堂塔を参り、位牌屋に寄って漆塗の位牌を注文する。奥之院へ参り、納骨堂に骨を納める。（筆者要約）

なお、日野西は村はずれの沢に死者の弁当と草鞋を置いている写真、「骨のぼせ」の人々が大門より高野山内に入ったところの写真も掲載している。後者の写真では、骨を首から掛けた人が傘を差している様子が写っている。

このほか、和歌山県民話の会は、昭和五八年（一九八三）に高野町・花園村の民話などを調査している。「生活譚」の「葬制」に以下の六例の「骨のぼせ」が収録されている〔和歌山県民話の会 一九八五〕。

・葬式のある日に骨をのぼせに行く。必ず半目（奇数）で行く。三人か五人で行く。亡者を入れて偶数になるようにする。一人では行かない。ホデを作り、握



写真5-5 花園梁瀬の集落と有田川（2016年8月）



り飯三つを入れる。ホデの先は木に掛けられるようにする。ホデと草鞋一足は、家を出てから渡った水のある谷の向こうの木の枝に掛ける。魔物が亡者についてきても、弁当を見てそこからついて来なくなる。ほかに犬の弁当も作る。昔は高野山まで持って行つて、高野の犬に食わせるといった。これは紙に包んで持って行く。(筆者要約)

花園梁瀬、芝純一(大正元年生まれ)

・右のビンの毛を高野山、左のビンの毛を地元の墓へ納めた。握り飯をポケットに入れて高野山へ持って行くと、犬は「お骨のぼせ」やと知っていてついてきた。握り飯を犬にやった。(筆者要約)

花園北寺、田首丑之助(明治三五年生まれ)

・高野山に行くことを「高野登り」といった。納骨に行くことは「骨登せ」という。葬式の翌日に行く。久木では、死者の頭の左右の毛と手足の爪を取り、紙に包んで元結で吊り紐をつける。葬式のとくに僧侶に拜んでもらう。おにぎり三個を藁のホデに入れた。今は半紙に包む。ふだん、おにぎりを三つ作ること、手足の爪を同時に切ることは、死んだときにすることだといつて嫌う。行く人は、死人に血縁の深い人が二人以上で多い家では四・五人行く。骨を持つた者が途中で不浄に行くときに交代するために何人も行く。家を出るときにはお茶湯をする。道中、骨に日光が直接当たると悪いといつて、骨を持つ人は唐傘かこうもり傘を差して行く。尾城の谷のかたわらに草鞋一足とおにぎり一つを置き、鳥渡り谷にはおにぎり一つを置き、大門の手前の水呑という谷にも置く。大門を通るときは必ず中央を通り、高野の町の茶店で茶湯をして奥之院の納骨堂に納める。帰りに仏具店で位牌を買い戒名を彫ってもらう。納骨に同伴した者は酒食をし、近所の人や僧侶が位牌を拜む。(筆者要約)

花園久木、大前重子(大正六年生まれ)・朝本ハナエ(大正二年生まれ)・杉本敏雄(大正六年生まれ)

・どこの家でも「骨登せ」をする。葬式の翌日に行く。死人の左右の髪と手足の爪を切り、半紙に包んで戒名俗名を書いておく。葬式のときに僧侶に拜んでもらう。身近な人が二人以上で行く。遺髪の包みに元結で紐をつけ、首に掛けて行く。家を出

る前に茶湯をする。おにぎりを四つ握り、それぞれ半紙に包む。シキミの枝四本と、稲藁で作った輪四つを持つ。藁の輪はおにぎりよりも少し小さい。高野までの道中において、小さい滝のような水の落ちているところ四か所、藁の輪の上におにぎり一つを置き、シキミを一本立てる。大門を通り、高野の町の茶店で茶湯をし、奥之院の納骨堂に納める。位牌を買ってくる。「骨登せ」の人が帰ってから拜む。ふだんはおにぎり四つ握ることを嫌う。(筆者要約)

花園中南、阪本タツエ(明治二十九年生まれ)

・葬式のある日に「骨のぼせ」となっている。首へ骨を掛けている人だけは天気でも傘を差している。お日さんに見せたらいかん、という。弁当は途中の無縁仏や餓鬼仏に、「今日から仲間入りさしてもらおう」という挨拶でお土産に持って行く。握り飯を四つ半紙へ包み、途中の水のあるところへ置いて行く。ゲンガクレ、走りの田の出水のあるところ、辻の茶屋の井戸のかたわら、湯川辻と大門の中間の水呑の四か所に置いて行く。下の清水町の方の人は草鞋や苞を置く。(筆者要約)

花園中南、上田秀雄(明治三十六年生まれ)

・弁当を四つ作り、半紙に一個ずつ包み、水のあるところに供える。骨に「水飲めよ」といって、シキミの葉で水を三回掛ける。草鞋は作らない。(筆者要約)

花園中南、西康允(昭和三年生まれ)

事例五——二 「骨おさめ」「骨のぼせ」。三人から五人で行く。葬式のある日に行く。コウモリ傘を差した。骨を持った人が交代で差す。草鞋とおにぎりを持って行く。酒まんじゅうを買ってきて配る。南峰堂の酒まんじゅうを買う。マキを配ることはない。帰ると位牌供養をする。位牌には袋をかぶせておき、速夜ごとにちよっとずつ上げもっていく。四九日に袋を取る(五前)。



写真5-6 高野山の酒まんじゅう (2017年6月)

「骨のぼせ」。傘を差して行く。お日さんに遠慮して傘を差す(西)。

「骨のぼせ」。「骨をのぼす」、という。葬式のある日に行く。いくら天気でも傘を差した。草鞋とおにぎりを持って行く。帰った晩に、村の人に来てもらって位牌供養をする(佐古)。

「骨のぼし」。傘を持って行った(尾方)。

「骨おさめ」。「骨のぼせ」。横山さんは、新子では「骨のぼせ」をしたことはない。今は下で葬式をするので、位牌供養はしない(横山)。

花園地区、横山小良(大正一二年生まれ、花園新子、出身は有田川町杉野原)・五前光司(昭和三年生まれ、花園久木)・佐古百合子(昭和四年生まれ、花園梁瀬)・尾方ユウウ(大正一四年生まれ、花園梁瀬)・西正江(昭和五年生まれ、花園中南、出身は花園久木)、二〇一六年八月一九日聞き取り

事例五——三　納骨は「骨のぼせ」という。葬式のある日に行く。土葬のときは、髪の毛と爪を持って行った。見送りに来る。オチャトして行く。弁当を持っていく。おにぎり三つか四つと梅干し。谷川など、水のあるところへ置いていく。草鞋はあんまり持って行かない。弁当が多い。草鞋は掛けているのは見る。傘は知らない。持って行かない。今は車で行く。ほとんど奥之院へ直接行くことが多い。大谷さんの家の寺は常喜院。中南は常喜院が多い。最近は安くつくといって、直接奥之院へ行く人が増えている。高野で位牌を買ってくる。位牌を作るのに、紙に戒名を書いて持っていく。その晩に位牌供養をする。自分たちだけです。昔はまんじゅうを買ってきた。高野山のまんじゅう。マキは自分とこにあるので買わない。

花園中南、大谷岩男(昭和二四年生まれ)、二〇一六年八月一八日聞き取り

事例五——四　納骨のことは、「骨のぼせ」という。「丁で行って、半で戻る」という。二人と骨で三人で行く。納めて帰るので、帰りは二人になる。昔は、おもに爪を持って行った。髪の毛も持って行った。弁当を持って行った。辻々の水の出るところへ、小さい握り飯を二つずつ供える。仏さんが弁当を食べもて(食べながら)行くという。高野山までに三か所ほど、飲

み水があるところがある。三か所で供えて行った。草鞋も水の出るところに吊った。仏さんが履いていくという。このごろは車で行くので薄れた。家の入り口のところから、傘を差した。仏さんが、「お日さんまぶしい」といつて傘を差す。骨を首から吊って持つていく。その人が傘を差していく。骨を持つている人だけ、高野まで傘を差して行く。「骨が傘を着ていく」という。身内は、オチャトして送り出す。奥之院へ行って、戻りに宿坊に行った。チュウジキしてもらおう。拜んでもらい、過去帳に載せてもらおう。福本家は常喜院。

村の檀那寺も常喜院。祖父の代まで、檀那寺へ野菜を納めた。高野に登るときは、寺へ寄つて野菜を持つていくことになつていた。盆は八月一〇日に市があつた。仏さんを迎えに高野には行かない。買いもんだだけ。

花園中南、福本儀一（大正一三年生まれ）・福本幸子（昭和五年生まれ）、二〇一六年八月一八日聞き取り

事例五一一五 「骨のぼせ」という。「高野参り」ともいう。「骨のぼり」とは言わない。葬式のある日に行く。土葬だったので髪の毛を持つて行った。上東さんは親戚のときに行った。家を出て、出会う最初の谷、水のあるところへ草履をかける。弁当も持つて行った。向こうへ旅することと思う。傘は知らない。記憶ない。高野山にお寺がある。家によつて違う。今は通知も来ない。仏壇屋で位牌を作ってもらおう。位牌ができるまでごちそうを食べた。「骨のぼせ」してきたら、地区の人に集まつてもらつて、位牌供養をする。墓掘りが一番上座に二人座る。酒まんじゅうを買つてきて位牌供養のときに配る。マキは配らない。

花園北寺、上東秀明（昭和三年生まれ）、二〇一六年八月一九日聞き取り

事例五一一六 骨のぼし。葬式のある日に行く。土葬だったので髪の毛とかを持つて行った。草鞋・弁当を途中でつらくする（吊るす）。水の流れてるところへつらくつて（吊るして）拜む。弁当はにぎりこをこしらえる。行きしなに（行くときに）位牌を頼んで、帰りにもらつてくる。

高野山まで三里あまりあつた。歩いたら三時間ぐらいか。高野山に買い物に行った。一番の場所だった。花園は高野山がな

かつたら成り立たなかった。

花園梁瀬、山内莞治（昭和四年生まれ）、二〇一六年八月一九日聞き取り

7 かつらぎ町における納骨習俗の特徴

事例から特徴をまとめると以下ようになる。

① 名称 コツノボリ・コツノボセ・コツノボシ・コツオサメ・コツマイリなどという。花園以外の地域ではコツノボリが一般的であるが、花園ではコツノボセ・コツノボシ・コツオサメなどという。天野ではコツノボセという人もいた。

② 日程 葬式の翌日に行く。大久保・平では、四九日に行つたというが、四九日は葬式の翌日に繰り上げておこなつたという。

③ 納骨するもの 土葬のときは髪・爪を持って行つた。首から掛けて登つた（下天野）。今は骨の一部を持って行く。白い布で首から掛けて持つて行く（妙寺・花園中南）。

④ 行く人 故人の子どもが二～三人で行く、数人で行く、などといわれる。一人で参るものではない（平）、一人では魔がさすといつて必ず二人で行く（天野）、という人もいる。仏を入れて三人で行つて、二人で帰つてくることを「丁で行つて、半で帰る」と語る方もいる（花園中南）。

⑤ 持参する物 握り飯・団子などを持って行く。握り飯を「犬の餌」（下天野）、犬に食べさせる（平）、という人もいる。「死者の弁当」（大久保・平）、仏の腹が減つたらいけない（新城）、「仏さんが弁当を食べもて行く（食べながら行く）」（花園中南）というところもあった。妙寺・三谷では弁当は持つて行かない人もいる。草鞋を持つて行くところもあるが（花園）、花園以外では草鞋は持つて行かない。「仏さんが履いて行く」（花

園中南」と語る人もいる。

- ⑥ 行くときの作法 自宅・親戚の家などでオチャトをする。三軒ぐらいという言い方もされるが(妙寺)、必ず二軒は寄るといふところもある(三谷)。傘を差していく家もある(新城・花園)。理由としては、「お日さんに骨を当てるもんでない」(新城)、「お日さんに遠慮する」(花園中南)、「仏さんがお日さんまぶしい」(花園中南)などと語られる。天野では洋傘を所持したという。仏に話しかけながら行くところもある(天野)。二か所、もしくは三か所の決まった場所で弁当を供え、水を手向ける、という家もあるが(天野)。道中の水の流れているところに骨を置き、水を手向けるという人もいる(下天野)。花園の人たちは、水の流れているところへ草鞋・弁当を吊るした。新城でも握り飯は藁で包み、木に吊るした。

- ⑦ 納骨する場所 菩提寺か奥之院へ行く。最近では奥之院へ行く人もいる。

- ⑧ 帰りの作法 納骨後、高野山で食事をする。帰りに飲食をし、精進上げをするところもあった(大久保・平)。これは穢れを落とす意味があったように思われる。

- ⑨ 買って帰るもの 位牌屋で位牌を注文し、帰って帰る。高野山のまんじゅう・胡麻豆腐、花坂の焼餅などを買って帰る。花園地区の人たちは、大門近くの酒まんじゅうを買うことが多かった。

- ⑩ 納骨後の供養 当日、家に帰ってから位牌供養をする。買って帰った位牌にオシヨネを入れてもらう。参ってくれた人に、まんじゅう・胡麻豆腐・焼餅などを配る。コウヤマキを濃い親戚に渡すということもある(三谷)。位牌供養後も位牌には袋をかぶせておき、連夜ごとに少しずつ袋を上げていき、四九日に袋を取るところもあった(花園久木)。初盆には高野山へ仏を迎えに行くところもあった(下天野)。

かつらぎ町域では紀ノ川平野に真言宗以外の寺院・檀家が存在するが、山間部には真言宗の寺院・檀家が多い。

高野山以外への納骨もあると思われるが、町域全体でみれば、高野山への納骨習俗が広がっている。かつらぎ町域では納骨習俗の地域差が顕著である。花園地区ではコツノボセというが、その他の地域ではコツノポリという。町域での共通点としては、葬式の翌日に行く、弁当を持つ、当日に位牌供養をする、などである。紀ノ川平野部では弁当は持参しない家もある。草鞋を持参するのは花園地区のみである。新仏を高野山に迎えに行く事例を確認できたのは下天野のみであった。

かつらぎ町域は、①和泉山脈山間部、②紀ノ川平野部、③中部山間部、④南部山間部、に大別される。③・④は高野町などと同様、高野山に徒歩で日帰することができると山間部の集落であるため、信仰面・経済面で高野山との結びつきが深かった。これらの地域からは、昭和二〇年代までは徒歩で高野山まで歩いてきた。コツノポリ・コツノボセは身近な霊山に死者が登って行く感覚であったと思われる。

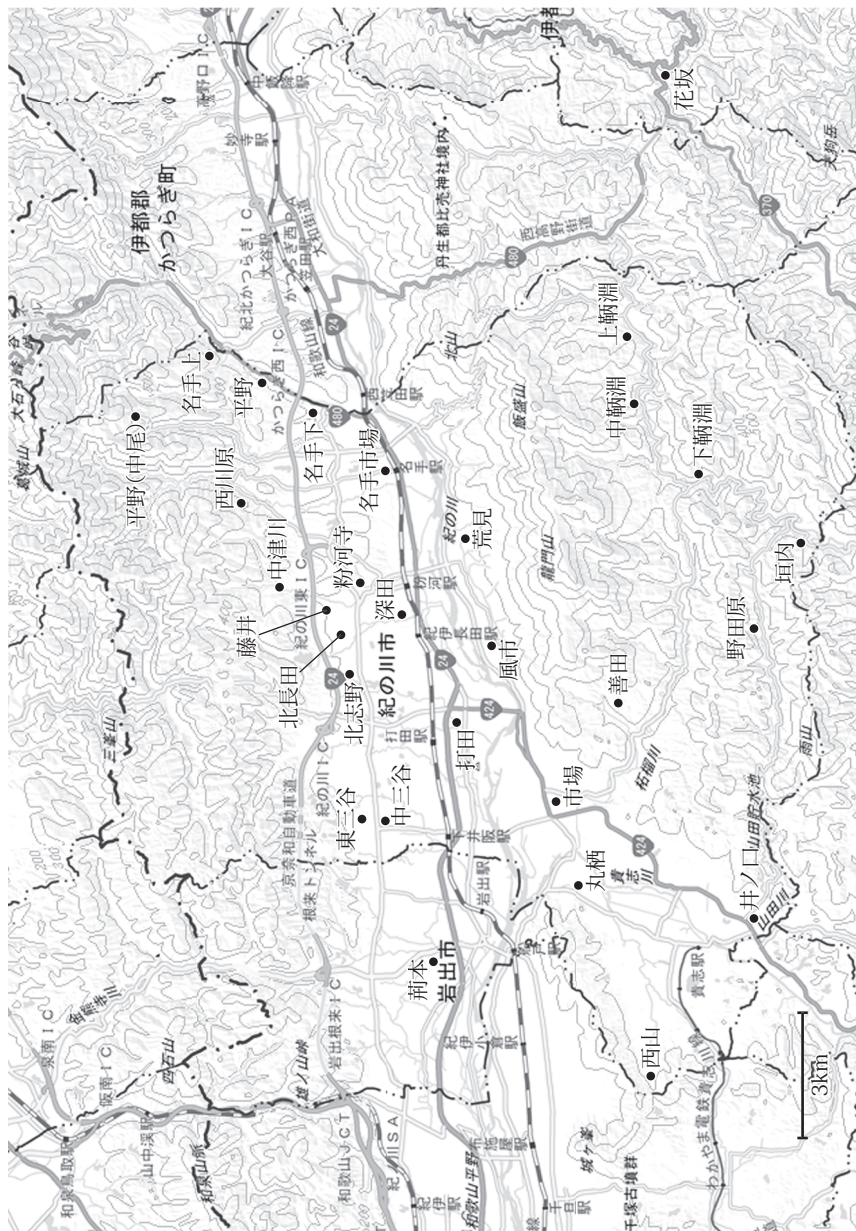
それに対して、①・②は高野山まで徒歩で日帰りはやや厳しい地域である。初盆に高野山まで仏を迎えに行くこともなかった。高野山への街道も通っていて、経済的な結びつきもないわけではないが、明治以降は高野山参詣の玄関口ではなかった。<sup>(2)</sup>①では高野山への納骨と同時に紀の川市の粉河寺へ参詣することもあった。また、①・②では盆に粉河寺の施餓鬼に参る人もいる。このように、①・②の地域では、死者の霊が集まる身近な霊場は粉河寺であって、高野山はやや遠い霊山という感覚があつたように思われる。

## 六 紀の川市の事例

### 1 地域の概要と先行研究

紀の川市は、那賀町・粉河町・打田町・桃山町・貴志川町が平成一七年(二〇〇五)に合併してできた。これらの地域はすべて那賀郡に所属していた。紀ノ川上流域に位置する伊都郡に対し、那賀郡は紀ノ川中流域になる。伊





地図5 紀の川市・岩出市（国土地理院ウェブサイト地図に加筆）

都郡よりも平野が広くなり、気温も高い。したがって、稲作やみかん栽培が盛んである。伊都郡とは盆行事や食文化など異なる点も多い。

地域の北部には和泉山脈があり、その南に紀ノ川が東から西へ流れている。紀ノ川を挟んで北岸と南岸に平野部が広がる。紀ノ川南岸から山がそびえ、紀伊山地へと連なっている。江戸時代には、紀ノ川北岸は紀伊藩領、南岸から山間部にかけて高野寺領であった。貴志川流域では、東岸に高野寺領があったが、西岸は紀伊藩領であった。

紀の川市域では、旧粉河町の瀬淵地区で平成十一年（一九九九）～十三年（二〇〇一）に和歌山県立博物館の特展「歴史のなかの『ともぶち』」協力調査として年中行事の調査をおこなった。旧那賀町の上名手地区では平成二六年（二〇一四）に静川荘地域の民俗調査の一環として調査した。その後、紀の川市では、平成二七年（二〇一五）に集中的に調査をおこなった。紀の川市域では、北部の和泉山脈山間部、中部の紀ノ川平野部、南部の山間部、貴志川流域において集落の立地や歴史的背景が異なるため、民俗にも差があることが予想される。このため、旧町ごとに調査地を選定するとともに、北部山間部、紀ノ川平野部、南部山間部、貴志川流域という地形上の問題も念頭において調査対象地を選び、盆行事や納骨習俗を目的としておこなった。

紀の川市域における納骨習俗の事例としては、『郷土研究』に掲載された与田倉之助の「骨上り」の事例がある。これは旧打田町の事例である。このほか、紀の川市では旧町ごとに編纂された町史や、近畿民俗学会の報告のなかで納骨が紹介されていることがある。とくに、『粉河町史』では地区ごとの事例を示すとともに、納骨習俗の特徴についても記述がある。

## 2 旧那賀町地域

旧那賀町の北西部に上名手地区がある。上名手地区には名手上・平野・名手下の大字がある。中尾は平野に所属

するが、集落としては平野とは離れており、和泉山脈の山中に立地する。名手市場は旧大和街道沿いにある町場である。

事例六一 「骨のぼり」という。葬式のある日に行く。土葬のときは髪の毛・爪を持って行った。心安い家に寄ってオチャトしてもらう。高野山で位牌を頼んでから寺へ行く。位牌を買うところでも、「オチャトしましよか」という。帰りに位牌はできている。宿坊がある家もない家もある。最近はお泉院へ行く家が多い。鈴木さんの家は童泉院。日拝・月拝など、いろいろある。にぎりこを持って行った。一の橋から奥之院へ行く墓場のところで、にぎりこを置いた。「犬に食わず」といった。にぎりこは若いころにしていた。マキや花坂の焼餅を買ってくる。配るところもあるが、必ず配ることはない。帰ってきた晩に、坊さんが来て位牌にオシヨネ入れてくれる。班の人が晩に拌みに来てくれる。その折に焼餅を出す。年忌は高野でする人が多い。宿坊へ行く。

初盆には高野へは行かない。八月九日に粉河の施餓鬼に行く。たいがい参った。暗がりに起きて参った。鈴木さんは歩いて参ったことはない。車で行った。粉河寺で経木を書いてもらって、シキビの枝で水向けをする。このごろは坊さんがいる西光寺へ参る。西光寺のオッサン（住職）が施餓鬼用と家用の経木を持ってきてくれる。このごろは粉河へは行けへん。

なてがみ 名手上、鈴木裕昭（昭和三年生まれ）、二〇一四年三月二十八日聞き取り

事例六二 「骨のぼり」という。高野山に寺がある。平井さんの家は清浄心院。みな寺は違う。「骨のぼり」は葬式が終わってあくる日に行く人が多い。平日になると土日に行く。亡くなった人に関係のある家に寄って、オチャトしていただく。だいたい三か所くらい寄る。奥さんの実家とか、子どもとか、血の濃い人の家に寄る。だいたいある。なかつたらもうちょっと薄いところへ行く。祭壇をこしらえてもらって、お骨を置いて、お茶を手向けてもらう。その家の上へは上がらずに、縁側でする。通る道は下つたらあかんと聞いている。今もやっている。だんだん高野山へ近づいて行く、同じ道を通らんと行く、という。おにぎりを持って行く人もいる。平井さんはしなかった。撒きもて（撒きながら）行く。功德しながら行く。位牌は高野

の仏具屋で買ったり、下の仏具屋で買ったりする。寺へ行って骨をあげて、奥之院は参るだけ。お寺さんがない方は奥之院へ行く。「骨のぼり」は亡くなった人の血の濃い人たち四・五人で行く。車一台で行く。子どもとか孫が行く。祖母のときは平井さんが行った。精進上げをして帰ってくる。マキや焼餅を買ってくる。どちらかを買う。今でも買う。班内だけ配る。高野の寺からは何回忌とかに連絡が来る。お参りに行く。

初盆には高野山には行かない。盆前に粉河に施餓鬼参りに行く。八月九日。経木を書いてもらう。おまつりして、水向けてくる。経木は買ってこない。奥さんは、おばあさんが亡くなったとき、粉河へ参った。母は毎年参っている。粉河まで七キロぐらい、歩けば一時間半ぐらいか。

平野、平井國男（昭和二八年生まれ）、二〇一四年三月二八日聞き取り

事例六一三 「骨のぼり」という。焼いてきて、あくる日に行っている。四九日すむまで祀る骨と、高野へ持って行く骨に分けておく。おいておく骨は、四九日までおいておき、四九日がすむと墓へ入れる。「骨のぼり」は身内で行く。昔は犬の弁当を持って行った。高野には野良犬がどっさりいた。犬に弁当を持って行ってやるといった。伊藤さんの家の持ち寺は常喜院。寺を指定していない家は奥之院へ直接行く。寺があるときは寺へ行ってから奥之院へ行く。奥之院へ行っている間に位牌を作ってくれる。高野の町で精進上げをして帰る。車がないときは電車で行った。歩いて行ったら寺で泊まった。土産にコウヤマキを買って帰る。印に買う。近い者に配る。焼餅は好き嫌いがあるので買わない。高野では日拝・月拝などがある。命日が来たら連絡が来る。命日にお参りする人も多い。

盆には高野へ行かない。八月九日、粉河に施餓鬼参りに行く人もいる。

平野、伊藤誠紀（昭和一五年生まれ）、二〇一四年六月二七日聞き取り

事例六一四 高野山は「骨のぼり」に行くぐらい。丁寧な人は一回忌などにも行く。亡くなったあくる日に「骨のぼり」に行った。トウヤ（遠く）から来ている人がまた来んなので、もう一晩泊まってもらって、待っていてもらって、「骨のぼり」

をしてきた。繰り上げて四九日をすることもあった。ひと七日で繰り上げて四九日をする人もあった。「骨のぼり」する人が帰ってくるのを待つて、精進上げをした。暗くなっても待つていた。汽車で行った。「骨のぼり」は四九日までに行った。一人で参るわけにいかないので、子どもが都合をつけて帰ってくる。今の坊さんは、車で行けるのだから、「四九日まで待つたれ」と言う。昔の人は初七日には行った。土葬のときは髪の毛を切つて、骨の代わりに持つて行った。弁当を持つて行った。喫茶店に寄つてオチャトしてもらう。二・三か所寄つて、おにぎりを川のはたへ供えた。最近はカラスが来るといつて、怒られる。道のほかすところは決まつている。谷があるので、水が流れているところでは骨とおにぎりを置く。おにぎりは仏に供える。置いてくる。草鞋はしていない。竜泉院に行くまでに位牌屋に寄つて注文して、骨を寺へ納めて拜んでもらつて、飯を食べてくると、位牌ができてくる。最近、竜泉院に行かないで、奥之院へ行く人が多い。親戚などに、焼き餅や胡麻豆腐を買つてくる。あいそで買つてくる。中尾は配らない。林ヶ峯ではマキを配っている。中尾では山にビシヤコとかいくらでもある。マキもある。仏さんに供えるぐらゐのマキはある。わざわざお金を出して買つてくることはない。

平野（中尾）、中林誠一（昭和一八年生まれ）・西岡秀和（昭和二四年生まれ）、二〇一四年三月二四日聞き取り

事例六―五 「骨のぼり」は確実に行く。葬式のある日に行く。土葬のときには髪の毛と爪を持つて行った。道中の道端に握り飯を置いた。「餓鬼にやる」といつた。餓鬼はより所がない霊。カラスが寄ってくるし、やめてくれといわれるようになった。握り飯を置くのはやめた。オチャトする。ポットへ熱いお茶を入れて持つて行き、ろうそくを立てて、手を合わせ



写真6-1 平野（中尾）から高野山方面を望む（2014年3月）

て、土手へお茶をほかず。場所は決まっていらない。草鞋を持って行くのは知らない。「骨のぼり」は今でも行く。小さい骨を持って行く。高野山の菩提寺に持って行った。菩提寺はみんな違う。入江さんは菩提寺はあるが、奥之院へ持って行った。位牌は高野山で作ってもいいが、かつらぎ町で作る人もいた。位牌を買ってきて、坊さんにシヨネを入れてもらう。白い飯の位牌は坊さんが持って帰る。四九日などにシヨネを入れてもらう。

骨のぼりのときに、コウヤマキを買って帰る。マキの木一本と焼き餅のまんじゅうを近所に配る。仏のないところは焼き餅のまんじゅうを配る。一班だけとか。葬式のときに手伝ってもらっているから配る。今でもやっている。

盆に高野山に行くことはない。初盆にも行かない。

名手<sup>なて</sup>下<sup>もと</sup>、中本辰雄（昭和一五年生まれ）・入江岩（昭和一二年生まれ）・小島茂高（昭和一〇年生まれ）、二〇一四年三月二四日聞き取り

事例 六一六 浄土真宗・光明寺の檀家。西本願寺に納骨に行く。

名手市場、村本結理（情報提供）

### 3 旧粉河町地域

『粉河町史 五』の「民俗編」の「人の一生」の「葬送儀礼」に「コツノボリ」が取り上げられている〔粉河町史専門委員会 一九九六〕。『粉河町史 五』では、地区ごとに記述されるとともに、納骨習俗の特徴についても記述がみられる。

西川原では三日目か四日目に行った。朝から歩いて高野山へ行った。他界した者の左右の髪をコツといい、これを納める。

高野山の上り口に茶屋があり、そこで一休みし、線香をあげ、お茶湯をしてもらう。持ってきた握り飯の弁当を、付近にいる犬にやっってから山道を登る。途中にいる物もらいに弁当をあげた。帰りはオチツキといって、どこか知り合いの家に立ち寄



り、少し食事をしてから家に帰った。

中津川では、死者の左右の髪を切り、左右に分けて包んでおく。左の髪は四九日の間は仏壇の前に置いて拌み、その後、墓石の下に埋める。右の髪は、埋葬の翌日、高野山に持って行った。途中で血の濃い親戚の家に立ち寄り、お茶湯をしてもらう。高野口から山に登る途中に水が湧き出るところがあり、ここで遺髪に水を手向ける。奥之院で納骨し、帰宅したら風呂に入り、食事をした。納骨に行くことをコツノポリという。天台宗の家が多いが、高野山へ納骨に行く。握り飯を竹の皮に包んだ弁当を持参し、途中にいた「乞食」に施した。これを高野の布施といった。

藤井では左右の髪をコツといい、一方を高野山へ納め、他方は四九日まで仏壇に祀り、墓に納める。天台宗の家が多いが、高野山に納骨する。

嶋では親戚の家に寄ってお茶湯をしてから高野山へ登る。

北長田では左右の耳の上の髪を毛を切って半紙に包み、それぞれに左右と書いて枕元に置く。葬式の二日後から四九日までの間に高野山へ納めに行く。

北志野では、出発するときに身内に集まってもらい、お茶湯をし、高野山でもお茶湯をする。右か左の髪を毛を納める。他方は墓へ納める。<sup>(3)</sup>握り飯の弁当は、途中で犬にやるのでイヌノベントウとして持って行く。

下<sup>しも</sup>瀬<sup>せ</sup>の和田では、葬式の翌日に血の濃い者が二人で高野山へ行く。一人では絶対に行かない。これをコツノボセとかコツノポリという。男は右の髪を納める。死者が親しくしていた家に立ち寄り、お茶湯をしてもらい、小遣いをもたらって出発する。途中の谷で休憩し、コツ（髪）を置き、水を手向けて拌む。握り飯三個を弁当として持参し、そこに置いていく。弁当を置いたら後ろを見ない



写真6-2 深田から南側を望む（2015年8月）

で行く。このとき以外は休んではいけないという。奥之院で位牌を作ってもらうように頼み、精進料理をよばれ、納骨をし、位牌にオシヨウネを入れてもらって帰る。<sup>(4)</sup>和田では、谷水のあるところでホンデ（ホデ）に入れた弁当と小さな草鞋一足を一緒に置いてあることがある。これは、細野（現在、紀の川市）あたりの人がコツノボセの途中で置いていったものである。  
 （筆者要約）

事例六一七 納骨という。「骨のぼり」というのは知らない。今は光明院。葬式の翌日に行く人もいる。

深田<sup>ふかた</sup>、曾和俊次（昭和二年生まれ）、二〇一五年八月一三日聞き取り

事例六一八 納骨は葬儀のあとすぐに行く。翌日に行く。雪があるとか、行けないときもある。問題がなければすぐに行く。車一台か二台で行く。骨は墓へ入れる分と、高野山へ納める分と分けておく。奥之院へ直接行く。寺は通さない。寺がある家もある。一年間拜んでもらってから納める家もある。オチャトはする。親戚があると寄る。店でもお茶を出してくれる。一か所は親戚に寄って、もう一か所は花坂の焼き餅屋に寄る。休ませてくれる。弁当や草鞋は知らない。

親戚の呉橋では、盆に奥之院の地藏さんのところに経木を持って行って水を掛けるという。

荒見<sup>あらかみ</sup>、呉橋徹（昭和二年生まれ）、二〇一五年八月一三日聞き取り

事例六一九 「骨のぼり」という。初七日がすぐに行く。亡くなったあくる日に行く人もいる。一〇日も二〇日も置いている人もいる。岩出の人は、五年も一〇年も置いている人もいる。長田家は遍照光院。家によって違う。オチャトはする。上がる途中に犬塚がある。花坂よりも上。大門の近く。弘法大師が獣が来るので犬を連れて行った。五條に犬飼さんがある。高野山へ犬を連れて行くという風習があった。参るときに、ご飯、握り飯を持って行った。犬塚に供えてから高野山へ入ったという。自分はしたことがない。紀ノ川から北の人はした。粉河の人に聞いた。紀ノ川の南の人はしない。衛生的によくないので、高野山からやめてくれという。高野山で位牌を作る人と、こっちで作っていく人と、半々ぐらい。長田さんの家では、高野山の仏壇店で位牌を作ってもらった。ここでオチャトしてもらった。直接、お骨は入ったらあかん、どこかで一服してか

ら院へ入れということになっている。親戚に寄ってお茶を飲んでいく。家の隣でもいい。西仏壇店は、位牌を作ってもらうので寄ったら、「オチャトしてきたか」と聞かれた。車でさつと上がってきたのでオチャトしてない、というのと、骨を置いてお茶を出してくれた。位牌は買ってくるだけ。一周忌にオッサンにきてもらって拝む。納骨に行ったときには、コウヤマキを買ってくる。班に一本ずつ配る。行ってきたしるし。マキは班だけに配る。一つの班は一〇〜一二・三軒ある。配るのはマキに決まっている。焼き餅をもらったこともあるという。寺に過去帳を置いている。法事などに通知をくれる。三回忌ぐらいに法事をした。日蓮宗の場合は、身延山に納める。

風市、長田修司（昭和一九年生まれ）、二〇一五年八月二三日聞き取り

事例六一〇 死んだ翌日に、爪と髪の毛を持って高野山に行った。

上輦瀨（久保）、池峰ヨシ子（明治四三年生まれ）、一九九九年三月四日聞き取り

事例六一一 高野山には「骨参り」といって、葬式の次の日に、爪と髪の毛を持って参る。粉河寺へは、亡くなった年の盆に参る。

上輦瀨（山戸垣内）、北垣内好（明治四三年生まれ）、一九九九年三月五日聞き取り

事例六一二 葬式の明くる日に高野へ「骨のぼり」をする。「年越さしたらいかん」といい、忙しくてよう行かなんだ人も、正月までに行った。面家さんの家は五大院。和田でも家によって違う。奥之院に納骨し、五大院で拜んでもらい、帳簿に戒名と俗名を書いてもらう。

下輦瀨（和田）、面家崇造（大正六年生まれ）・面家和代（大正一一年生まれ）、二〇〇〇年一月二九日聞き取り



写真6-3 上輦瀨から南側を望む（1999年8月）

4 旧打田町地域  
（うちた）

旧打田町域では、大正時代の『郷土研究』以外に、昭和初期にも『田中村郷土誌』において取り上げられている〔藤並 一九三九〕。

遺髪は満中陰までに高野山へ登す。之を骨登りと云ふ。骨登りは近親者二名以上で、髪は紙に包んで、それに五銭か拾銭供養料を添へて、又其の上を包み元結ひで、首へかける様にこしらへる。高野につけば宿坊に就て法事をして貰ふものもあり、直ぐ奥の院の納骨堂に納める者もある。

『打田町史』では「第五章 近世」の「第九節 風俗など」の「3 産育・婚姻・算賀・葬送（人生儀礼）」に「骨登り」が取り上げられ、概要が記されている（打田町史編さん委員会 一九八六）。『田中村郷土誌』の記述とほぼ同じであるが、古い位牌を納骨堂に納め、黒塗りの位牌を求めて戒名を彫ってもらつた、という点が付け加えられている。



写真6-4 コツノボりに持参するおにぎり（紀の川市打田、2017年3月、谷川公浩氏提供）



写真6-5 立ち寄った親戚の家（岩上氏）でのオチャット（紀の川市、2017年3月、谷川公浩氏提供）

事例六一三 平成二九年

(二〇一七) 三月  
一日(土)、谷川  
公浩氏は祖母の納  
骨に行った。公浩  
氏の父・母・父の  
弟夫妻・祖母の弟  
(岩上さん)・祖父  
の妹(辻さん)の  
合計七名であった。  
公浩氏の父の車と、



写真6-6 立ち寄った親戚の家(辻氏)でのオチャット(紀の川市、2017年3月、谷川公浩氏提供)



写真6-7 立ち寄った親戚の家(辻氏)でのオチャット(紀の川市、2017年3月、谷川公浩氏提供)

父の弟夫妻の車の二台に分乗して行った。この日に決まった理由としては、二月中は道路が凍結して危ないが四月までには納骨をすませたい、公浩氏の父の弟が仕事の都合により土曜日しか休めないこと、による。祖母の命日は前年の二月一八日、シアゲ(墓に骨を埋める)は二月二九日であった。なお、公浩氏の母の父が亡くなったときの納骨が最も新しいという。公浩氏はこのときも納骨に同行していた。

納骨当日は朝早くから公浩氏の母がおにぎりを用意した。梅干しとたくあんを入れたのは、見栄えをよくしたいからという理由であった。おにぎりについては公浩氏の母が言い出した。公浩氏の父・父の弟もおにぎりのことは知らず、岩上さん(祖母の弟)・辻さん(祖母の妹)もおにぎりを供えることはなかったという。

八時四七分ごろ 公浩氏の父の弟夫妻（和歌山市在住）が谷川家に到着。

八時五〇分 谷川家を出発。公浩氏の父・母・公浩氏と父の弟夫妻が車で出発する。

九時二分 岩上家（祖母の生家、紀の川市東三谷）に到着。オチャト。仮設の祭壇にお骨を置き、順番に参拝した。参拝が一通り終わると、岩上さんの奥さんからお茶をふるまってくれる。ここから岩上さん（祖母の弟）も同行する。

九時一七分 祖母の生家を出発。

九時三九分 辻さん（祖父の妹）の家に到着（紀の川市の粉河高校付近）。オチャト。ここでは玄関の前に祭壇が用意されており、湯呑にお茶を汲んでお参りし、お茶をバケツに捨てた。ここから、辻さん（祖父の妹）も車に乗せる。

九時四九分 祖父の妹の家を出発。

一〇時二五分 国道四八〇号の高野山道路の一三キロポスト付近でおにぎりを供える。公浩氏の母親は「餓鬼仏のご飯になるから」という。母の地元では普通におこなわれていたという（公浩氏の母は中三谷出身で、事例六一―一四の馬谷時子氏の娘である）。一三キロポストの、町石道との交点になっている広場に車を止め、町石道を大門側へ少し登ってそこにおにぎりを納めた。馬谷時子氏はもう少し奥で供えていたが、「熊出没注意」の看板も出ているのであまり奥には入らずに供えた。道路まで引き返す途中にプラスチック容器があったため、おにぎりを供える人はほかにもいるらしい。

一〇時四九分 高野山奥之院前の中の橋駐車場に到着。

一〇時五六分 奥之院入口に到着。公浩氏の父はこの宿坊に行こうかと迷っていた。地元の寺の住職が奥之院に



写真6―8 大門の手前の山中におにぎりを置く（高野町、2017年3月、谷川公浩氏提供）

行けばいいと言ったことで、奥之院へ直接納骨することになった。

一〇時一分 納骨受付。

一一時三二分 読経開始。同時に何組かの納骨もおこなっていた。命日

が二月という方が三組いた。

一二時二一分 読経終了。

一二時二五五分 納骨堂にて納骨供養。

一二時二八分 供養終了。

一二時三二分 ろうそく・線香を買い、御廟で拝む。

一二時四一分 休憩所でお茶を飲む。

一二時五八分 奥之院入口に戻る。

一三時ごろ 昼食。

一三時三八分 駐車場の売店でコウヤマキを買う。親戚に配る分を購

入。

一三時四五分 駐車場を出発。

一四時二〇分 花坂の上きしやで焼餅を買い、お茶を飲む。公浩氏の母は、納骨の帰りに必ずどこか店に寄ってお茶を飲む（ファミレス等でも構わない）と言われていた。それも含めてオチャトと呼ぶ。上きしやの奥でお茶を飲めるようになっていたため、今回はここでお茶をすませることになった。

一四時三五分 上きしやを出発。

一五時五分 辻さんを自宅に送り届ける。父の弟夫妻が、別行動で岩上さんを送り届ける。



写真6-9 山中に置いたおにぎり（高野町、2017年3月、谷川公浩氏提供）



## 高野山納骨習俗の地域差

一五時一七分 谷川家に帰宅。

一六時ごろから、納骨に同行しなかった中三谷の母の実家（馬谷時子氏の家）、打田駅前の親戚の二軒にコウヤマキと焼餅を配りに行った。辻さんと岩上さんは同行していたので、そのままコウヤマキと焼餅を持って帰る。各自で配る用のものを買っていた。

打田、谷川公浩（平成三年生まれ）谷川公浩氏は納骨の日の動向を詳細に報告してくれた。谷川氏がまとめた納骨レポートをもとに、筆者が谷川氏に補足的に確認をした結果をまとめた。

事例六一―一四 「骨納め」という。「骨のぼし」と言ってる人もいた。土葬のときは、髪の毛・爪などを持って行った。小さい入れ物へ入れて持って行った。一か月たってから行く。上（上流）の方はあくる日に行く。ここは、四九日の前に行く。シアゲの前に行く。電車でケーブルに乗って行った。今は車で行く。おにぎりをこしらえて持って行く。タッパーへおにぎりを入れて山へ持って行った。山に広っぱがあ



写真6-10 納骨の道中（おにぎりを置いた付近）  
（高野町、2017年3月、谷川公浩氏提供）



写真6-11 納骨の帰りにコウヤマキを買い求める  
（高野町、2017年3月、谷川公浩氏提供）

る。餓鬼仏に食べてもらおうといって、山へおいてきた。動物かなにか知らんが食べにくる。車を止めておける広っぱがある。車を止めて、上へ登って、置いてくる。行く前の晩、近所の人がオチャトしにきてくれる。夫の母のときは九度山の親戚に寄った。夫のときは、打田の谷川家（事例六一―一三）に寄った。一軒寄せてもらう。オチャトしてもらって高野へ登った。草鞋は持っていけへん。マキを買うて来て近所へ配る。班とか、手伝いに来てくれた人に配る。ここは、西・南・東の三つの班の真ん中になる。手伝つてくれた人に行つた。仏さんがいない人には護摩豆腐を持つて行つた。焼餅は買えへん。護摩豆腐を買う。高野山に専属の寺があつた。北室院やつた。はがきをくれたりした。夫の祖母のとき（昭和三十三年）まで納めに行つた。夫の母から奥之院へ行くようになった。ようさんお金いるので、住職が、「奥之院へ納めよし」と言つたので、奥之院へ行くようになった。夫の祖母は屋根のある位牌を作つた。今は仏壇屋で買うので普通の位牌。夫の母から、岩出の仏壇屋で位牌を買うて、彫つてもらつてオシヨネ入れてもらう。シアゲする。

嫁にきたじゅうは、盆に国分寺に施餓鬼に参つて水向けしてきた。今は国分寺へ参らんと、中三谷の正福寺へ行く。

中三谷、馬谷時子（昭和九年生まれ）、二〇一五年八月一四日聞き取り

## 5 旧桃山町地域

『桃山町誌』では「第三部 戦後の軌跡」の「第六章 桃山町の暮らし今昔」の「4 いまに残る習俗・地域文化」に「両墓制と土葬、高野山納骨」が紹介され、概要が記されている〔桃山町企画室町誌編纂班 二〇〇二〕。

高野山への納骨は葬送儀礼のひとつとして今でもおこなわれている。土葬の場合、男の人は右耳の鬢の毛、女の人は左の鬢の毛を二・三本持つて行く。爪を骨の代わりにしているところもある。納める先は昔は納骨堂、今は菩提寺に納めることが多い。（筆者要約）

以下に取り上げる垣内は旧桃山町の東部の山間部に位置する。真国川流域で、紀の川市鞆渕と紀美野町四郷よごうの間に位置する。桃山町合併までは細野村に所属していた。細野村は昭和三二年（一九五七）に、桃山町と美里町に分村して合併した。

事例六一―一五 「骨のぼり」という。葬式のある日すぐに行く。大西さんの家は五大院。家によって寺は違う。草履を編んで、おにぎり二つぐらい持つて行った。鞆渕に行くまでの谷に草履とおにぎりをお供えした。つらくつとく（吊るしておく）。大西さんもしたことがある。車で行くときだった。今はしない。オチャトは今でもしている。身内の家があれば寄る。近所でもいい。焼餅屋でオチャトする。高野の寺で拝んで奥之院へ行くまでに位牌を頼んでおく。帰るまでに作ってくれている。終わって寺へ戻ると位牌ができています。帰ってから自分らで拝む。インゲさんはひと七日まで来てくれる。身内、親戚に焼餅を買ってきて配る。濃い親戚だけに配る。コウヤマキは配らない。施主だけ買うてくる人もいます。

新仏の家では七日ごろに高野へ迎えに行く。

桃山町垣内かいと、大西孝治（昭和二四年生まれ）、二〇一五年八月六日聞き取り

事例六一―一六 「骨のぼり」という。昔は葬式のある日か、ひと七日以内に行った。三日以内に「高野のぼり」をした。このごろは習慣性が乏しくなって、一年おいとく人もいるし、半年おいとく人もいる。四九日に行く人もいます。家によって違う。大阪あたりの兄弟が来ると、また一週間たつて来ることになる。行ったり来たりすることがないようにした。弁当・お草履を持つて行った。今でもときにする人がいる。ここから高野山へ行くまでに、ちよつと水が流れるところ、その水をすくって、草履や弁当にかけて、川の近くの木の枝に



写真6-12 細野地区から真国川上流を望む（2014年8月）

ひっかけとく。だいたい鞆淵の和田までの間。高野山で位牌を買ってくる。宿坊へ参るまでに、店へ寄って、戒名を見せて約束しておいて、帰りに店へ寄って戻ってくる。ひと七日か、四九日のシアゲに位牌を拜む。親戚の關係で、「骨のぼり」のときは、花坂で焼餅を買ってくる。ひと七日するので、親戚が寄ってくるし、近所も参ってくれるので、すそわけする。マキはあんまり買つてこない。シキミがあるので。

盆の七日、新仏だけ高野山の寺へお参りする。経木をくれる。粉河は行かない。

桃山町垣内、森穂（昭和三年生まれ）、二〇一五年九月八日聞き取り

事例六一一七 「骨のぼり」という。善田ではあくる日に行く。親戚が来てくれているから、いてる間に行つてきた。夫は一二月に亡くなった。道が凍つてるので「春になって暖かくなってから参りなよ」、と寺が言つた。母は一月に亡くなった。ええ天気やからあくる日に参つた。野田原からは、細野へ出て、鞆淵へ出て行く。黒川の人は黒川峠を通つた。今は車で一時間で行く。寺は普賢院。親戚があるとオチャトしてもらおう。うちはあんまり上には親戚がないので、花坂の店でオチャトしてもらつた。「骨のぼり」でこさしてもうたんで（こさせてもらいました）、という、骨を置いて休憩さしてくれる。ちよつとお金を包んでお礼してくる。花坂では弁当を開いて食べさせる。おにぎりを握つて、ビールやお酒、弁当を持つて行く。谷があると、弁当を開いて、ビールも開ける。弁当は竹の皮に包んでいる。ビールも谷川にほつた。今は世界遺産になつたので、ほらしてくれへん。花坂よりも上にある。橋の上からほる。夫と、母と父を持つて行つた。焼餅は垣内へ配る。「骨のぼり」行つてきました、お世話になりました、と配る。マキは自分で作つてるので買わない。自分とこは墓にマキがある。桃山町元の人はマキを買っている。野田原でもマキを買ってくる人もいる。高野と書いたしゃもじを買ってくる人もあつた。

新盆の人は、粉河へ施餓鬼に行つた。九日に行つた。水向けして、道具もんを買ってきた。すだれとか提灯を買つてきた。

桃山町野田原のたはら、中島晴美（昭和一八年生まれ）、二〇一五年八月一四日聞き取り

事例六一一八 「骨のぼり」という。昔は四九日たたないと参らなかつた。行って来て仕上げをする。坊さんに来てもらうてごつつお（ごちそう）を食べてもらう。今は銘々。最近は亡くなったあくる日でも参る人がいる。またあとで来んなんからというこで葬式のある日に行ってくる人もいる。車で行く。骨だけ持つて行った。行くときはオチャトをしってくれる。拜みに来てくれた。途中で親戚に寄つてオチャトをしてもらうこともある。めつたにない。弁当、草鞋はしない。昭和四〇年ごろに亡くなった大おじいさんのときは、打田から電車に乗つて行った。森脇家の寺は赤松院。大おじいさんのときは別の寺だつた。このインゲさんが赤松院の出身なので赤松院に替えた。奥之院に行く前に位牌を頼んでおいて、ご飯を食べている間に戒名を彫つてくれる。帰りに位牌とコウヤマキをもらつてくる。コウヤマキ、護摩豆腐などを買つてくる。焼餅をくれるところもある。焼餅はもつと大きかつた。コウヤマキは垣内とか親戚に配る。今でもしている。仏壇がない家はコウヤマキはいらないから、護摩豆腐や焼餅を買つてくる。コウヤマキは高野山に行かないとなかつた。高野山には「骨のぼり」以外には行かなかつた。今は車なのですぐに行ける。

桃山町市場、森脇秀代（昭和五年生まれ）、二〇一五年八月六日聞き取り

## 6 旧貴志川町地域

近畿民俗学会による貴志川町共同調査報告の「葬送習俗・墓制」に「シアゲ」という項目があり、その中でコツノボシのことが報告されている〔近畿民俗学会編 一九八〇a〕。内容は詳細であるが、地区に関する記述はない。

四九日のシアゲのときに、湯灌のときに取つておいた死者のコツ（爪・頭髮）をテラバカに埋める。このときに、高野山にコツノボシをする。男の人が二人で行くものといひ、コツ箱に白木綿の袋をかけて首にかけ、草鞋ばきで高野山へ参つた。物もらいや犬にやるといひ、握り飯をたくさん握つて持つて行った。昔は死者の弁当といひ、握り飯をワラットに入れたものと、竹の杖・草鞋などをムラを出た谷筋の木の枝などにかけておいた。丸柶では四九日までにコツノボシをする。（筆者要約）

事例六一一九 「骨のぼし」、「骨のぼす」という。四九日すんでから行く。一年するまでに行く。きちつとした人は、年内に行く。高野山で位牌を買ってくる。白い木の位牌を持って行って、黒い位牌に戒名を書いてもらい、替えてくる。オチャトはしない。弁当や草鞋は持って行かなかつた。コウヤマキは土産に買ってくる。親戚には配るけど、垣内には配らない。

貴志川町井ノ口、岩本豊治（昭和六年生まれ）、二〇一五年八月八日聞き取り

事例六一二〇 「骨納め」という。高野山へ参るのは当たり前と思っていた。家の都合で、行く日はさまざま。一月に亡くなった父のときは、雪が降ってくるので暖かくなってから三月末に行った。五月に亡くなった母は、六月は田植えが忙しい、八月に新盆になるから、七月に行った。武部さんの家では高野山に寺がある。奥之院へ直接納める人もいる。弁当や草鞋は知らない。土葬のときは髪の毛を持って行った。爪は記憶にない。今は骨を持って行く。高野山で位牌を買ってきた。戒名を持って行って、作ってもらってきた。位牌は納骨のときに、高野山で拝んでもらった。帰ってから拝んでもらわない。直接奥之院へ納める人は、丸栖の住職にオシヨネを入れてもらう。シアゲまでは白い位牌が多い。シアゲまでは忙しいから白い位牌が多いか。武部さんは、白い位牌を持って行って、高野山で納めてきた。一周忌は黒い位牌を祀っている家が多い。コウヤマキや焼餅を近所に配ることはない。親戚には、「納めてきた」という報告の意味で、マキや焼餅を配る。決まりはない。うちは五〇年間、仏さんもなかつたので、親戚からもらうことはなかつた。丸栖の玉前寺は京都の勤修寺の末。勤修寺へ納骨に行く人もいる。玉前寺へ納める人もいる。

初盆には粉河寺の施餓鬼に行く。毎年は行かない。朝早くから行った。このへんはみんな行く。新仏さんの家は、向こうでみな会った。日は決まっている。今もたぶん行っている。行って拝むだけ。経木を買って水をかけて、置いてくる。

貴志川町丸栖、武部吉宏（昭和一三年生まれ）、二〇一五年八月三十一日聞き取り

事例六一二二 西山では高野山に納骨する人が多い。

貴志川町西山、樫葉貞雄（明治四四年生まれ）・文字（大正九年生まれ）、二〇〇〇年一月三日聞き取り

7 紀の川市における納骨習俗の特徴

事例から特徴をまとめると以下ようになる。

- ① 名称 コツノボリ（名手上・平野・名手下・中津川・下鞆渚・風市・旧田中村・桃山町垣内・桃山町野田原・桃山町市場）、コツノボセ（下鞆渚・貴志川町丸栖）、コツノボシ（中三谷・貴志川町井ノ口）、コツオサメ（中三谷・貴志川町丸栖）、コツマイリ（上鞆渚）などという。紀の川市域全体で見ると、コツノボリと呼ぶ地域が広がっている。
- ② 日程 納骨に行く日程については、地区によってさまざまであった。葬式の翌日に行く（名手上・平野・名手下・中津川・深田・荒見・風市・上鞆渚・下鞆渚・桃山町垣内・桃山町善田）、三・四日目に行く（西川原）、ひと七日以内に行く（桃山町垣内）、初七日がすんで行く（風市）、四九日までに行く（北長田・中三谷・貴志川町丸栖）、四九日まで家で祀ってから行く（桃山町市場・貴志川町井ノ口）などと語られる。年を越してはいけない、一年以内に行く、と言いかたもされる（下鞆渚・貴志川町井ノ口）。なお、平野（中尾）では、葬式の翌日、またはひと七日のときに繰り上げて四九日をすることもあった。風市・桃山町垣内のように、二通りの日程がある地区もみられる。垣内では最近、四九日以上たつてから行く人も出てきたという。桃山町市場では最近、葬式の翌日に行く人も出てきたという。貴志川町丸栖では最近、家の都合で日程はさまざまであるという。
- ③ 納骨するもの 土葬のときは髪・爪を持って行った。今は骨の一部を持って行く。
- ④ 行く人 一人で参るわけにはいかない（平野）、四～五人で行く（平野）などといわれる。絶対に一人で行かず、血の濃い者二人で行く（下鞆渚）、男の人が二人で行く（貴志川町）というところもある。



⑤ 持参する物 紀の川市域では、弁当を持って行ったところが多い(名手上・平野・名手下・西川原・中津川・北志野・下鞆渚・旧田中村・打田・中三谷・桃山町垣内・桃山町野田原・貴志川町)。握り飯を「犬の弁当」、「犬に食べさせる」といつて持って行くところもある(名手上・平野・西川原・北志野・旧田中村・貴志川町)。物もらいにあげる、というところもある(西川原・中津川・貴志川町)。仏に供える(平野(中尾)、餓鬼にあげる(名手下・中三谷)、というところもある。昔は死者の弁当といった、というところもある(貴志川町)。握り飯は竹の皮へ包むところ(中津川・桃山町野田原)、藁苞に入れるところ(貴志川町)などがあった。草鞋を持って行くところもある(桃山町垣内・貴志川町)。旧桃山町・旧貴志川町以外で草鞋を持って行くことは確認できなかった。杖を持って行くところもあった(貴志川町)。

⑥ 行くときの作法 自宅・親戚の家などでオチャトをする。三か所ぐらい立ち寄る(平野)というところもある。骨箱に白木綿を巻いて首から掛ける(貴志川町)。同じ道を通らない(平野)。水があるところでも置いて水を手向ける(中津川・下鞆渚)。水があるところで弁当を置き、その後は後ろを振り返らずに行く(下鞆渚)。骨に水を手向けるとき以外に休んではいけない(下鞆渚)。谷のところで、弁当を開いて仏に食べさせる(桃山町野田原)。握り飯は水のあるところに供える(平野)。水が流れているところの木に吊るす(桃山町垣内・貴志川町)

⑦ 納骨する場所 菩提寺か奥之院へ行く。最近では奥之院へ行く人が多くなっている。菩提寺へ行く人は、菩提寺で位牌に魂を入れてもらうこともある。

⑧ 帰りの作法 帰りに親戚の家や店に寄ることもある(西川原・打田)。帰ってから風呂に入るところもある(中津川)。これらは穢れを落とす意味合いがあるように思われる。

⑨ 買って帰るもの 位牌屋で位牌を注文し、帰って帰る。高野山のまんじゅう・胡麻豆腐、花坂の焼餅など

を買って帰る。

- ⑩ 納骨後の供養 買って帰った位牌にオシヨネを入れてもらう。当日、家に帰ってから僧侶に来てもらって位牌供養をするところもあるが（名手上）、四九日などに拝んでもらう（名手下）、ひと七日か四九日のシアゲに位牌を拜んでもらう（桃山町垣内）、シアゲに拜んでもらう（市場）、一周忌に拜んでもらう（風市）、というところもある。中三谷では、岩出市の仏壇屋で位牌を買う場合もあるが、やはりシアゲに位牌を拜んでもらう。参ってくれた人に、まんじゅう・胡麻豆腐・焼餅などを配る。コウヤマキを配るところもある（平野・名手下・風市・中三谷・桃山町市場・貴志川町井ノ口・貴志川町丸栖）。班の人たちにコウヤマキや焼餅を配るところもある（平野・名手下・風市・中三谷・桃山町市場）。仏壇がない家はコウヤマキはいらないので、胡麻豆腐や焼餅にする（桃山町市場）。年忌に高野山の菩提寺へ参る人もいる。

紀の川市域においては、真言宗以外の檀家の場合、高野山以外に納骨する家もある。しかし、市域全体を見れば、高野山への納骨習俗が広がっている。紀の川市域では納骨習俗の地域差が顕著である。旧打田町・旧貴志川町でコツノボシという人もいるが、市域の大半はコツノボリという。葬式の翌日に行くのは旧那賀町・旧粉河町の南部、旧桃山町の東部で、四九日前後に行くのは旧粉河町北部・旧打田町・旧桃山町・旧貴志川町であった。弁当を持参するのはほぼ共通しているが、草鞋を持参するのは旧桃山町・旧貴志川町であった。納骨に行く日程はさまざまであるが、位牌供養は納骨当日もしくは四九日におこなっている。平野部の地域では、納骨後に穢れを落とす行為をおこなう場合もあった。

紀伊藩領であった地域でも高野山への納骨はおこなわれてきた。また、旧粉河町には天台宗、旧貴志川町には浄土宗の寺院があり、その檀家が多い地域もある。そうした地域でも高野山への納骨はおこなわれてきた。

紀の川市域の特徴として、南部山間部の人たちは納骨に歩いて行ったことがあるというが、平野部の人たちは歩いて行ったことはないという。これは、明治時代に現在のJR和歌山線が開通、昭和初期に南海高野線が全通しているため、平野部では鉄道を利用することが早くからおこなわれていたためである。

市域東部の上名手地区・鞆地区・細野地区などでは、これまでみてきた伊都郡地域の納骨習俗と共通する点も多い。しかし、市域全体で見れば、伊都郡地域とは違いがみられる。大きな理由は高野山までの距離が遠いということであろう。市域東部ではかろうじて高野山まで徒歩で日帰りは可能である。したがって、伊都郡地域と同様の習俗がみられる。ところが、その他の地域からは徒歩で日帰りは難しい。市域全体にわたって、初盆に高野山まで仏を迎えに行くこともなかった。また、市域では初盆に粉河寺に参る人もいる。これは、高野山よりも身近にある粉河寺から祖霊を迎えるという習俗が存在したことを示している。

## 七 岩出市の事例

岩出市は那賀郡に属していた。紀ノ川北岸に位置し、中世には高野山から分かれた根来寺が勢力を持っていた。江戸時代は紀伊藩領であった。岩出市では以下の事例を確認した。

事例七一 浄土真宗の檀家であるが、高野山へ納骨に行く。喉仏を持って行く。奥之院へ納骨する。納骨に行く日程は決まっていない。オチャトはしない。持参するものもない。宿坊は決まっている。

荊本<sup>つばもと</sup>、音地菜美（情報提供）

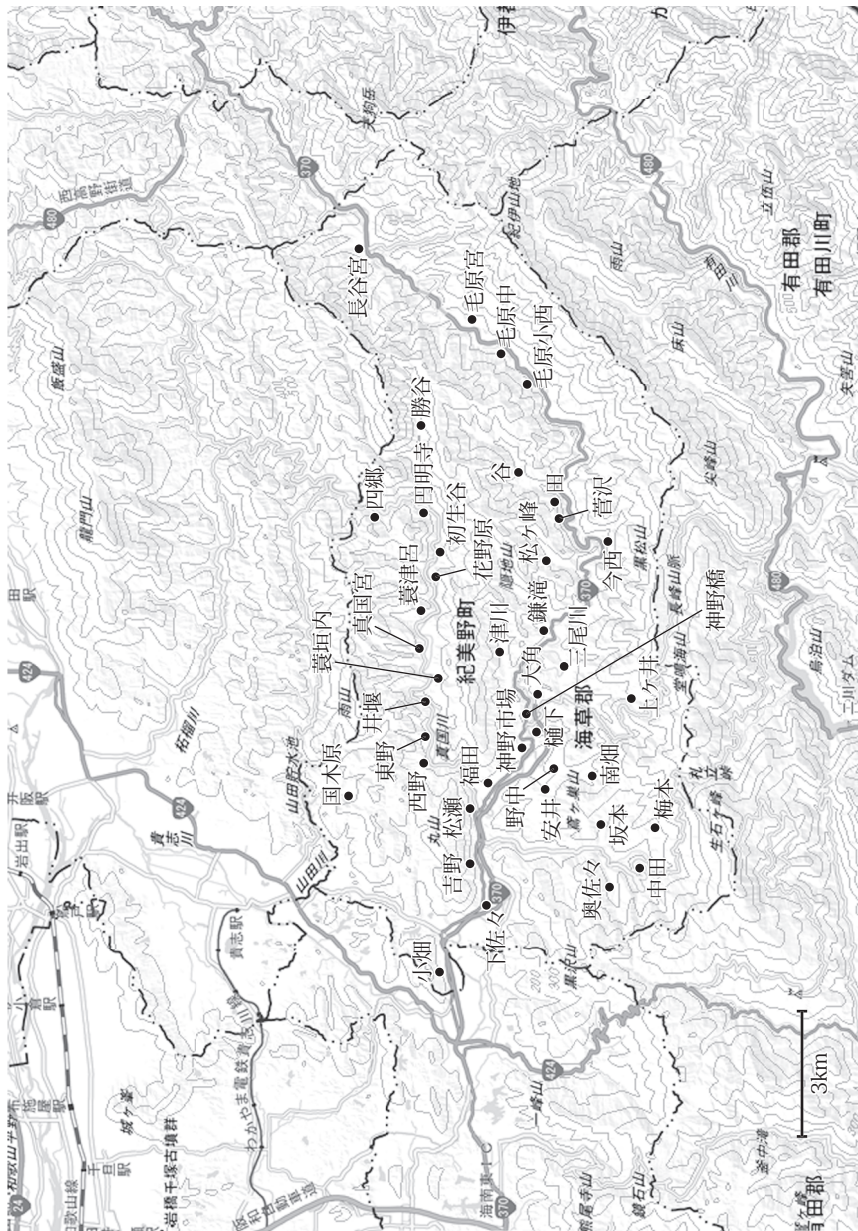
## 八 紀美野町の事例

### 1 地域の概要

紀美野町は平成一八年（二〇〇六）に野上町と美里町が合併してできた町である。貴志川と真国川が東から西へと流れており、二つの谷沿いを中心に集落が点在している。高野山に近い美里町は山間部であり、真言宗の檀家が多い。一方、野上町は海南市などの市街地に近い。真言宗の寺院もあるが、浄土宗・浄土真宗の檀家も多い。江戸時代には美里町域は高野寺領、野上町域の大半は紀伊藩領であった。中世の荘園の境界も旧野上町の東端に位置していた。このように、紀美野町の東部と西部では歴史的に支配者が異なることも多かった。地形・気温・植生なども異なるため、生業にも地域差がある。紀美野町西部は経済的には海南市との結びつきが強い。

紀美野町における納骨習俗の事例は、これまでに報告されたものがほとんどない。『和歌山県民俗分布図 民俗文化財緊急分布調査報告書』以外には、『野上町誌 下』の「第八編 民俗」の「第二章 庶民信仰」の「第七節 高野山信仰」のなかに「骨上り」が取り上げられている程度である（野上町誌編さん委員会 一九八五）。

紀美野町の民俗調査は平成二三年（二〇一一）八月から平成二六年（二〇一四）二月にかけて、科学研究費基盤研究（C）「紀の川流域における中世荘園の地域環境史的研究」（研究代表者：高木徳郎氏）の一環として開始した。このときは、生業を中心に聞き取りをおこなった（藤井 二〇一四）。平成二四年（二〇一二）八月からは近畿大 学民俗学実習の調査地とし、学生たちとともにさまざまな内容を聞いており、現在も継続している。紀美野町では大多数の集落（大字）に調査に入っており、多くの民俗的な情報を得ている。紀美野町では、美里町・野上町に合併前の村が地区としてまとまりを示しているため、旧村の地区ごとに事例を示していく。



地図6 紀美野町 (国土地理院ウェブサイト地図に加筆)

2 旧美里町地域

a 長谷・毛原地区

事例八一 「骨のぼり」。髪の毛と爪を持って行った。葬式の翌日に行く。昔は歩いて行った。四〇年前の父親のときは自動車で行った。

長谷宮、大和公明（昭和七年生まれ）、二〇一四年八月八日聞き取り

事例八一 真言宗の檀家。「骨のぼり」という。葬式の翌日に行く。オチャトは必ずする。草鞋・藁に包んだおにぎりを持参する。新しい道ができるまでは、花坂あたりか五十町道の谷に置いた。今では花坂から上の道路の谷に置く。草鞋を作る人がいなくなり、それもなくなってきた。傘を差したことはない。奥之院に直接納骨する。奥之院へ行く前に位牌屋に寄り、位牌を頼んでおく。奥之院へ参つてから位牌を受け取って帰る。大門の近くで酒まんじゅう、花坂で焼餅を買う。班の人に世話になったお礼をする。コウヤマキは仏さんに供える。その晩に初七日。班の人と坊さんが集まって供養してくれる。

長谷宮（出身）、中谷澄雄（昭和九年生まれ）（情報提供：井澤伸矢）

事例八一 三 毛原では亡くなったあくる日に行った。草鞋とツト（藁の中へ握り飯と梅干を入れる）を、何番目かの谷を渡ると木へぶらさげる。今でもたまにする人がいる。奥之院の納骨料はただだった。位牌を作ってきて、帰ってきて、夕方かあくる日の朝、位牌のオチツキ供養をした。新仏の場合は、高野山まで経木をもらいに行く人がいた。うち（大日寺）でも出すというと、だんだん行かないようになった。



写真8-1 滝ノ川から毛原・高野山方面を望む  
(2012年8月)



毛原宮、上田光崇（大日寺住職）、二〇一二年六月二〇日聞き取り

事例八一四 「骨のぼり」という。ほとんど葬式のある日に行く。長い間、そういう伝統であったが、最近では必ずしもそうではなくなってきた。急いでお骨を納めに行っていた。それほど高野山とのつながりが深かった。昔はおむすびを作った。自分とこを出発して、谷を渡るところに、草鞋とおにぎりを供えた。今は車で走るのでやらなくなった。友達や親戚がいると、お茶をお供えしていく。毛原の人は毛原区内、長谷の人は長谷区内で寄る。高野山で位牌を買ってくる。「高野のぼり」が終わった、ということ、その晩に和尚さんに来てもらって拝む。親類がまだいるので、焼餅を買ってくる。お土産みたいになっている。買ってくるのは焼餅が多い。マキは自分たちで作っている人がいるので買ってこない。四九日はお坊さんに来てもらって拝んでもらう。お坊さんが帰ってから神主さんに家へ来てもらって、清めてもらう。ヒアケという。

盆に高野山へ行くことはなかった。初盆には行く家もあった。全部の家は行かない。

毛原宮、弓庭武彦（昭和八年生まれ）、二〇一五年八月二四日聞き取り（電話）

事例八一五 葬式のある日には「骨のぼり」に行った。「高野のぼり」、「高野参り」ともいう。矢立から登って、奥之院まで行った。葬式したあくる日に、朝早くから骨を持って行った。高野山まで五里という。奥之院まで行くと片道二五キロ、往復で五〇キロになる。毛原は日帰りできるので、あくる日に行った。朝の暗いうちから歩いて行った。国吉のあたりの人は歩いて日帰りでできない。国吉から下では、四九日がすんでから行く。上神野あたりでは、京都の方へ行く人もいる。火葬場で、



写真8-2 コツノボリの朝の自宅でのオチャト  
(紀美野町毛原中、2009年12月、神崎博  
介氏提供)

高野山へ行く骨壺もこしらえてくれる。昭和三〇年代、四〇年代は男の人しか行かなかった。今は女の人も行く。三人か五人で行った。土葬のときは、髪の毛と爪を入れた。家族の髪の毛と爪もちよつとずつ入れて持って行った。「骨のぼり」に行く日は、家の人が骨に般若心経を唱えてから行く。近所の人も来てくれる。途中三か所でオチャットしてもらおう。親戚に寄る。親戚がなければ焼餅屋に寄る。白いきれで首から掛けて持って行った。車で行くときも、首からかけて持っていた。横へたすきにかけて行ったこともある。「骨のぼり」には、死んだ人の弁当（にぎりこ・梅干しを藁に包んだもの）・草鞋を持って行く。谷を三つ越えたら弁当と一緒に置いた。前はいたるところにあった。置くところが決まっていた。今は、葬儀屋が簡単な飾りを与える。毛原でも掛けるところがある。たくさんあったのは、神野市場の樋下のガソリンスタンドの近く。一〇個ぐらい並んでいた（写真8—3）<sup>(5)</sup>。目立つところにしたらあかんという。平成二一年に行ったときには持つて行った。なるべく人目につかないところへ掛けた。「骨のぼり」のときは傘は差さない。昔は、奥之院へ着くと納骨堂に勝手に入れた。そのあとで、供養してくださいと頼んだ。奥之院へ行く前に店に位牌を頼んでおく。なるべく前の位牌と同じものを頼む。神崎さんの家では位牌を二つ頼む。一つは家、一つは寺に置く。なかには高野の寺へ預ける家もある。神崎さんの家は高野山の大円院。毛原でもばらばら。寺がない人もいる。帰りに花坂の焼き餅を買ってくる。家に帰ると焼き餅を班に配る。マキは買ってこない。神崎さんは「骨のぼり」には車で行った。「骨のぼり」から帰ってくると、その日の晩に、村の人が集まってきて拜んだ。坊さんが来る家もあった。精進上げといったか。葬式が三日も四日もかかるといって、しないようになった。仮の位牌は、四九日か新盆に墓へ持つて行く。

新仏は高野へ迎えに行く家もある。神崎さんは行かなかった。

毛原中、神崎博介（昭和一四年生まれ）、二〇一一年八月一日・二〇一四年八月三日・二〇一五年七月二四日聞き取り

事例八一六 「骨参り」、「お骨参り」、「骨のぼり」という。高野へ登る。昔は葬式のある日に必ず行った。雨が降っても、

風が吹いても、必ず行った。昔は草鞋と弁当を持つて行った。三つの谷の辻に吊るようになっていた。見苦しいということで

やめた。観光客が来るようになって、ひととこに吊るようになった。花坂から上がって、曲がった山のところに置く場所がある。傘は持つて行かなかった。寺が決まっている。高野山で位牌を買って、寺で魂を入れてもらう。戻ってきて、供養してもらう。花坂に焼餅屋がある。焼餅を買ってきて配る。マキは自分とこにようけあるので買わない。

毛原小西、今中佐兵衛（大正一四年生まれ）、二〇一五年九月二日聞き取り（電話）

b 国吉地区  
くによし

事例八一七 納骨は亡くなってから四九日までに行く。四九日を早めにする場合が多いので、三五日以内ぐらいに行くことが多い。藁で弁当を包んで必ず持つて行く。これを置いてくる場所は家を出て三つ目の谷とかいう。字によって違う。住職は、もともと伝えられているようにしてください、と説明している。位牌を買ってきておこなう供養を、国吉では四九日のときにする。

田、亀岡弘昭（惣福寺住職）、二〇一二年六月二〇日聞き取り

事例八一八 「骨のぼり」という。葬式の次の日に行く。班内の人が行って、オチャトしてお布施をする。それから出発する。谷を一つ渡ったところの知り合いの家でオチャトしてもらう。一つ谷を渡ったところで、草鞋・弁当をぶらさげていく。にぎりを作ってぶらさげる。橋からちょっといったところの、段を上がったところの木の枝にかけた。同じところにいっぱいあった。何か祀っているところではない。最近の人はしない。死者に対してすることと思う。丁寧な人は今でもしている。草鞋をなう人もいない。だいたいは草鞋をぶらさげている。弁当をする家は少ない。今は高野山の寺へ行かないで、奥之院へ直接行く人が多い。寺には、位牌を書いてもらいに寄るだけ。位牌は店でも書いてくれる。寺へ行く人は少なくなったと思う。岩尾さんは、身内に位牌を作ってくれる家がある。そこで頼む。位牌は持つて帰る。その日に供養はしない。向こうでオシヨネを入れてもらった形になる。帰りに焼きまんじゅうを買ってきて、参ってくれた家に渡す。花がある家はマキは買つてこない。

高野山のマキは高いから買つてこないと思う。

新仏があると、八月二日までに高野山へ迎えに行く。今も参る。奥之院でも自分の寺でもいい。岩尾さんの家だと、一乗院へ行つてお布施して拜んでもらう。

田、岩尾新治（昭和一七年生まれ）、二〇一六年八月一〇日聞き取り

事例八一〇 「骨のぼり」という。葬式の次に日に行つた。四九日がすんでから行く人もいる。高野まで日帰りで行つた。高野まで六里といった。毛原宮を通つて行つた。家を出るときにオチャトする。千代さんは、近所の人から弁当を作つてくれと頼まれて作つたことがある。薬をすぐつてきれいにして、おにぎりを作つて、味噌と梅干を入れて、三か所をくくつて、持つて行つた。弁当や草鞋は高野へ登るときに谷ばたにかけておく。谷を三つ渡つたとこへかけておく。これをする人は減つてきた。草鞋が減つてきて、草履を作つた。草鞋や草履も谷ばたにかけておく。正永さんは、ヒノキの葉を三角にして立てたのを見た。「骨のぼり」のときにしていた。盆にする家もあった。「骨のぼり」の日だけで、あとは取つてしまふ。谷ばたにしていた。軒へしてる家もあった。三角の中を見たことはない。子どものじゅうにあつた。

初めての盆には高野山へ迎えに行く。新盆といって、迎えに行く。今でも行く。

谷、森本正永（昭和三年生まれ）・森本千代（昭和五年生まれ）、二〇一六年一月六日聞き取り

事例八一〇 「骨のぼり」という。昔は葬式のある日に行つた。位牌を買つてくる。帰つてから、位牌を置いてまつりこんで、寄つてきてくれるので、お勤めして食事する。今はあくる日に納骨する人はない。一年でも家で祀つたらええといつて置いている。墓を手伝つた人、高野へ行つた人が、夕方に酒を飲んで解散した。

谷、福岡正富（昭和一三年生まれ）、二〇一五年九月八日聞き取り

事例八一〇 「骨のぼり」、「骨納めに行く」、という。昔、年貢を納めに行つた寺がある。浦家は一乗院。先祖を祀つてくれる。家によって違う。この班はだいたい一乗院。亡くなると骨を持つて参る。お父さんの骨を納めに行つた。葬式のある

る日に行く人もいる。昔はみなあくる日に行った。毛原の宮へ降りて、長谷まで歩いて、五十町を歩いた。日帰りできた。梅干を中へ入れたおにぎりを作った。ホンデへ弁当を入れた。弁当・草鞋を谷へ掛けた。水の流れるきれいなところに掛けた。山の木へ掛けた。おとしも弁当と草鞋を掛けた。葬儀屋に頼むと草鞋を用意してくれる。途中に親戚がいたのでオチャトしてもらった。今は車で行くから、花坂の焼餅屋でオチャトしてもらおう。事前に電話していない。寄るとお茶を出してくれる。一〇〇〇円ほど供えてくる。帰りの焼餅を頼んでおく。行くときは戻ったら悪いという。高野の寺で一年祀ってもらってから納骨堂に行った。一年たつて、親戚を連れてムカワリに行った。三〇人ほど連れて行った。骨を出してきてくれて納骨に行った。昔はすぐに納める人が多かった。ムカワリで位牌を買ってきた。帰りにコウヤマキは買わない。焼餅は近所に配る。高野へ行くと、間でも買ってくる。護摩豆腐と一緒に配ることもある。

新盆だけ迎えに行く。盆前の都合のいいときに行く。毎年は行かない。

谷、浦宏子（昭和九年生まれ）、二〇一五年八月一〇日聞き取り

事例八―一二 「骨のぼり」という。骨を納めた。亡くなると必ず行った。葬式して二日ほどたつと行った。今は四九日家で祀って行く。家によると、二〇日ほどで行く家も、一か月で行く家もある。秋になると道が凍って危ないといつて早く行く。昔は道がなかったので、途中まで自転車で行った。長谷ぐらゐまで自転車で行ったか。若い人は日帰りしたのではないか。今は高野山まで一時間ほどで行く。亡くなった人の草鞋と弁当を持って行く。初めての谷を渡ったところの木にくくりつける。今でもしている人がいる。

菅沢<sup>すげざわ</sup> 岡田種代（大正二二年生まれ）、二〇一二年八月一七日聞き取り

事例八―一三 納骨は四九日までに行く。それまでは仮の白い位牌。納骨に行つて、位牌をもらつてこないと四九日ができない。先に頼んでおいて、位牌をもらつてくる。四九日がすぎると、墓へ白い位牌を持つて行く。納骨は朝、八時か八時半ごろに出る。今は車なので昼過ぎに帰ってくる。何時に出るといふと、近くの人などがお茶湯にきてくれる。縁に骨をおいて、オ

チャトをしてもらう。花坂の坂が楽に登れるようにということでオチャトをしてくれる。草鞋三足、弁当を持って出る。杖はない。弁当はおにぎりを三つで、中に梅干しと味噌を入れる。蕨をすぐって広げておにぎり三つを包む。納豆を作るように包む。三つ目の谷を越えたところで掛ける。高野参りの弁当という。今でもしている。親類のあるときは、その家でオチャトをしてもらう。親類がないときは、花坂の店でオチャトをもらう。

新仏の家は七日が来たら高野山へ迎えに行く。高野山の持ち寺にお参りに行く。峯尾さんの家は清浄心院。

松ヶ峰、峯尾佳伸（昭和一〇年生まれ、二〇一二年八月一四日聞き取り）

事例八一―四 高野山には亡くなったら参らんなん（参らないといけない）。「骨のぼり」という。父親が亡くなったとき、夫と自転車で行った。平畑家の菩提寺は清浄心院。実家は一乗院。向いは普賢院。新仏のときに、亡くなった人を迎えに高野山へ行く。

今西、平畑キヨコ（昭和一〇年生まれ、二〇一三年一月八日聞き取り）

c 上神野地区 かみこうの

事例八一―五 「骨のぼり」という。上岡さんは五・六回行った。車で行った。四九日までに行くか。三年、五年おいた家もある。草鞋とにぎりこ三つ、塩、味噌を持って行く。よその家のものを作ったこともある。今はしても普通の草履。初めて谷を渡ったとこへ置いた。この上の橋（出口橋のことか）にはたいがいあった。この下には谷がないので、吊っていた。今はしてない。

盆に高野山へ行くことはなかった。



写真8-3 神野橋（高野山方面を望む、草鞋・蕨苞弁当・杖は橋の向こう側の山手に置かれる）（紀美野町樋下、2016年9月）



鎌滝、上岡旭（大正一五年生まれ）、二〇一三年一月  
二九日聞き取り

事例八一―一六 「骨のぼり」という。一年以内に行く。

盆までに納めてくる。できるだけ家で祀ってやろうと  
いう人もいる。家によって日には変わる。にぎりを  
三つ入れて、味噌を添えて、境界まで行く。谷を渡つ  
たとこへ吊るせと、親からも聞いた。最近はそんなこ  
とはしない。置かれた地区は迷惑になるので。母親の  
遺骨は高野の寺に三〇年間保管してもらっている。今  
でも参ったら出して来てくれる。梶谷さんの寺は福地院。菩提寺をもたない家も多い。直接、納骨堂へ行く人が多い。

毛原では盆に高野まで迎えに行つた。こちらでは行かん。

三尾川、梶谷弘（大正一四生まれ）、二〇一三年八月七日聞き取り

事例八一―一七 「骨のぼり」という。草鞋は神野市場の神野橋に吊つていた。

三尾川、北峯範之（昭和一九年生まれ）、二〇一三年二月二六日聞き取り

事例八一―一八 納骨は四九日がすんでから行く。

三尾川、玉泉寺住職、二〇一三年一月七日聞き取り

事例八一―一九 「骨のぼし」という。草鞋と弁当を持って行き、橋を渡つたところへかける。弁当は梅干しを入れた。

大角、窪田旭（昭和一六年生まれ）、二〇一三年九月二日聞き取り

事例八一―二〇 「骨のぼし」は歩いて行つた。上ヶ井では四九日をすまして行つた。一年もおかない。草鞋・おにぎり（味噌



写真8-4 神野橋たもとに置かれた草鞋（写真8-3に同じ）

と梅干)を持って、初めての谷を渡るところに掛ける。おにぎりは藁のホデに入れる。今はしていない。今は草鞋を作る人がいない。今は紙で巻いた草履を掛ける。

上ヶ井<sup>あが</sup>、横山美枝(大正一三年生まれ)、二〇一三年一月五日聞き取り

事例八―二二 「骨のぼり」という。四九日までに行く。草鞋と弁当を持って行った。おにぎり三つと味噌と塩を弁当にした。谷をいつこ(一つ)渡ったところで木へ掛けた。草鞋を見たらさぶしかった(さびしかった)。

初盆に高野山へ参る人もいる。いろいろ。

上ヶ井、中尾スミ子(大正一二年生まれ)、二〇一三年二月二六日聞き取り

事例八―二三 「骨のぼし」という。火葬したあと、骨を二つこしらえて、一つは家へ置いておく。一つは高野山へ持って行く。奥之院の納骨堂へ入れた。まんじゅうや菓子も入れたので夏は腐った。それで、入れさせないようになった。寺へ行くようになって、骨を寺へ預ける。真国は葬式のある日に行く。津川は四九日までの間に行く。それまでは仮の位牌。「骨のぼし」に行ったときに、本式の位牌をこしらえてもらう。仮の位牌を納めて、新しい位牌を持ってきて四九日に拜んでもらう。「骨のぼし」のときには、藁の中にご飯と味噌と梅干を入れて、初めての水の流れるところへおいておく。藁のものはホウデという。今はしていない。車で行ってしまう。どこかに寄ってオチャトをしてもらう。お茶を供えてもらう。知っている家があったら供えてもらう。知っている家がなかったら、花坂の餅屋でオチャトをしてもらう。餅屋は専門やから盆へお茶をしてくれる。自分たちで拜んで志をおいてくる。



写真8-5 神野橋たもとに置かれた杖と竹皮の弁当(写真8-3に同じ)

初めての盆に高野山へ行く。七日盆から一三日までに行く。新盆の家だけ行く。菩提寺に参って、拜んでもらって、経木みたいなものをもらおう。

津川、岡大和（大正一三年生まれ）、二〇一三年一月五日聞き取り

#### d 下神野地区

貴志川流域で、平地が広がっている。神野市場は中世以来の町場であった。

事例八一三三 「骨のぼし」という。高野へ行った。「年越すな」という。葬式はできなくても、「骨のぼし」だけはせー、という。草鞋と、ホデに飯と塩、味噌を入れて、上へ一文銭をくくりつけた。杖を作って持つて行く人もいるが、紺谷さんは作ったことはない。川を渡るとそこへおいとけという。忠雄さんは父親のときに、自転車で行った。奥之院へ行って骨のぼしして、すぐ帰った。昭和一九年だった。食べるものがないときだったので、米を持って行って、炊いてもらって食べた。歩いて行くときは、日帰りは無理だと思う。奥真国では葬式のある日に「骨のぼし」をする。

盆に高野山へ参ることはない。

樋下<sup>ひした</sup> 紺谷忠雄（昭和三年生まれ）、二〇一三年一月一四日聞き取り

事例八一三四 「骨のぼし」に歩いて高野山まで行った。高野山で泊まって、ケーブルで帰った。途中で赤犬に出会ったら、にぎりこをやるうと、にぎりこを持って行った。



写真8-6 神野橋たもとに吊られた藁苞弁当と杖（写真8-3と同じ）

盆に高野山へ参ってくる人もいる。

神野市場、井上忠子（大正一〇年生まれ）、二〇二一年八月一四日聞き取り

事例八一―二五 「骨のぼし」という。土葬の場合は髪の毛と爪を持って行った。女の人は右の髪の毛と爪を高野山へ持って行き、左の髪の毛と爪は先祖へ納める。男の人は左の髪の毛と爪を高野山へ持って行き、右の髪の毛と爪は先祖へ納める。土葬のときは半紙へ包んだ。今では小さい容器へ入れて持って行く。火葬になってからは喉仏と足のほうから三か所の骨を持っていく。国吉・毛原は葬式のある日に行く。上神野・下神野は四九日勤めてから年内に行く。年は越さない。志賀野は四九日の法要を勤める朝に行く。三年ぐらい供養しないと行かない地域もある。市内はまちまち。「骨のぼし」に行く日は、丸い盆に位牌とお骨を祀る。一人一人がお茶を供える。近所の人もオチャトに行く地区もある。オチャトをしてから玄関を踏み出す。草鞋・弁当・杖を持って出る。弁当は下からおにぎり・梅干し・味噌を入れる。弁当には六文銭を吊るす。杖は竹か木腐るもの。草鞋はあまり打たない。早く成仏するように、丁寧に作らない。最初の橋を越えるまでもを言っではいけない。最初の橋を越えるまでは娑婆の世界。今でも歩いて渡る。車もバツクしない。このあたりでは樋下の橋の向こう岸のたもとに弁当・草鞋・杖を置く（写真8―3）。五十町を乗に登れるように供える。永谷の人は、谷がいつばいあるので、三つ目の谷を越えたところに供える。道中、必ず一か所で腰を据えて休む。親戚があればオチャトをしてもらう。花坂の焼餅を売っている店で寄ってオチャトをしてもらうこともある。事前にお願いくこともあるが、突然



写真8―7 神野橋たもとに吊られた  
藁苞弁当と杖（写真8―3  
に同じ）

行ってもオチャトをしてくれる。

神野市場、伊南陽弘（満福寺住職）、二〇一二年五月一七日聞き取り

事例八一―二六 高野山はここから八里ある。歩いていくときは山上で一晩泊った。「骨のぼり」は行く。戦後、親戚の骨を持って行った。毛原の奥までバスがあった。そこから歩いた。日帰りで行った。骨を入れる穴があった。ほりこんで拝むだけだった。

野中、前旭（昭和二年生まれ）、二〇一二年五月一六日聞き取り

事例八一―二七 「お骨のぼし」、「骨のぼし」という。井戸向さんの家は蓮華院。先祖を祀ってくれている。奥さんの実家は円明寺。円明寺では葬式のある日に行く。ここは、都合のええときに行く。四九日までか。母のときは、年末だったので、年が明けて、子どもの夏休みまで待って、八月に家族を連れて行った。初めて川を渡ったところの木に、草鞋とにぎりこをつらくった（吊るした）。神野中学のところ。水のはたにするという。昔は橋が下にあった。車も通らない。今は木を切ったのでない。オチャトしてもらって、帰りに土産の焼餅を買ってくる。お金を包んで渡す。近所へ配る。全部ではない。マキは必ず買ってくる。平素でも買ってくる。お互いに渡し合っている家を買う。位牌は一つにしているので買ってこない。

初盆には高野山には行かない。

安井、井戸向和保（昭和七年生まれ）、二〇一五年九月七日聞き取り

事例八一―二八 「骨のぼし」という。南畑では四九日がすんだらのぼせた。四九日までは家じゅうを魂がもうてる（舞っている）といいて、四九日まではのぼせない。藁草履を二・三足持って、歩いて高野山に行った。五十町を登った。歩いて行くと



写真 8－8 下神野地区から高野山方面を望む  
（右奥の家並みは神野市場、2013年11月）

晩になるので、弁当を持って行って、高野山で泊まった。清浄心院に行った。長谷では葬式の翌日に行く。連れ合い（妻）が長谷の生まれだったのよう知っている。

南畑、溝浦寛時（昭和六年生まれ）、二〇二年八月一日聞き取り

事例八一―二九 「骨のぼし」という。真言宗でない人も行く。かつては骨を納骨堂へほりこんだだけだった。母と連れ合い（妻）のときに行った。一〇〇日だったか、それまでに行くという。祖母のときは父が行った。どこの寺へ行ったか分からないので、自分は満福寺の住職が出た南院へ行くようにした。草鞋・弁当・六文銭をひとそろえそろえて、橋を渡るまで黙って行けという。家の下の橋にかけて行った。子どもに車を回してもらって歩いて、歩いて橋を渡った。樋下の橋にかけてあったが（写真8―3）、大勢通るところでは自立つ。ここは自分たちしか通らないのでちょうどよかった。

新盆は高野山には参らない。

福田、谷垣内和夫（大正一四年生まれ）、二〇一三年一月一四日聞き取り

e 真国地区

真国川流域に位置する。このうち、花野原・初生谷などは上真国、蓑津呂・真国宮・蓑垣内・井堰は下真国と呼ばれている。一方、四郷・円明寺・勝谷は旧細野村に属していた。昭和三年（一九五七）に旧細野村は旧桃山町と分村合併し、四郷・円明寺・勝谷は美里町に合併した。現在では、これらの集落は奥真国と呼ばれている。

事例八一―三〇 「骨のぼり」という。昔は葬式のある日に行った。だんだん、遅く行くようになった。部屋浦さんは四九日がすんで行った。不動院へ納めて、寺から奥之院へ納める。草鞋と弁当を持って行った。弁当はにぎりと梅干しと塩（味噌だったか）の三種類あった。水の流れるところにおいた。鞆淵へ行くまでにかけていく人もいる。草鞋は左になっている。班の年寄りが作ってくれた。年寄りが音頭取りしてくれた。今は葬儀屋が持つてくる。高野山へは鞆淵から行った。歩いて



行ったことはない。

初盆は高野山へ迎えに行った。骨を納めた寺へ迎えに行った。初盆は道が分かれへんのでお迎えに行くという。今は蓮華寺のお坊さんが連れて来てくれる。行つてもかめへんけど。

よ郷、部屋浦ハマ子（昭和一七年生まれ）、二〇一三年九月一〇日聞き取り

事例八—三二 「骨のぼり」という。あくる日は行かない。いつと決まっていけない。四・五日が一週間で参るか。

初盆には高野山へ迎えに行く。八月一三日に行く人が多い。今も行く。歩いて朝早よから行つた。だいぶかかる。二時ごろ起きて行つた。前代さんは歩いて行つたことがある。車やつたら早い。今は高野山まで行くことはいらんという。高野山まで行かんでも、墓まで行つたらそれですむと聞いた。

勝谷、前代清子（昭和四年生まれ）、二〇一三年九月一日聞き取り

事例八—三三 「骨のぼり」という。葬式のある日に参る。一年ぐらいおいておくところもある。ここらは真言宗なので早く行く。土葬のときは、爪・髪の毛を持つて行つた。一週間までに参る。草鞋・藁のホデににぎりこと梅干しを入れたものを持つて行く。谷の水が流れているところへぶらさげてくる。今でもやる。勝谷から上るときと、瀬川から抜けるときとある。車で高野山まで四〇分で行く。勝谷から毛原へ抜けるところに掛けるところがある。知り合いに頼んでおいて、オチャトしてもらおう。「骨のぼり」に行くときは、下へ行かないで、上へ登る。戻つたらいかん、という。田中さんは中三のとき、高野山まで歩いて行つた。おじいさんが亡くなったときに三人で行つた。一〇里ある。日帰りしようと思つたが、長谷まで来て足が動かなくなつて泊まつた。

八月七日に、高野山へ仏迎えに行く。亡くなった人は、必ず七日までに仏迎えに行く。経木をもらつてくる。先祖の場合も行く人もいる。都合に合わせて行く。今は蓮華寺の和尚さんが経木を持ってきてくれる。高野山には行かなくていいという。今は高野山に登る人は少なくなつた。

## 高野山納骨習俗の地域差

円明寺、田中惇元（昭和一〇年生まれ）、二〇一三年七月一九日聞き取り

事例八―三三 「骨のぼり」という。自転車で行く人もいた。行きはおおかた押し上げた。亡くなって盆までの間に行く人もいる。葬式してじきに行く人もいる。いろいろ。坂さんの家は西門院。ここは西門院が多い。

ここから高野山まで七里。高野山には小学校六年のときに大人について歩いて行った。盆前におじいさんを迎えに行った。近所の人たちと連れて行った。亡くなった年に高野山まで迎えに行く。一回だけ行く。仏迎えといった。日帰りだった。あくる日、起きられなかった。勝谷から長谷の宮の手前へ下りる。花坂から大門まで遠い。一町ずつ石が立っている。見もて（見ながら）行った。奥之院へ参って、自分の寺へ行って、お札をもらってくる。

初生谷、坂明雄（昭和九年生まれ）、二〇一三年八月三〇日聞き取り

事例八―三四 「骨のぼり」という。骨をしばらくおいとく人から、すぐに持つて行く人もいる。宿坊で拜んでもらって骨を預けて奥之院へ行った。奥之院に納骨堂がある。

ここから高野山まで七里。勝谷の峠を越えて毛原に出て、花坂から五十町を登った。一町、一町眺めながら登った。最初に行ったのは、おじ（祖父）に連れられて小学校一年のときに登った。歩いて行った。この子えらい、いっこも（まったく）負わんと歩いてきた、といわれた。高野山で泊まった。

花野原、森下富夫（大正一五年生まれ）、二〇一三年八月三〇日聞き取り

事例八―三五 森谷さんと前坊さんは「骨のぼし」、宮西さんは「骨のぼり」という。

四九日までにするのが本当みたい。葬式すんであくる日に行く人もいる。一



写真8-9 真国宮から真国川上流・高野山方面を望む（2013年7月）

週間に往く人もいる(宮西)。

弁当を作って山の水が落ちてるところへ吊る。草鞋と弁当を吊る。今でもくくる。最初の谷でした。鍋谷によく吊っていた。花野原との境界。蓑津呂の領地。

今はもうちよつと向こうへ行つてから吊る(宮西)。

吊つたらさびして(森谷)。

初盆のときだけ、高野山へ迎えに行く。都合のええ日に行く。

蓑津呂、森谷昌子(大正一二年生まれ)・宮西美恵子(昭和四年生まれ)・前坊秀子(昭和五年生まれ)、二〇一三年一二月二五日聞き取り

事例八一三六 納骨。死んだらじきに行く人もいる。昔から早い。一月か二月で行く。四九日までに行く人もいる。骨のぼさなんたら(納骨に行かなかつたら)位牌がない。草鞋と弁当を持って行く。谷においていく。履物と食べ物。旅立ちの礼として、オチャトしてもらう。栃谷さんの家であれば、森本さん、寺岡さんでオチャトしてもらう。線香代を包んでくれる。栃谷さんは高野山まで一回歩いた。ここから高野山まで一〇里、四〇キロある。勝谷峠を越える。車の道とは違う。長谷の宮へ越える道があった。日帰りしようと思うと自転車で行つた。五十町をついで上がった。

真国宮、栃谷宜呂(昭和七年生まれ)、二〇一三年七月一九日聞き取り

事例八一三七 高野山へは「骨参り」は必ず行く。高野山へ初盆に参るのは聞かない。



写真8-10 最近立てられた草鞋と弁当(紀美野町蓑垣内、2017年6月、りら創造芸術高等学校提供)

菱垣内、芝待雄（昭和二年生まれ）、二〇一四年一月八日聞き取り

事例八一三八 「骨のぼし」に行ったことはある。五十町を登って大門に行った。鞍瀨から歩いたこともある。日帰りで行った。五時ごろ出た。「骨のぼし」に行く日は決まっていない。早く持つて行く人もいる。かわいそうやからと遅く持つて行く人もいる。草鞋と弁当を持つて行った。知り合いのところで、お茶を出してもらう。中家さんの寺は回向院。井堰は回向院が多いけど、大門院などいろいろある。

高野山に盆に行くことはない。

井堰、中家喜久司（昭和四年生まれ）、二〇一三年九月一日聞き取り

### 3 旧野上町地域

『野上町誌 下』には以下のような記述がある〔野上町誌編さん委員会編 一九八五〕。

「骨上り」・「骨のぼし」の習俗がある。野上町内でも土地によって多少の相違がある。行く時期は、亡くなった年内である。餓鬼の弁当と草鞋を持つて行き、途中の谷に捨てて行く。草鞋の代わりに杖の場合もある。（筆者要約）

#### a 志賀野地区

事例八一三九 「骨のぼり」という。四九日がすんでから行った。

東野、七良浴光（昭和五年生まれ）、二〇一四年九月一日聞き取り

事例八一四〇 「骨のぼし」という。おじいさんのときに、父親と弟と三人で行った。自転車で行った。橋本のほうから行った。帰りは毛原から帰った。日帰りをした。木の根っこがある道を自転車を押して登った。

西野、赤阪啓子（昭和一一年生まれ）、二〇一三年八月一四日聞き取り

事例八一四一 (なんと呼ぶか、という問いに「骨のぼり」だったか。四九日までは家の周りを回っているという。早く連れて行ったらかわいそうという。四九日までに行く。少し早めに行く人もいるが、自分は明日が四九日という日に親戚を連れて行った。父のときも母のときもそうした。家の外に洗濯場がある。電気をつけて洗濯する。亡くなったときは、なんかさびしい感じがする。高野山へ連れて行くと、つきが落ちたみたいになって、外へ出てもなんともなくなる。奥之院へ直接行く人もいるが、別に寺がある家もある。釜滝さん(釜滝薬師、志賀野地区の檀那寺にあたる)の寺がある。ほとんどその寺に行っている。父は寺の位にうるさかったので、光台院に替えた。

草履とおにぎりを持っていく。家を出て、親戚の家でオチャトしてもらいながら行く。自分はいとこの家に寄った。応接間へ骨を置いてお茶を入れてくれる。花坂のまんじゅう屋でもオチャトしてくれる。お礼を包んでくる。

一年間、寺で骨を置いてもらい、一年たつと最後のお出合いに来てくださいと連絡が来る。寺へ行くと骨を出してきてくれて、奥之院へ行く。

高野山で位牌を買ってくる。初盆までは仏壇の外で位牌を祀っていた。初盆が終わると仏壇の中へ入れた。

お茶してもらった家には焼餅を買ってきた。近所ではなくて、お茶に寄った家を買ってくる。マキは買ってこない。自分とこはマキを作っていないから買ってくる。(二〇一五年八月二四日聞き取り)

(筆者からの電話のあと) 姉に聞いたら「骨のぼし」といった。姉に「骨のぼり」ではないか、と聞くと、「骨のぼり」やったら自分のことや、と言った。四九日までに行く。啓子さんとお茶してもうて、焼餅売るところでお茶してもうた。(二〇一五年九月七日聞き取り)

西野、赤阪恵子(昭和一八年生まれ)、二〇一五年八月二四日(電話)・九月七日聞き取り

事例八一四二 「骨のぼし」という。四九日に行った。家で法要して、みんな寄るから、その日に行った。美里の奥(毛原など)はあくる日に行く。四九日はシアゲという。寺は普賢院。弁当と草鞋を置く場所がある。高野山の中腹ぐらいにスペース

がある。そこへ置いてから、頑張っ行ってけよ、ということ。最近では草鞋がなくて困った。するもんや、と思っていた。マキ、焼餅は自分とこに買ってくる。配ることはない。位牌は買わない。釜滝薬師で位牌を書いてもらっている。一人一人のもではない。

西野、絵図真理子（昭和二八年生まれ）、二〇一五年九月七日聞き取り

事例八―四三 「骨のぼし」という。四九日までに行った。位牌を買ってきて、光台院で拜んでもらって入れてもらった。

それまでは仮の位牌がある。草鞋と弁当のことは知らない。寺は光台院。四九日は玉泉院に来てもらった。

西野、大隅真由美（昭和三二年生まれ）、二〇一五年九月七日聞き取り

事例八―四四 「骨のぼし」という。高野山の寺は大円院（西山）。清水はあくる日に行く（田津原）。

マキとか焼餅はお茶してくれたとこへ買う。世話かけたとこへ買う。「骨のぼし」してきました、と配る。

西野、西山一太（昭和九年生まれ）・赤阪啓子・田津原日富美、二〇一五年九月七日聞き取り

事例八―四五 「骨のぼし」という。野田原も葬式のあくる日に行く。四九日までほつとく。都合のええときに行く。草鞋と弁当を道中へ吊って行った。どこでもいい。高野に近づいたら吊った。前野さんは二〇年前も吊った。花坂で餅を売っているところでオチャットしてもらう。昔は寄った。歩いて行ったときは泊まりで行った。神野から行った。電車で行くときは、船戸（和歌山市）まで歩いた。泊まらないで帰った。大浦さんの菩提寺は浄菩提院だった。国木原はこの寺が多かった。前野さんは常喜院。

国木原、大浦龍三（昭和五年生まれ）・前野忠弘（昭和一九年生まれ）、二〇一三年八月八日聞き取り

事例八―四六 「骨のぼし」という。四九日すんでから行く。寒いときは引き延ばす。高野山で位牌を作ってもらった。今は高野山で作るとは限らない。毛原は「骨のぼし」に行くのが早い。草鞋とおにぎりを作って、橋へ結んで行く。さみしいところへ結んだ。今でもやっている。高野山に行くのは「骨のぼし」ぐらいだった。



松瀬、結城嗣郎（昭和二十七年生まれ）、二〇一三年八月一日聞き取り

b 小川地区

事例八一四七 高野山には納骨以外に行くことはなかった。余裕がなかった。不幸ごとがあつて仏さんができると納骨に行つた。「骨のぼり」という。「骨のぼり」は四九日までに行くこともある。だいたいあくる日。草鞋・弁当を持って、通り道の木へ吊るしながら行く。藁で納豆を包む格好で弁当をする。知人の家などで一休みする。寄つてお茶をいただく。高野に行つたら菩提寺によつて奥之院の納骨所へ行く。最近ではたいいの家は奥之院へ直接納骨に行く。拜んでもらつて帰ってくる。菩提寺によつて供養してもらつて、寺から納骨する家もある。中谷さんは高野山まで歩いたことはない。真国、鞆淵を通つて、花坂から歩いて登つた。

坂本、中谷清種（昭和三年生まれ）、二〇一二年九月二〇日聞き取り

事例八一四八 納骨は高野山へ行く。四九日たつてから行く。寒いときはしばらくおいておく。藁で飯と梅干を包んで谷へかけていた。谷を渡つたところへかけた。行ってきますということ。今は見なくなつた。昔は歩いて高野山へ行つた。寺で泊まつてきたという。

中田、大谷延由（昭和十九年生まれ）、二〇一二年六月二日聞き取り

事例八一四九 尚治さんは「骨のぼせ」、正子さんは「骨のぼし」という。一年たたんまに（たたないうちに）行く人もいる。決まつた寺はない。高野山には「骨のぼし」に行くだけで、あとは行かない。

中田、南尚治（大正一〇年生まれ）・正子（大正一〇年生まれ）、二〇一二年九月一〇日聞き取り

事例八一五〇 高野山には「骨のぼし」に行く。寺は決まつていない。おじいさんは赤松院だった。おばあさんは違つた。

中田、稲葉崇（大正一三年生まれ）・登喜代（昭和六年生まれ）、二〇一二年九月二日聞き取り

事例八一五二 浄土真宗なので、高野山に納骨には行かない。

奥佐々、平畑栄治（昭和九年生まれ）、二〇二二年九月二〇日聞き取り

事例八一五二 「骨のぼし」、「お骨のぼし」という。真言宗の人は今でも行く。一年ぐらい以内に行く。在所によって違う。あくる日に行くところもある。生え抜きはほとんど真言宗。よそから変わってきた人は違う宗派の人がいる。

吉野、中家俊（昭和八年生まれ）、二〇一四年八月二二日聞き取り

事例八一五三 「骨のぼし」という。四九日終わってから高野へ納骨する。おにぎりを谷へ供える。

吉野、橋本ユミ（医王寺住職の妻）・林秀吉（昭和二四年生まれ）、二〇一四年九月九日聞き取り

c 東野上地区

事例八一五四 柴目は西方寺（浄土真宗）の檀家が多い。納骨は京都へ行く。高野山に行く人は二・三人。

柴目、上田幹雄（昭和六年生まれ）、二〇一三年八月八日聞き取り

事例八一五五 「骨のぼし」という。浄土やけど、京都の知恩院へ行かずに、高野山へ持って行った。行く日には家によってわからん。ムカワリといって、一年たつてから行くところもある。谷を渡るとき、草鞋と飯を藁で包んだものを吊った。納豆みたいなして吊った。から谷のはたに谷がある。その谷に吊っていた。今は吊っていない。お茶を供える、親戚に寄る、というの知らない。マキとか護摩豆腐、花坂の焼餅などを買ってきて、知り合いに、「行ってきたで」と渡す。

下佐々、井澤武二（昭和六年生まれ）・井澤慶三（昭和一〇年生まれ）、二〇一六年九月六日聞き取り

事例八一五六 「骨納め」という（井澤・上中）。「骨のぼし」と言いますか、と問うと「骨のぼし」という人もいる（上中）。井澤さんは、「骨のぼし」、は初めて聞いた。井澤さんは浄土宗。ここらは浄土宗の人が多いが、納骨は知恩院ではない。

近所でお茶を供える。弁当・草鞋・お水・線香を持っていく。橋を越えたところに掛ける。樋下の橋のところにも今でも二・

三個掛かっている。慰霊碑があるところ（写真8―3）。今はだいたひ花坂の上にする。井澤さんは、最近、納骨に行った。種下に掛けたかったけど、新しい道を通ったので、通り過ぎてしまった。それで、高野の下へ掛けた。最近は草鞋がない。夫の母が編んだ草鞋がたまたまあった。納骨に行く仏さんが六〇歳の若い人だったので、鼻緒を赤に替えた。上中さんは、美里の人が編んでくれた。弁当はおにぎりを三つ。味噌・梅干し・昆布。竹の皮で包む。腐ってしまうもの。ビニールはだめ。一合を三つに分けて作る。

昔は、ここから高野山へ行く道は街道だった。草鞋を替えたい人のためにも掛けたと、おじいさん、おばあさんに聞いた（上中）。

いつ行くかは人による。二年ほど置いている家もある。四九日すんだらすぐに行く人もいる。真言は、「お大師さんのお山に返してあげる」、「いつまでも家においとくもんでない」、といい、四九日すんだら行く。位牌は上で買ったたり、お寺でお願いしたり、仏壇屋で買う人もいる。

上中さんは、この前、和歌山の友達が、納骨のときに立ち寄った。休む。中へ入れたらあかんの、玄関で仏さんのお骨とお茶を置くものを作って、お接待する。帰ってきたら、お接待してくれたところに、焼餅とかマキをあげる。しない人もいる。

道中、必ず一か所寄りなさいという。寄れない人は、焼餅屋に寄る（井澤）。

小畑、井澤佳代子（昭和一八年生まれ）・上中典子（昭和二三年生まれ）、二〇一六年九月六日聞き取り

#### 4 紀美野町における納骨習俗の特徴

事例から特徴をまとめると以下のようになる。

- ① 名称 紀美野町域では、名称は地域差が顕著である。コツノボリ（長谷宮・毛原宮・毛原中・毛原小西・

- ② 田・谷・菅沢・今西・鎌滝・三尾川・上ヶ井・野中・四郷・勝谷・円明寺・初生谷・花野原・蓼津呂・東野・坂本）、コツノボシ（大角・上ヶ井・津川・樋下・神野市場・安井・南畑・福田・蓼津呂・井堰・西野・国木原・松瀬・中田・吉野・下佐々・小畑）と呼ぶ人が多い。コツノボセ（中田）、コツオサメ（谷）、コウヤノボリ（毛原宮・毛原中）、コウヤマイリ（毛原中）、コツマイリ（毛原小西）という人もいる。
- 日程 日程も地域差が認められる。葬式の翌日に行く（長谷宮・毛原宮・毛原中・毛原小西・田・谷・四郷・円明寺・蓼津呂）、葬式後二日ほどして行く（菅沢）、四九日までに行く（松ヶ峰・鎌滝・上ヶ井・津川・蓼津呂・真国宮・西野）、四九日に行く（西野）、四九日が終わってから行く（上ヶ井・南畑・東野・国木原・松瀬・中田・吉野・小畑）、一年以内に行く（三尾川・樋下・吉野）などと語られる。「四九日までは家じゅうを魂がもうてる（舞っている）」といって、「四九日まではのぼせない」、というところもある（南畑）。「四九日までは家の周りを回っている」、「早く連れて行ったらかわいそう」などというところもある（井堰・西野）。最近では四九日が終わってから行く人もある（谷・菅沢）。全体として、最近では納骨に行く日程が遅くなったといわれる。
- ③ 納骨するもの 土葬のときは髪・爪を持って行った。今は骨の一部を持って行く。骨箱を白い布で包んで首からかけて行く人もいた（毛原中）。
- ④ 行く人 男の人が三～五人で行った（毛原中）。今は女の人も行くようになった。
- ⑤ 持参する物 弁当と草鞋を持って行くことはほぼ共通している。持って行く弁当のことを、死んだ人の弁当、という人もいる（毛原中・菅沢）。弁当とは、ホデ・ホウデ・ホンデなどという薬に包んだ握り飯を持参した（長谷宮・毛原宮・毛原中・谷・松ヶ峰・津川・樋下・円明寺・中田・下佐々）。明確には分からないが、草鞋とともに握り飯を吊るした、という語りから判断すると、握り飯を薬に包んでいた地域が多かつ

たように思われる。竹の皮に包んだところもある（小畑）。握り飯には梅干・味噌・塩などを入れたところもある。草鞋と弁当は亡くなった人のために持って行く、というところもある（菅沢）。握り飯を「赤犬にあげる」、という人もいる（神野市場）。草鞋は左になつてゐる（四郷）。草鞋・弁当の上に一文銭をくくりつけた人もいる（樋下）。杖を持って行く人もいる（樋下）。六文銭を持って行くところもある（福田）。

⑥ 行くときの作法 自宅・親戚の家などでオチャトをすることはほぼ共通している。三か所でオチャトしてもらうというところもある（毛原中）。花坂の坂が楽に上れるようにオチャトをするところもある（松ヶ峰）。旅立ちの礼としてオチャトしてもらうという人もいる（真国宮）。草鞋・弁当は水があるところの木の枝に吊るした。その場所は、谷・橋などということもあるが、谷・川を一つ越えたところ（田・菅沢・鎌滝・上ヶ井・安井・蓑津呂）、初めて水が流れるところ（津川）、谷を三つ越えたところ（毛原中・谷・松ヶ峰）など、さまざま言い方がされる。また、行くときには戻つてはいけないという（円明寺）。橋を渡るまでは黙つて行け、というところもある（福田）。

⑦ 納骨する場所 菩提寺か奥之院へ行く。最近では奥之院へ行く人が増えているという。菩提寺へ行く人は、菩提寺で位牌に魂を入れてもらうこともある。

⑧ 帰りの作法 とくに確認できなかった。

⑨ 買って帰るもの 位牌屋で位牌を注文し、帰つて帰る。高野山のまんじゅう・胡麻豆腐、花坂の焼餅などを買って帰る。コウヤマキを配るところもある（安井・西野・下佐々・小畑）。

⑩ 納骨後の供養 買って帰った位牌にオシヨネを入れてもらう。当日の夜に供養するところもある（長谷宮・毛原中）。毛原宮ではこれをオチツキ供養という。四九日に拜んでもらう（津川）、位牌をもらつてこな

いと四九日ができない(松ヶ峰)、「骨のぼさなんだら位牌がない」(真国宮)と語る人もいる。初盆のときには、新仏を高野山に迎えに行くところもある(毛原宮・毛原中・田・谷・松ヶ峰・今西・上ヶ井・津川・四郷・勝谷・円明寺・初生谷・蓑津呂)。

紀美野町域では旧美里町は真言宗の檀家が多いが、旧野上町の西部に真言宗以外の寺院・檀家が存在する。真言宗以外の檀家では高野山以外に納骨することもあるが、町域全体でみれば高野山への納骨習俗が広がっている。紀美野町域での納骨習俗は地域差が顕著である。東部ではコツノポリといい、葬式の翌日に行く。西部ではコツノポリといい、四九日前後に行く。東部では当日に位牌供養、西部では四九日に位牌供養する場合が多い。東部では初盆に高野山へ仏を迎えに行くが、西部では初盆には高野山に行かないという。このように、紀美野町では東部と西部で納骨習俗に地域差がある。

一方、町域で共通した納骨習俗としては、藁苞の弁当や草鞋を持参し、谷を渡ったところに掛けるという習俗が特徴的である。弁当と草鞋を持参する人は減ったというが、現在でも町域には弁当・草鞋を掛けてある場所があり、おこなっている人々がいることを示している。紀美野町では帰りに店などに立ち寄ることはないようである。

また、紀美野町においては、納骨の際、歩いて行った、自転車で行った、という人たちがいることも特徴的である。紀ノ川筋では明治時代から鉄道が発達したが、山間部では鉄道はなく、道路の整備も遅かった。紀美野町からは、高野町の花坂まで行き、そこから五十町坂を登るルートが最短であったため、町域では西端部の一部地域を除き、現在のJR和歌山線・南海高野線・ケーブルを利用するために迂回することはなかった。したがって、昭和二〇年代でも高野山に行くには徒歩か自転車であった。

紀美野町における納骨習俗の地域差には、地形や政治・経済的な背景もあつたと考えられるが、最も大きな要因

は高野山への物理的な距離であつたと思われる。東部の地域では、歩いて日帰りが高野山に行くことができた。高野山まで片道五里などと語られる。歩いて日帰りで高野山に行くことができる地域では、葬式の翌日に納骨し、初盆にも高野山へ仏を迎えることになつていたと考えられる。東部の地域では、隣接する高野町やかつらぎ町ほど、高野山との経済的な結びつきはなかつたものの、死者が登る霊山として認識されていた。ただし、東部の毛原地区では、盆に有田川町の岩坂観音に参る習俗もあつた。高野山以上に、地元の身近な山に仏がいるという感覚があつた名残ではなからうか。

一方、西部では高野山まで片道一〇里などと語られる。歩いて日帰りができる距離ではなかつた。泊りがけで高野山まで行かなければならない地域では、高野山は身近な地元の山というわけではない。自分たちの集落からは見えない山であり、徒歩で行き来する時代には納骨以外に行くことがない山であつた。四九日までは魂が家にいる、早く連れて行つたらかわいそう、などという語りから判断すると、死者を早く高野山へ送つてしまうことに対する心理的抵抗があつたように思われる。それでも、四九日前後に納骨し、高野山で買つてきた位牌を供養することがおこなわれており、納骨は葬送儀礼の一環として位置づけられている。ところで、西部では盆過ぎに生石山に登つて檜の枝を折り採つてくる習俗がある〔藤井 二〇一一〕。毛原地区同様、高野山以上に身近な霊山に登り、神や仏を迎えてきた形跡が認められる。

## 九 和歌山市の事例

和歌山市は紀ノ川河口部の平野に位置する。那賀郡・名草郡・海部郡に属していた。江戸時代には紀伊藩の城下町として栄えた。

和歌山市では葬送儀礼の報告などにも納骨のことは触れられていない〔和歌山市伝承文化調査委員会 一九八



高野山納骨習俗の地域差



地図7 和歌山市 (国土地理院ウェブサイト地図に加筆)

八) 筆者は、大学三年生の「伝承学概論」のレポートにおいて、祖母からの聞き取りを記していた。その後、いくつかの地区で納骨のことも聞いている。納骨習俗を調査し始めてからは、近畿大学文学部学生の学生に協力してもらい、和歌山市在住の方々にアンケート調査もおこなった。

事例九一 実家は小倉地区おくらの光恩寺(浄土宗)の檀家。金谷の人は、浄土宗でも高野山に納骨する人が多い。「骨のぼせ」という。実家の坂口家ではみねよの両親も高野山に納骨している。光恩寺には江戸時代から火葬場がある。「骨のぼせ」には骨を持って行った。

金谷、藤井みねよ(大正一〇年生まれ、和歌山市内に在住)、一九九一年聞き取り

事例九二 永穂の人でも高野山に骨をもって行く人もいるが、永正寺の檀家は一周忌がすんでから京都の五条坂に持って行く。

永穂、三輪桑三(大正四年生まれ)・三輪三重子(大正九年生まれ、出身は海南市黒江)、二〇〇〇年二月一三日聞き取り

事例九三 実家の滝畑では梶取(総持寺)へ納めに行く。

滝畑、馬谷時子(昭和九年生まれ、紀の川市中三谷在住)、二〇一五年八月一日聞き取り

事例九四 坂口家は浄土宗であるが、昔から高野山に納骨をする。坂口寅雄さん(事例九一の藤井みねよの兄)は平成九年(一九九七)九月に亡くなった。冬になって雪が降るといけないので一月に高野山へ納骨した。寅雄さんの妻・ヨシコさんは「年越したらあかん」と言っていた。ヨシコさんは平成三三年(二〇一一)三月に亡くなり、年内に高野山に納骨した。娘の千代美さんは、葬儀屋で位牌を作ってもらい、その位牌を高野山へ持って行った。それは戒名を知らせるだけの意味で、オシヨネ入れとは違うという。

坂口千代美(和歌山市内に在住)、(坂口寅雄さんは和歌山市金谷出身で大正八年生まれ、坂口ヨシコさんは紀の川市貴志川町井ノ口出身で大正七年生まれ)、二〇一五年八月聞き取り

## 高野山納骨習俗の地域差

事例九一五 筆者が祖母（事例九一一の藤井みねよ）の納骨をおこなった事例である。みねよの夫・義春は山口地区（中筋

日延）の出身で分家。本家は永穂・永正寺（浄土真宗）の檀家。義春は戦死しているために骨はなかった。みねよの死後、筆者はみねよの実家の風習を尊重し、また和歌山県北部における高野山納骨の習俗にしたがって、みねよの骨の一部を高野山納骨することにした。平成二六年（二〇一四）二月に死去した後、筆者の家の都合で納骨の日程を決めた。平成二七年（二〇一五）八月に車で行った。オチャトなどの作法は伝わっていないが、筆者が聞き取りで聞いていたため、花坂の焼餅屋でオチャトをした。奥之院に直接納骨をした。なお、筆者の父は浄土真宗の教えに従って、祖母の骨の一部を本願寺へ納骨した。

事例九一六 真言宗の檀家。奥之院に納骨。一年ほどたってから行った。行く時期はとくに決まっていない。浄土宗の檀家。オチャトはない。持参するものもない。位牌は高野山では買わない。葬式後に業者から購入し、葬式から一週間以内に開眼供養をおこなった。コウヤマキなどは買っていない。

前田亜由（情報提供）、（話者は和歌山市柳丁出身、昭和二四年生まれ、男性）

事例九一七 浄土真宗の檀家。「骨納め」という。奥之院に納骨。一年以内に行った。位牌は



写真9-1 阪和自動車道紀ノ川SAから南東方向を望む（2006年7月）



写真9-2 花坂の焼餅屋でのオチャト（高野町、2015年8月）

買ってこない。オチャトはない。持参するものもない。高野山で位牌は購入しない。コウヤマキ・焼餅などは買って帰る。

谷崎茜（情報提供）、（話者は和歌山市三葛出身、昭和二年生まれ、男性）

事例九一八 浄土宗の檀家。納骨という。奥之院に納骨。一年以上たつて行った。位牌は持参する。オチャトはない。持参するものもない。高野山で位牌は購入しない。コウヤマキ・焼餅・護摩豆腐などは買って帰る。

谷崎茜（情報提供）、（話者は和歌山市松江北出身、昭和五年生まれ、女性）

事例九一九 浄土宗の檀家。知恩院に納骨に行く。

中野 森田莉子（情報提供）

事例九二〇 人が亡くなると、骨は年越しをせんまに、大川さん（報恩講寺）に納骨する。そこから京都の本山に持って行ってくれる。骨がたまると、つぶして阿弥陀さんを作ると聞いた。

加太<sup>かた</sup> 鉛三之助（大正一五年生まれ）、二〇〇〇年三月三日聞き取り

和歌山市では浄土宗・浄土真宗・日蓮宗などの檀家も多い。宗旨にかかわらず高野山へ納骨する人も多いが、宗旨の本山へ納骨する人もいる。納骨についての呼称はみられず、日程もさまざまである。持参するものもなく、オチャトなどの作法もみられない。

## 一〇 海南市の事例

海南市は旧海南市と旧下津町が平成一七年（二〇〇五）に合併している。旧海南市では紀美野町・有田川町の産物を集積し、加工する産業が発達した。旧下津町では江戸時代からみかん栽培が盛んであった。

海南市では高野山への納骨習俗はほとんど報告がない。ただし、旧下津町<sup>おむくほ</sup>大窪で、一周忌までに本山へ納骨する

高野山納骨習俗の地域差



地図8 海南市・有田川町・有田市（国土地理院ウェブサイト地図に加筆）

ことを「骨のぼせ」という、という報告がある（和歌山県教育委員会社会教育課 一九六五）。

筆者は平成二〇年（二〇〇八）から海南市教育委員会の民俗調査をおこなっている。そのなかで、納骨習俗についても聞き取りをおこなった。

事例一〇一一 高野山へ納骨することはない。本願寺、光明寺へ納骨に行く。

大窪、中道一郎（昭和一五年生まれ）・中井富美夫（昭和二三年生まれ）・宮本芳比古（昭和二三年生まれ）、二〇一四年八月  
一二日聞き取り

事例一〇一二 真宗の檀家でも高野山へ納骨に行く人もいると思う。聞かれれば本願寺に行ってくださいと言うが、止めることはない。

仁義、児玉真英（教念寺住職）、二〇一四年三月一三日聞き取り

事例一〇一三 納骨は高野山には行かない。一心寺か京都に行く。極楽寺にも納骨できる。

塩津、南方嘉門（昭和二〇年生まれ）、二〇一四年一月二日聞き取り

海南市の場合も浄土宗・浄土真宗の檀家が多い。本山へ納骨に行く人が多いようである。高野山へ納骨する人もいると思われるが、筆者が確認したなかでは確認できなかった。

#### 一一 有田川町の事例

有田川町は、平成一八年（二〇〇六）、有田川流域の清水町・金屋町・吉備町が合併して成立した町である。東部の旧清水町は高野山に近くて山も深いが、旧金屋町・旧吉備町付近は流域の平野も広がってくる。

旧清水町域では、近畿民俗学会の調査報告のなかで、「人の一生」の「葬制」に「コツアゲ」が取り上げられて



いる〔近畿民俗学会 一九七六〕。また、口絵写真として、コツノボセのときの杖・草鞋・弁当の写真が掲載されている。

コツノボシ（骨上し）ともいう。葬式の翌日、故人の髪と爪を持って、必ず一人で高野へ登る。親類は見送りをする。コツの入った袋を胸にかけて、竹の杖・弁当・草鞋か紙巻き草履を持って行く。弁当は死者の昼飯で、藁の苞に入れる。死者の弁当と杖は、初めての谷を越えたところで、岩や木に掛けて置く。歩いて行くころは翌日に帰ったが、車で行くようになり、日帰りをするようになった。納骨に行った人が帰ると、親族が迎えて、位牌になって帰ってきた新仏にお勤めをする。（筆者要約）

『清水町誌 下』にも「第八編 人々のくらし」の「第二章 一生の儀礼」のなかに取り上げられている〔清水町誌編さん委員会 一九九八〕。

粟生は京都、その他の地区は高野山へ「骨のぼし」をした。遺髪を持って行ったが、現在では遺骨を持って行く。年内に行く。同じ地区でほかに葬式があれば両家で連れ立って高野山に登った。近年では車で行くようになり、早めに行くようになった。出発のとき、親類が骨にシキミの葉で水向けして送り出す。餓鬼の弁当（藁の苞に握り飯三個を詰める）・草鞋や竹の杖を持って出る。村のいずれに捨てて行く。徒歩で行くころは、花園の梁瀬坂を上がり、辻の茶屋で一服した。ここで茶店が遺髪にお茶湯を供えてくれた。菩提寺か奥之院へ納め、帰りに位牌を買ってくる。大門付近でまんじゅうを買い、近所へ土産として配る。（筆者要約）

「和歌山県の葬送・墓制」では以下のような記述もある〔松本 一九七



写真 11 - 1 道中に置いた草鞋と藁苞弁当（左は山の神の祠）（有田川町久野原、2006年3月）

九。

清水では、仏は高野山から梁瀬の坂を越えて帰り、縁側から入るとお客さんのように考えており、爺婆などは縁側に腰をかけて待つ風景も見られた。

旧金屋町域では、国学院大学民俗学研究会による旧五西<sup>さしき</sup>月<sup>き</sup>村の報告書の「葬送」のなかに取り上げられている〔国学院大学民俗学研究会 一九六二〕。

死者の髪の毛を左右二か所切り取り、女性の場合は右を高野山、左を墓、男性は左を高野山、右を墓へ持って行く。火葬のところは分骨を持って行く。高野山に納骨に行くことをコツノボシという。四九日が終わって年内に行く。頭髪を半紙に包んで首に下げて行く。草鞋四足ぐらい用意していく。道中では旅館に泊まらず寺に泊まる。家の者は魚類を食べずに精進した。四・五年ぐらい前からは、京都の知恩院へ持って行く者もある。（筆者要約）

『金屋町誌 下』にも「第八編 民俗」の「第二章 行事習俗」の「第五節 葬送習俗」に以下のような短文の記述がある（金屋町誌編集委員会編 一九七三）。

遺骨か遺髪を高野山や本山に納める。コツノボシといっている。（筆者要約）

旧吉備町域では『吉備町誌 下』において、「第一〇編 民俗」の「第三章 人の一生」に「骨のぼし」として以下のように取り上げられている〔吉備町誌編纂委員会 一九八〇〕。

死後、三年以内に宗旨にしたがって遺骨を納骨する。近親者二・三名で、京都・梶取（和歌山市）・高野山へ行った。「骨のぼし」という。昔は歩いて行った



写真11-2 写真11-1と同じ

ので、道中の木の枝などに弁当（藁のツトへ握り飯を入れた）を吊るした。昭和初年ごろから汽車を使い、最近では車で行くので、ツトの弁当は絶えた。（筆者要約）

筆者は有田川町域では調査をおこなうことができなかつた。筆者が聞いたのは、有田川町出身の方の話のみであつた。

事例一—— 杉野原から行った。葬式のある日に行く。草鞋・ホウデのおにぎりを持って行く。家から初めての谷を渡る。ところで供えて、お水を飲ませた。おにぎりとお草鞋を吊つていく。高野へは持つて行けへん。杉野原では傘は差さなかつた。酒まんじゅうを買ってくる。

杉野原、横山小良（大正二二年生まれ、杉野原出身）、二〇一六年八月一九日聞き取り

有田川町では納骨習俗の調査をおこなうことができなかつた。しかし、筆者は平成一八年（二〇〇六）三月に旧清水町久野原くのぼらにおいて、草鞋と藁苞弁当を吊つているところを見た。国道四八〇号線から野井子谷林道が分岐する付近に山の神の祠があり、祠の横の木に立てかけられる状態で草鞋や弁当が置かれていた（写真11-1・2・3）。有田川町清水方面の人々にすれば、国道を高野山方面へ向かい、橋を渡つたところにある祠の横に草鞋や弁当を置いていることになる。また、先述した報告から考えても、広範囲に高野山への納骨習俗が広がつていたと思われる。とくに、町域東部の旧清水町では盛んであつたように思われる。



写真11-3 写真11-1と同じ（六文銭がついている）

## 一二 有田市の事例

有田市は有田川下流域に位置する。江戸時代から傾斜地を利用してみかん栽培が盛んである。有田市域では納骨に関する報告は確認できなかった。有田市域では、平成二九年（二〇一七）三月にみかん栽培の聞き取りをする際に、以下の話を聞いた。

事例二二―一 「骨のぼす」といった。昔はみな、高野山へ行った。堂みたいなところへほりこんできたらよかったという。今では本山の光明寺へ行く人が多い。戦後になってから、得生寺で世話をしてバスで行く。林家は和歌山の梶取さん（総持寺）へ行く。昔は歩いて高野山へ行った。歩いて行くときは、この奥の峠で日の出を迎えないと、晩までに高野山に着かんといった。二川の上の方の峠。この峠で日の出を迎えるという、夜中の二時ごろに出て行くことになる。暗いうちに出ないといけない。父から聞いた。林さんの父の納骨は梶取へ行った。祖父はたぶん高野山へ行った。

糸我<sup>いとが</sup>、林安蔵（昭和七年生まれ）、二〇一七年三月二七日聞き取り

事例二二―二 このあたりは真言宗は少ない。宗派の寺へ納骨する。高野山への納骨はしない。親は梶取さん（総持寺）へ納骨した。光明寺に納骨する人もいる。今は本光寺（新堂の檀那寺、西山浄土宗）に納骨する。昔は本山でないと、といった。新堂、宮崎義一（昭和六年生まれ）、二〇一七年三月二七日聞き取り

有田市では真言宗の寺院・檀家は少ないが、高野山に納骨する家も見られた。



写真 12-1 安諦橋から有田川上流を望む（有田市、2017年3月）

一三 和歌山県中南部の事例

和歌山県北部の紀北に対して、中部を紀中、南部を紀南と呼び、県を三つの地域に区分することがある。紀中は日高川流域などを中心とする日高郡に該当する。紀南は西牟婁郡、東牟婁郡に所属し、熊野地方とも呼ばれる。

日高郡でも高野山への納骨は多かったという〔野田 一九七四〕。近畿民俗学会による旧中津村（現在の日高川町）の共同調査報告では、「葬送儀礼」に「コツノボセ」が以下のように取り上げられている〔近畿民俗学会 一九七四〕。

下田原は天台宗であるが、道のりが近いということで高野山に「骨上せ」をした。一足の草鞋とホトケサンノメシ（ツトに入れた握り飯）を村はずれの木の枝に掛ける。原日浦では、出発に際して親類が寄って水向けをする。下田原では、本山詣りといって、髪・歯を比叡山に持って行くこともある。（筆者要約）

また、同書の「墓制」には以下のように記されている。

仏壇の遺髪は後日、知恩院へ納めに行つたが最近は交通の便と自家用車の普及でレクリエーションを兼ねて（？）高野山へ納髪するのが増加しつつあるのも時代の流れであろう。

由良町では以下のような報告がある（由良町誌編集委員会 一九九二）。

法林寺（西山浄土宗）の場合は京都の光明寺に納骨する。興国寺の場合は興国寺の納骨堂か京都の妙心寺へ納骨する。長谷寺の場合は高野山か興国寺の納骨堂へ納骨する。（筆者要約）

御坊市では以下のような報告がある（御坊市史編さん委員会 一九八一）。

一年して、コツノボシ・コツオサメをする。高野山・知恩院・西大谷本廟などの本山や小松原の九品寺（浄土宗鎮西派の中山）が選ばれる。閏年に納めたら悪いという。富安ではコツノボシのとき、コツベントウといって、おにぎりを二つ苞に入れて川のそばに吊るした。（筆者要約）

一方、和歌山県南部では、高野山に納骨する習俗の報告はなく、筆者の上富田町・白浜町・新宮市などでの調査でも確認できなかった。

#### 一四 奈良県の事例

『奈良県民俗地図』によると、奈良県では高野山へ納骨する地域として、御所市東佐味・五條市大津・西吉野村（現在の五條市）大日川・野迫川村柞原・同村平・同村北股・同村中津川があがっている〔奈良県教育委員会文化財保存課 一九八二〕。

野迫川村では以下のような報告もある〔奈良県教育委員会事務局文化財保存課 一九七三〕。

今井では、コツノボリ・コツオサメという。葬式の翌日、死人の毛を奥之院へ納めに行った。片手で握った握り飯を道中の谷や人の休みそうなところへ置いて行く。一人で行くと、コツが重くて行かれんという。

北股ではコツノボセという。葬式の翌日、毛や爪を奥之院へ納めに行った。握り飯を道中の水のあるところに一つずつ供えて行った。今は玉川の魚にやるという。

弓手原ではコツノボセという。葬式の翌日、毛や爪を奥之院へ納めに行った。かなりの人数が行くので、夜通し草鞋と握り飯を作る。握り飯を道中の水のあるところに一つずつ供えて行った。（筆者要約）

五條市では旧西吉野村白銀地区の事例も報告されている〔近畿大学文学部 二〇〇七〕。

湯川では、四九日を過ぎると忌明けとなり、故人の魂は仏壇に入り、先祖の仲間入りをする。四九日を過ぎると高野山へ参る。土葬の場合は髪か爪と、へその緒かサトイモの蔓、火葬の場合は喉仏などの骨を高野山の寺院へ納める。左手だけで握った六つの握り飯を竹の皮に包んだものを持参する。道中、川へ下りて休憩した際、握り飯をおいていく。道中の茶店でも「犬にでもあげてください」と置いていく。道中に親戚があれば、お茶をもらう。高野山の寺院では位牌を作ってもらう。

奥谷でも四九日を過ぎると高野山へ参る。一年たつまでに納めればよい。(筆者要約)

このほか、筆者は五條市小阪合地区で以下の話を聞いた。

事例一四一― 「骨のぼり」。葬式のある日に行く。二・三日うちなど、できるだけ早く行く。一年ぐらい、長いこと置いている家もある。土葬だったときは、髪の毛、爪を持って行ったと思う。信明さんは電車で行った。母親のときに行った。高野山の寺は決まっていない。奥之院へ行く人もいるし、手前の寺へ行く人もいる。母はあんまり土産を買ってくるなどいっていた。

表野町、辻本信明(昭和一〇年生まれ)、二〇一四年八月二四日聞き取り

事例一四二― 吉野町国栖では高野山に納骨する人もいる。

竹嶋千裕(情報提供)

東吉野地方の事例としては、以下の話を聞いた。

事例一四三― 納骨は長谷寺へ行つた。東吉野は曹洞宗が多い。その前は真言宗だった。高野山に行くことはない。

上明代康雄(東吉野村出身)、二〇一三年九月聞き取り

奈良県では高野山以外に、矢田寺・長谷寺・当麻寺・西本願寺・知恩院・大念仏寺などに納骨する習俗がある〔岩井 一九七九・奈良県教育委員会文化財保存課 一九八二〕。奈良県における納骨習俗の全体像は不明であるが、高野山に隣接する地域に高野山への納骨習俗が広がっていた可能性が高い。五條市西部・野迫川村北部ではコツノボリ、野迫川村中南部ではコツノボセという言い方をしている。日程については、五條市西部・野迫川村では葬式の翌日、旧西吉野村では四九日前後、となっている。野迫川村や旧西吉野村では弁当を持参する。



## 一五 大阪府の事例

大阪府では宮本常一が河内長野滝畑の左近熊太（幕末生まれ）から聞いた事例を報告している〔宮本 一九三七〕。

葬儀の翌日、高野へ参り、骨（毛骨）を納め、位牌を買って来る。

府下全域の納骨事例をまとめた報告では、南河内・和泉地方に高野山への納骨事例がみられる〔原 一九七九〕。

河内長野市滝畑では死後七日目のシアゲの日にコツオサメをする。コツは高野山とウチバカに納める。男の場合は左の毛を高野山、右の毛をウチバカへ、女の場合はその逆を納める。もとは泊りがけで行ったので、葬式の翌日ぐらいから出かけた。七日目に高野山から帰ると、高野山からもらってきた塔婆を持って親戚がそろってウチバカへ参り、石塔の下にコツを納める。高野山からは位牌もいたでいてくる。

河内長野市島ノ谷ではオコツマイリという。真言宗なので高野山に行くという。たくさんの弁当を持って行かないと途中でダリにつかれて高野山まで登れなくなるといわれた。ダリは行き倒れになった人の亡霊で、食べ物や飲み物をほしがって迷い歩いているという。オコツマイリのときの弁当はゴマをつけて握るので、ふだんの握り飯はゴマをつけるものではないといった。

河内長野市唐久谷ではコツアゲ・コツノボセなどといい、高野山にも行ったが、延命寺に行く家もある。三五日がすむと納骨する。高野山へのコツアゲは親族の若い者が二人で行き、おにぎりを持って行き、犬に食わせた。道中で一服するときには、仏がのどをかわかしているといって、必ずオチャトウをした。

和泉市父鬼では髪の毛などを高野山へ納めた。四九日後、半年後、死後まもなく、など日取りはまちまちであった。納骨の前晩、コツは親類を順番に回ってオチャトウをしてもらった。二・三人で行った。女人堂でオチャトウをしてから納めた。餓鬼の弁当といって握り飯を持参し、女人堂で犬に食わせた。昔は宿坊で泊ってきた。父鬼ではホネカケという習俗もあつ

た。生前に死者が高野山に参詣していない場合、四九日が年越しにかかる、爪や髪を晒の袋に入れて軒にぶらさげるものであった。

泉南町（現在の泉南市）信達桶畑あたりでは、納骨は宗旨によって高野山・一心寺・根来寺に納骨した。貝塚市蕎原は浄土宗であるが、知恩院と高野山に納骨する場合は、親類も供をし、餓鬼の飯、握り飯を持って行った。（筆者要約）

このほか、河内長野市天見では以下のような事例が報告されている〔近畿大学文芸学部 一九九二〕。

四九日たつと、高野山にお骨を持って行く。これをオコツノポリという。黒い米で大きなおにぎりを三個作って持って行き、道中で出会う犬に与えた。犬に上げると餓鬼が遠のくという。とくに白い犬は人間に一番近い存在なので大切にしなければいけないという人もいる。おにぎりを犬にあげないと、足が急に重くなって歩けなくなるといわれた。自分たちが道中で食べるおにぎりは白い米で作った。昔は歩いて高野山まで登っていたが、今は車か電車を利用している。（筆者要約）

大阪狭山市では以下のような事例が報告されている〔大阪狭山市史編さん委員会大阪狭山市史編さん室 一九九七〕。

骨納めに高野山参りをする。一周忌か二・三年たつて行く。骨をあまり長く家に置いてはいけないといい、遅くても三年までに行く。土葬のときは髪の毛を持って行った。（筆者要約）

筆者が大阪府内でおこなった民俗調査のなかでは、和泉市において以下の三例を確認した。

事例一五一一 高野山の安養院に納骨に行く。死んでから一年以内に行く。

一南面利、藤林勇・辻本光夫、一九九八年八月一〇日聞き取り

事例一五一二 高野山には百か日が過ぎてから「骨のぼし」といって納骨に行く。龍泉院に納骨に行く。年忌のときにも参

る。コウヤマキと胡麻豆腐を買った。土産でもよけいなものは買わなかった。コウヤマキは近所に配る。

大野、永坂孝夫（大正七年生まれ）・藤林利治（明治四二年生まれ）・小林保（大正一〇年生まれ）・谷口晴登（大正一二年生まれ）・小坂忠夫（大正一二年生まれ）、一九九八年八月四日聞き取り

事例一五―三 阪本（戒下）では高野山の親王院に納骨に行く。四九日はヒのある期間といい、仏壇でしょっちゅう線香とろうそくを上げる。ヒのあるうちは道中といい、四九日たつと仏が極楽に行つたという。その忌明けになると、親戚一同が寄つて墓参りをし、祭壇を片付ける。このときに香典をいただいたところに、中陰が満ちましたということで、鍋や釜を贈る。今は商品券が多くなっている。その後、家の事情で、農家であれば農繁期を避けて高野へ納骨に行く。かつてはマイカーで行っていたが、飲酒運転が多くなるので、最近はいくつかマイクロスバスを借りて、親戚一同で行く。ここに先祖代々の戒名が並んでいる。永代供養、月拝、日拝で供養料が違う。お盆になると供養をしませんかという手紙がくる。宿坊の寺ではもてなしてくれませんが、親王院は宿坊ではないのであまりごちそうは出ない。朝から勤行に起こされる。酒はだめで、般若湯くらいしか飲ませてくれない。高野山に行くと、コウヤマキや胡麻豆腐を買って、しるしとして親戚や近所に配る。配るところは決まっている。付き合いに高野山のコウヤマキや大峰山のシャクナゲはつきもん。コウヤマキはお土産の代表。日もちするハナで、下を少しづつ切っていくと、半年くらいもつ。仏壇のあるところはほいたい買い。仏壇と墓にあげるだけでとくに利用しない。高野山から買ってきたコウヤマキを庭に植えているが、下にもつてくるとしまりがいい。

阪本（戒下）、着本喜良（大正一〇年生まれ）・八重子（大正一三年生まれ、大木出身）、一九九九年八月三〇日聞き取り

筆者は中河内地域の八尾市・東大阪市で民俗調査を行う際にも納骨のことを確認した。しかし、中河内地域では、浄土真宗は京都、融通念仏宗派平野の大念仏寺に納骨するという人が多かった。また、大阪市内の一心寺に納骨するという人もいた。先行研究および、筆者の聞き取りから判断すると、大阪府では、南河内・和泉地方を中心

に高野山に納骨する習俗が広がっていたと思われる。呼称としては、オコツノポリ・コツノボセ・コツノボシ・コツオサメなど、さまざま言い方がされている。河内長野市滝畑で葬式の翌日に行く事例があるほかは、四九日前後、一年以内、一年以上たつてから、など行く日程はさまざまとなっている。弁当を持参する事例もある。

#### 一六 考察

二章から一五章まで、市町村ごとに事例を紹介し、納骨習俗の特徴を検討してきた。その結果、納骨習俗の形態は変化してきているものの、和歌山県北部では現在でも盛んにおこなわれていることがあらためて分かった。納骨に行く手段としては、徒歩から汽車・電車になり、近年では自家用車で行く人がほとんどとなっている。草鞋・弁当を持参する人は減少しているが、オチャトはおこなう人も多い。納骨に行く日程は以前よりも遅くなる傾向がある。また、納骨習俗には、和歌山県北部だけでも明確な地域差が存在することも明らかになった。ここでは、地域差が顕著なことからのみ分布図を示しておく。

呼称については、コツノポリ・コツノボシ・コツノボセの三つが多くみられる。コツノポリが高野町・橋本市・九度山町・かつらぎ町・紀の川市・紀美野町東部にかけて、広い範囲に分布する。おもに、高野山北麓の山間部から紀ノ川筋にかけてという地域になる。コツノボシは紀美野町西部・紀の川市西部・有田川町に分布する。コツノボセはかつらぎ町花園地区・紀美野町西部に集中し、高野町・橋本市・和歌山市・海南市に点在する。このほか、奈良県野迫川村にも分布している(図1)。

納骨に行く日程については、葬式の翌日・四九日前後・一年以上あと、という三つに大別できる。納骨の日程については近年変化してきているが、昭和中期までにおこなわれていた日程で分類した。葬式の翌日に行くのは、高野町・橋本市・九度山町・かつらぎ町・紀の川市東部・紀美野町東部にかけて分布する。このほか、奈良県五條

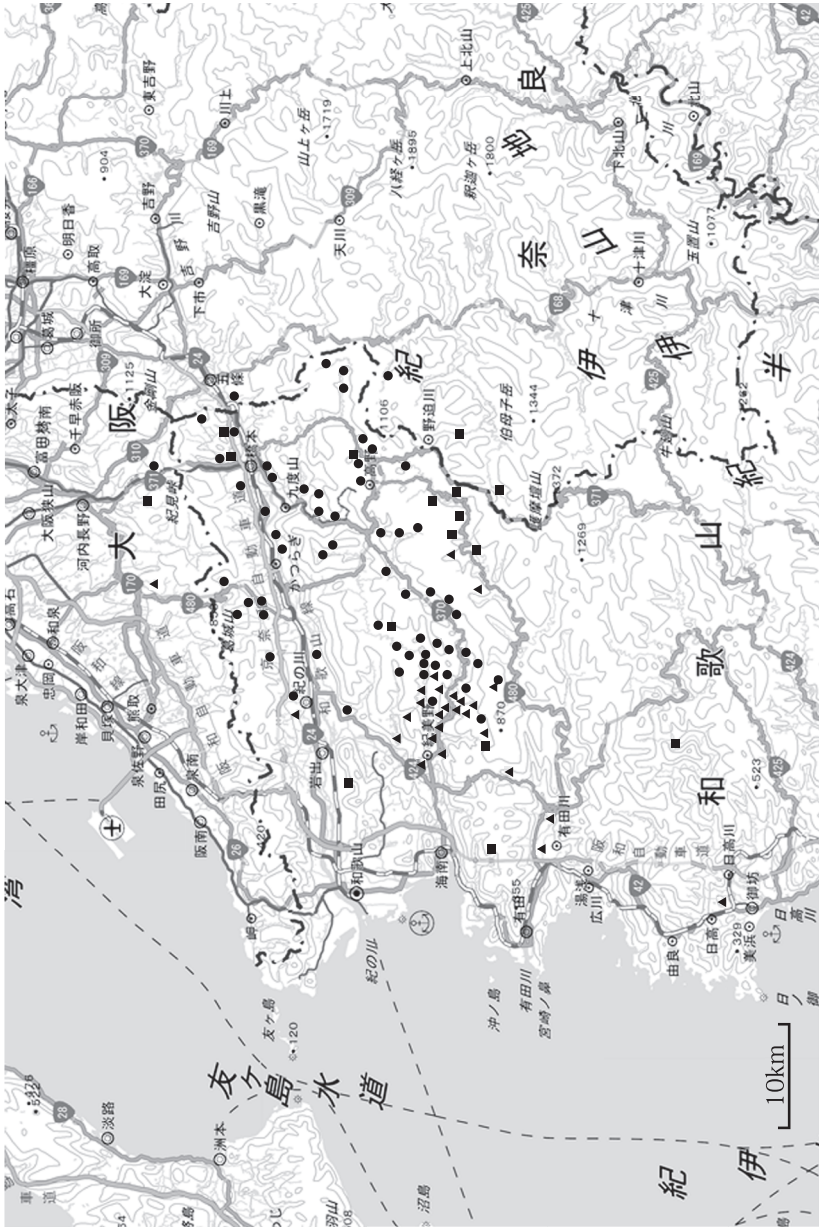


図1 納骨呼称分布図 (国土地理院ウェブサイト地図に加筆)

- コツノボリ
- ▲ コツノボシ
- コツノボセ



高野山納骨習俗の地域差

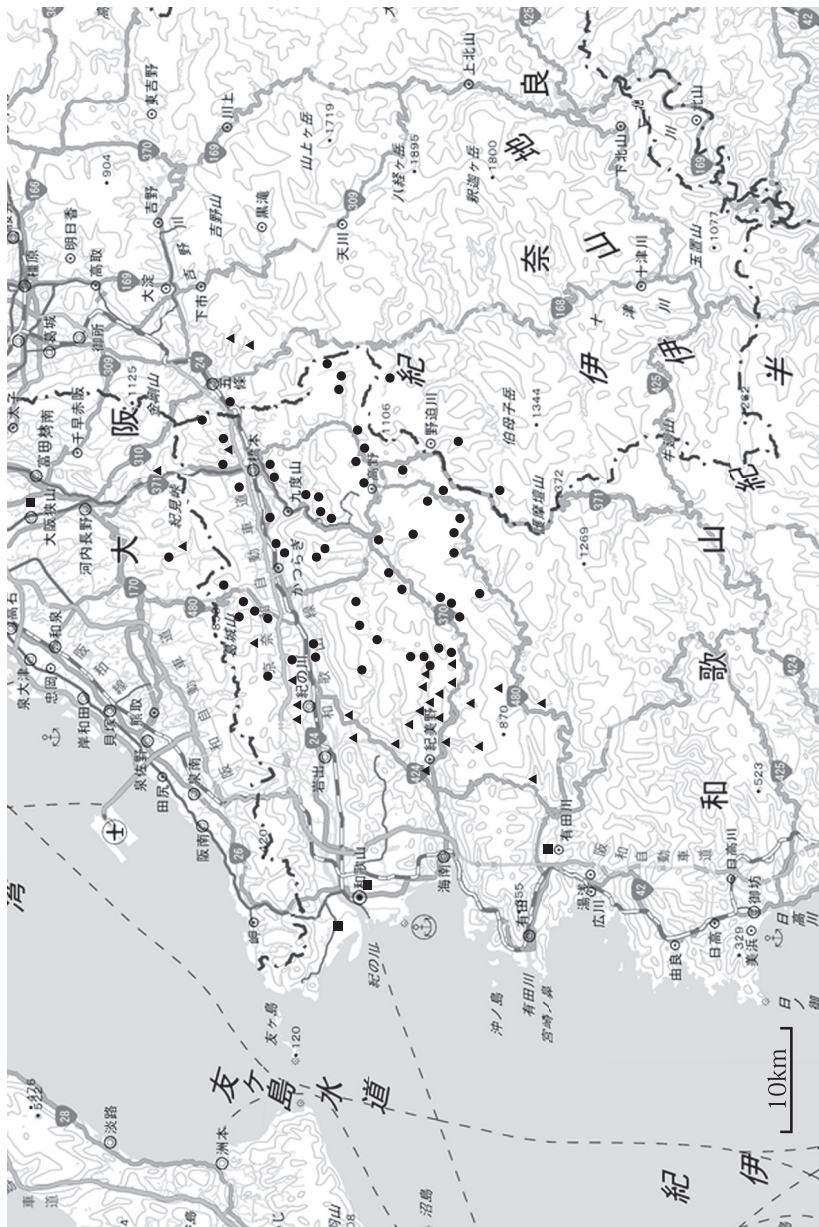


図2 納骨日程分布図 (国土地理院ウェブサイト地図に加筆)

● 葬式の翌日 ▲ 四九日前後 ■ 一年以上あと



図3 納骨に持参する草鞋・藁沓弁当の分布図（国土地理院ウェブサイト地図に  
加筆） ▲ 藁沓弁当 ■ 草鞋・草履



市・野迫川村にも分布している。四九日前後に行くのは、紀の川市西部・紀美野町西部・有田川町に分布している。日程が決まっていない地域は、和歌山市などである(図2)。

弁当を持参する地域は広範囲に及ぶ。そのなかで、藁苞の弁当を持参する地域はかつらぎ町花園地区・紀美野町・紀の川市(旧桃山町・旧貴志川町)・有田川町に分布する。草鞋・草履を持参するのは、藁苞弁当を持参する地域とほぼ同じ地域に分布する(図3)。

一章でも触れたように、先行研究においても高野山への納骨習俗には地域差が存在することが指摘されていた。本稿では和歌山県北部を中心に多くの事例を収集することにより、より明確に地域差を示すことができた。ただし、同じ納骨習俗のなかでも、地域差が顕著な三つの要素を組み合わせることで、二種類の地域差を提示することができる。一つは呼称と日程を組み合わせたときにみえる地域差である。もう一つは持参するものに注目したときにみえる地域差である。まず、呼称と日程を組み合わせたときにみえる地域差を分析してみたい。

先行研究においてしばしば指摘されていたのが納骨に行く日程の違いである。日程と呼称を合わせて考えると、三つの地域に分類できる。Ⅰ高野町・橋本市・九度山町・かつらぎ町・紀美野町東部、および奈良県五條市・野迫川村・大阪府河内長野市、Ⅱ紀の川市・紀美野町西部・有田川町、Ⅲ和歌山市・海南市・有田市など、という三地域である。以下、それぞれの地域の特徴を検討してみたい。

Ⅰは葬式の翌日に納骨に行く地域である。呼称としてはコツノボセとコツノボリが分布する。比較的高野山に近い地域であり、河川上流域の山間部が多いが、平野部も含まれる。集落の寺院は真言宗が多い。高野山に菩提寺を持つ家もある。江戸時代に高野寺領であった地域が多いが、紀伊藩領であった地域も含まれる。葬送儀礼のなかで、納骨は土葬・火葬の次におこなうものとして位置づけられている。納骨の際には、オチャトなどの作法をおこなっている。Ⅰは高野山まで徒歩で日帰りできる地域であった。片道五里程度までのようである。<sup>6)</sup> 初盆には高野山

へ仏を迎えに行くという家も多い。

Ⅱは四九日前後に納骨に行く地域である。呼称としてはコツノボリ・コツノボシが分布する。とくに、紀美野町ではⅠはコツノボリであったが、Ⅱの地域ではコツノボシとなる。山間部のみならず平野部にも広がっている。集落の寺院は真言宗が多い。高野山に菩提寺を持つ家もある。江戸時代に高野寺領であった地域が多いが、紀伊藩領であった地域も含まれる。葬送儀礼のなかで、納骨は四九日の位牌供養と結びついている。納骨の際には、オチャトなどの作法をおこなっている。Ⅱは高野山まで徒歩で日帰りはず、片道一〇里以上ある地域である。初盆に高野山へ新仏を迎えに行くことはない。盆には粉河寺など近くの霊場に参るところもある。

Ⅲは一年以上あとに納骨する地域である。家の都合で納骨をおこなっており、オチャトなどの作法もみられない。呼称としてはコツノボセのほか、コツオサメや納骨とだけ言う場合も多い。下流域の平野部であり、都市部も含まれる。真言宗の寺院もあるが、浄土宗・浄土真宗などの寺院が多い。宗旨にかかわらず高野山に納骨する習俗がみられた。葬送儀礼のなかに位置付けられていない。江戸時代には紀伊藩領であった。Ⅲは高野山からは遠く、徒歩で行けば二泊以上かかる地域である。中世までの高野寺領にも含まれない地域であるため、浄土宗・浄土真宗がこの地域に入ってくる室町・江戸時代以前からおこなわれていた可能性もある。最近ではそれぞれの家の宗旨の本山へ納骨する人が増えているが、浄土宗の檀家の場合は現在でも高野山に納骨する習俗がみられる。聞き取りでは、昭和時代に京都の本山へ納骨するようになったという家もある。浄土真宗の檀家の場合は、昭和時代以前に、京都の本山へ納骨することが意図的に勧められたと考えられる。<sup>(7)</sup>

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの分布を図示すると図4のようになる。わずかな事例ではあるが、奈良県西部・大阪府南部にも同様の傾向がみられるため、Ⅰ・Ⅱは和歌山県側のみならず、高野山を中心に同心円的に分布する可能性がある。Ⅲについては、奈良県・大阪府では確認できていない。

高野山納骨習俗の地域差



図4 納骨習俗の地域差Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ (国土地理院ウェブサイト地図に加筆)

一章で述べたように、五来重や日野西眞定は宗教民俗的にこの問題を捉えていた。本稿では、納骨に行く日程と呼称の地域差について、それぞれの集落と高野山との関係で読み解いてみたい。Ⅰ・Ⅱともに江戸時代の高野寺領と紀伊藩領の地域が含まれている。中世の寺領の領域で分かれているわけでもなさそうである。また、Ⅰ・Ⅱには真言宗の寺院が多いことは事実であるが、地域の寺院の宗旨で分かれているわけでもない。各集落と高野山との生活面でのつながりといえば、高野山に近いⅠでは日常的に高野山とつながりが深く、経済的な結びつきも深かった。また、高野山に買い物に行ったり、納骨以外に参詣に行くこともあった。このようなことを総合的に考えれば、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの地域差は、各集落と高野山との物理的な距離が影響を与えていることが分かる。徒歩で高野山まで日帰りできる地域では、日常生活のさまざまな場面で高野山に行く機会があった。それに対して、徒歩で高野山まで日帰りできない地域では、納骨以外に高野山に行く機会ほとんどなかった。つまり、Ⅰは日常的に高野山とつながりがあった地域、Ⅱ・Ⅲは特別な機会のみが高野山へ行った地域ということになる。

五来重は、四九日後に納骨するのが本来の姿であり、葬式の翌日に行くのは変化した姿であると指摘していたが、Ⅰでは高野山の宗教的な影響も受けやすいために、高野山側の指導によって変化したと考えることもできる。一方、高野山とのつながりが日常的ではなかった地域では、古い納骨習俗の形態が残った、と考えることもできる。ただし、本稿では高野山からの宗教的な影響について、これ以上検討する準備はできていない。

むしろ、高野山との物理的な距離が、高野山との心理的な距離にも影響を与えている可能性を指摘しておきたい。Ⅰでは葬式後すぐに納骨することに対する心理的な抵抗はほとんどみられない。それに対して、ⅡやⅢでは、死者を早く到高野山へ連れて行くことに対する心理的な抵抗がみられる。Ⅰの場合、高野山はいつでも行くことができる身近な山である。死者はそこにとどまって、自分たちの生活を見守る、という感覚が強かったと思われる。

それに対して、Ⅱ・Ⅲの地域からは高野山は見えない。納骨などに訪れるだけで、身近な山というわけではな

い。ただし、自分たちの集落を流れている川は高野山から流れているという感覚がある。Ⅱ・Ⅲの地域では、雨乞いの際に、奥之院の火をもらってきて、集落で大きな火を焚いて拜む、ということが盛んにおこなわれていた。Ⅱ・Ⅲの地域の人々にとつては、高野山は集落を見下ろす山ではないが、自分たちの命をはぐくむ水源であり、死者が鎮まる霊山として考えられてきた。

川の流れて考えれば、和歌山県北部では、Ⅰは河川の上流域、Ⅱは中流域、Ⅲは下流域に対応している。水源の霊山に死者が鎮まるという心意は同じでも、上流域・中流域・下流域で霊山に対する意識が異なるのは当然である。紀ノ川流域でいえば、Ⅰは伊都郡、Ⅱは那賀郡、Ⅲは名草郡・海部郡におおむね該当する。Ⅰ・Ⅱは山に囲まれた地域が多いが、Ⅲは平野が多くなる。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは、和歌山県北部における三つの文化圏と考えることもできる。図4に示したように、奈良県・大阪府ではⅢに該当する地域が確認できず、Ⅱよりも外側には個人的な意思に基づく納骨習俗が広がっている。したがって、高野山への納骨習俗は、高野山の西側に広い範囲で濃く分布するようになっている。これは、紀ノ川・貴志川・有田川などの河川流域において文化的なまとまりがあることを示し、流域の人々の高野山に対する水源信仰が影響していると考えられる。

以上のように、高野山をひとつの水源とする河川流域ごとに、上流域・中流域・下流域において、高野山への納骨の日程が異なることが分かってきた。ただし、納骨習俗の事例からは、もうひとつ別の地域差もみえてくる。図5に示したように、南北方向でAとBに区分される。これは、持参するものなどに注目した場合に浮かび上がってくる。Aは高野山の北麓から紀ノ川平野にかけての地域、Bは高野山の南麓・西麓の山間部といえる。

持参するものをみると、Bでは藁苞の弁当と草鞋を持参する地域が広がっているのに対して、Aは弁当を持参するが藁苞はみられず、草鞋も持参しない。また、呼称としてはAにはコツノボリが多い。Bにはコツノボリもあるが、コツノボセ・コツノボシが広がっている。その他、Aの地域では、納骨後にコウヤマキを買ってきて、近所や





図5 納骨習俗の地域差A・B（国土地理院ウェブサイト地図に加筆）

親戚に配ることが多い。Bではコウヤマキは地元にあるといつてあまり買ってくることはない。さらに、Aでは納骨から帰るときに、店に立ち寄る、風呂に入るなどして、穢れを落とすような行為をとることがあった。Bでは穢れを落とすような行為はほとんどみられない。

このようなAとBの地域差は、根底には平野部と山間部の違いが影響していると思われる。コウヤマキは山間部に自生し、平野部では立派に育たない。したがって、平野部の人々は高野山に登ったときに買い求めてくるハナとして珍重したのである。一方、Bは山間部のため、コウヤマキはそれほど珍重しなかった。また、死穢に対する態度は平野部の社会構造に影響を受けている可能性がある。

草鞋と弁当の有無については、平野部と山間部の交通の違いが影響を与えている可能性が高い。つまり、Aの地域では、明治時代から鉄道が発達したため、徒歩で高野山に行ったことを語る地域は限られている。したがって、草鞋や杖を持参する習俗は昭和初期にはすでにみられなくなっていた。しかし、Bでは鉄道はなく、道路の整備も遅れていたため、昭和中期ごろまで徒歩もしくは自転車で行き来することが多かった。近年まで徒歩で高野山に行く機会があつた地域に、草鞋や弁当、杖などを持参する習俗が伝承されてきたということになる。

かつらぎ町花園地区・紀美野町・奈良県野迫川村の事例から判断すると、持参する藁苞弁当と草鞋は、死者および無縁仏のためのものでもあるが、納骨に行く人たち自身のものでもあつたことが分かる。さらに、街道を通る通行人のためでもあつたようである。徒歩で山中を通行していた時代、弁当と草鞋は必需品であり、死者だけのものではなかつた。ところが、Aでは弁当を持参するものの、死者の弁当と語られることは少なく、「犬の弁当」などという言い方が多い。Aの地域では、草鞋や杖が省略されるとともに、弁当もいつのころか簡略化し、死者の弁当ではなく、より合理的に考えて「犬の弁当」といわれるようになった、と考えられる。

以上のように、平野部のAと、山間部のBでは、地理的な違いによって、納骨習俗にも差が生み出されることに



なっただと思われる。一章で触れたように、柳田國男は草鞋・藁苞弁当を持参する納骨習俗に注目していた。たしかに、草鞋・藁苞弁当・杖などを持参する形態は、近代的な交通が発達する以前の人々の往来を背景にしており、より古い形を残しているといえよう。また、呼称についても、コツノポリよりもコツノボセ・コツノボシのほうが古い可能性がある。室町時代末期や江戸時代初期に浄土真宗や浄土宗に改修した紀美野町西部・和歌山市・海南市方面でコツノボセ・コツノボシという呼称がみられるからである。分布する範囲でいえば、コツノボセは最も広い範囲に点在している。古くはコツノボセもしくはコツノボシといっていたが、いつのころからコツノポリという呼称が流行し、紀ノ川平野を中心に定着していったのではなからうか。

このように、持参するものなどから考えると、平野部中心のAと、山間部中心のBにおいて納骨習俗に差異があることが分かる。そして、AよりもBにおいて、より古い形式の納骨習俗が伝承されてきたと思われる。AはBよりも平野が広がっており、古くから農業や商業が大規模化しやすく、人々や物資の往来も盛んであった。すべての民俗がAよりもBのほうが古いと断定することはできないが、Bのほうには自給的な生業が残り、そうした生業に適合した年中行事や芸能が伝承されてきたのは確かであろう。ただし、高野山北麓の山間部においては、富貴から真国川・柘榴川流域にかけて、紀ノ川平野と近似した納骨習俗がみられる。この地帯は紀ノ川平野部との交流も盛んであった地域であり、AとBの移行地帯と考えることができる。

以上、本稿では和歌山県北部における高野山納骨習俗について、I・II・IIIおよびA・Bという二種類の分類をおこない、考察をおこなった。納骨習俗を宗教民俗学的な問題ではなく、地域の民俗事例として把握し、各集落と高野山との距離やかかわりを通して検討することでみてくるものを示すことができた。

おわりに

調査地や事例の精度が不十分なところはあったが、本稿では和歌山県北部における納骨習俗の地域差を示すことができたと思われる。高野山への納骨習俗の変化や地域差を明らかにしていくためには、古代・中世と民俗事例を結ぶため、江戸・明治時代の文献調査も必要であろう。また、和歌山県中南部・奈良県・大阪府の事例を増やし、高野山以外への納骨習俗との差異についても考察する必要がある。さらに、和歌山県北部において、納骨習俗以外に生業や年中行事など、さまざまな民俗を検討することで、民俗の地域差を検討していく必要もある。

本稿は高野山への納骨習俗を素材にしつつ、高野山を中心とした文化圏を考え、和歌山県北部における民俗の地域差を考える試みでもあった。筆者自身、和歌山市の生まれであるが、子どものころから、自分が育った下流域の平野部と、上流域の山間部では文化が異なることは感じていた。旧貴志川町までは親戚がいるものの、そこから東側の山間部に行く機会は限られていた。川遊び、もしくは高野山参りでたまに訪れる程度であった。しかし、幼少のころ、奥之院手前の玉川を見て、紀ノ川の水がここから流れてくると家族から聞いたときの感動は今でも覚えている。今後、もこの地域の調査をおこないながら、複合的な視野において、地域のなかの高野山信仰を究明していきたい。

(注)

- (1) 高野山霊宝館HPに「骨のぼせ(こつのぼせ)・骨のぼり」、九度山町役場HPに「骨のぼり」という紹介文が掲載されていた。
- (2) 現在では西高野街道が整備され、大阪府・関西空港・和歌山市方面からの自家用車・バスの大半はかつらぎ町からこのルートを通って高野山へ登るようになった。
- (3) 髪の毛を納めるという表記はない。しかし、前後に記されている他地区の事例から判断すると、髪の毛を納

めたとと思われる。

(4) 筆者が調査をした他の地域の事例から判断すると、位牌を注文して食事をし、オシヨネを入れてもらうところは、奥之院ではなく菩提寺ではないかと考えられる。

(5) 毛原からは下流になるため、毛原の人たちはここを通って「骨のぼり」をすることはない。

(6) 高野町富貴から高野山までは五里という。富貴の人たちは、「高野参りはゴリゴリや」と語る。片道五里、往復で一〇里の山道を徒歩で日帰りすることはかなりしんどいことであつたようである。なお、紀の川市下瀬の人は、和歌山市の伊太祈曾神社へ参ることを「山東日帰りゴリゴリ」と語る。和歌山県北部では、山道を徒歩で日帰りする距離としては片道五里程度が限度であつたと思われる。

(7) 五来重によると、浄土真宗の場合、京都の大谷本廟へ納骨するようになったのは江戸中期からであるという〔五来 一九五二〕。

(参考文献)

岩井宏美 一九七九 「奈良県の葬送・墓制」堀哲ほか『近畿の葬送・墓制』明玄書房

打田町史編さん委員会編 一九八六 『打田町史 三 通史編』打田町

大阪狭山市史編さん委員会大阪狭山市史編さん室編 一九九七 『大阪狭山市史 九 民俗編』大阪狭山市役所

大西淳平編 一九五六 『伊都郡の隅から隅 天野村民俗誌特輯』伊都郡地方民俗研究会

垣内篤麿 一九六七 「富貴の習俗 — 伊勢講と七墓参り」『和歌山地理学研究会報告 三 高野町富貴地区の研究』和歌山地理学研究会

『和歌山地理学研究会

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 一九八五 『角川日本地名大辞典 和歌山県』角川書店

- 金屋町誌編集委員会編 一九七三 『金屋町誌 下』 金屋町
- 紀伊山地の霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会編 二〇〇九 『高野山麓の六斎念仏』 紀伊山地の  
 霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会
- 吉備町誌編集委員会編 一九八〇 『吉備町誌 下』 吉備町
- 近畿大学文芸学部編 一九九二 『河内長野天見の民俗』 近畿大学文芸学部
- 近畿大学文芸学部編 二〇〇七 『奈良県五條市西吉野 白銀の民俗』 近畿大学文芸学部
- 近畿民俗学会編 一九七四 『日高郡中津村共同調査報告』 『近畿民俗』 六〇・六一
- 近畿民俗学会編 一九七六 『和歌山県有田郡清水村共同調査報告』 『近畿民俗』 六六・六七・六八
- 近畿民俗学会編 一九八〇 a 『和歌山県那賀郡貴志川町共同調査報告』 『近畿民俗』 八二
- 近畿民俗学会編 一九八〇 b 『和歌山県伊都郡かつらぎ町天野共同調査報告集(一)』 『近畿民俗』 八三
- 近畿民俗学会編 一九八〇 c 『和歌山県伊都郡かつらぎ町天野共同調査報告集(二)』 『近畿民俗』 八四・八五
- 九度山町史編纂委員会編 二〇〇四 『九度山町史 民俗文化財編』 九度山町
- 高野町史編纂委員会編 二〇一二 『高野町史 民俗編』 高野町
- 粉河町史専門委員会編 一九九六 『粉河町史 五』 粉河町
- 国学院大学民俗学研究会編 一九六二 『和歌山県有田郡金屋町旧五西月村』 『三五年度 民俗探訪』
- 御坊市史編さん委員会編 一九八一 『御坊市史 二 通史編Ⅱ』 御坊市
- 五来重 一九五二 『墓の話』 『聖愛』 六五〜七〇 (五来重 一九九四 『日本人の死生観』 角川書店 大幅に加筆  
 訂正のうえ収録、五来重 二〇〇八 『日本人の死生観と葬墓史』 法蔵館 に再録)
- 五来重 一九七六〜七七 『墓と供養』 『東方界』 三五〜四六 (五来重 二〇〇八 『五来重著作集 三 日本人の死

生観と墓墓史』法蔵館 に収録)

五来重 一九八〇 「融通念仏と六斎念仏」講座日本の民俗宗教 六 宗教民俗芸能』弘文堂(五来重 二〇〇八

『五来重著作集 七 民間芸能史』法蔵館 に収録)

五来重 一九九一 『山の宗教 修験道講義』角川書店 (五来重 二〇〇八 『五来重著作集 六 修験道霊山の

歴史と信仰』法蔵館 に収録)

財団法人民俗学研究所編 一九五五 『綜合日本民俗語彙』二 平凡社

坂本亮太 二〇一六 「文献史料からみる高野山への納骨」『季刊考古学』一三四

狭川真一 二〇一六 「納骨信仰遺跡研究の現在」『季刊考古学』一三四

清水町誌編さん委員会編 一九九八 『清水町誌 下』清水町

新谷尚紀・関沢まゆみ 二〇〇五 『民俗小事典 死と葬送』吉川弘文館

角南聡一郎 二〇一六 「民俗学からみた納骨習俗」『季刊考古学』一三四

田中久夫 一九七八 「高野山奥の院納骨の風習の成立過程」田中久夫『祖先祭祀の研究』弘文堂

東京女子大学文学部史学科民俗調査団編 一九八五 『紀北四郷の民俗 ―和歌山県伊都郡かつらぎ町平・大久

保―』東京女子大学文学部史学科民俗調査団

鳥羽正剛 二〇一六 「二石五輪塔から位牌祭祀へ ―納骨信仰の観点から―」『季刊考古学』一三四

奈良県教育委員会事務局文化財保存課編 一九七三 『野迫川村民俗資料緊急調査報告書』奈良県教育委員会

奈良県教育委員会文化財保存課編 一九八二 『奈良県文化財調査報告書 三八 奈良県民俗地図』奈良県教育委

員会(滋賀県教育委員会・京都府教育委員会・奈良県教育委員会編 一九九九 『都道府県別 日本の民俗分布

地図集成 八 近畿地方の民俗地図 1 滋賀・京都・奈良』東洋書林 に収録)

- 丹生都比売神社史編纂委員会編 二〇〇九 『丹生都比売神社史』 丹生都比売神社
- 野上町誌編さん委員会編 一九八五 『野上町誌 下』 野上町
- 野田三郎 一九七四 『日本の民俗 三〇 和歌山』 第一法規出版
- 橋本市史編さん委員会編 一九八五 『橋本市史 下』 橋本市
- 橋本市史編さん委員会編 二〇〇五 『橋本市史 民俗編・文化財編』 橋本市
- 土生川順保・土生川正道 一九五二 「和歌山県伊都郡天野村に於ける葬送習俗に就いて」『仏教民俗』一（土生川正道 一九九一「葬送習俗」日野西眞定・秋宗正男編『高野山麓 天野の文化と民俗』一 天野歴史文化保存会 に再録）
- 原泰根 一九七九 「大阪府の葬送・墓制」堀哲ほか『近畿の葬送・墓制』明玄書房
- 日野西眞定 一九八二 「高野山の納骨信仰 ——高野山信仰史における一課題——」『高野山発掘調査報告書 奥之院・宝性院跡・東塔跡・大門』元興寺文化財研究所（日野西眞定 二〇一六『高野山信仰史の研究』岩田書院 に収録）
- 日野西眞定 一九八四 「山と密教 ——高野山を中心に——」講座密教文化 2 密教の文化』人文書院（日野西眞定 二〇一六『高野山信仰史の研究』岩田書院 に収録）
- 依谷和子 二〇〇〇 「高野山納骨信仰成立前史」『久里』九（依谷和子 二〇一〇『高野山信仰と権門貴紳 ——弘法大師入定伝説を中心に——』岩田書院 に収録）
- 福田アジオほか編 一九九九 『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館
- 藤井弘章 二〇〇九 「下天野の六斎念仏」紀伊山地の霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会編『高野山麓の六斎念仏』紀伊山地の霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会



藤井弘章 二〇一「生石参り」和歌山県立博物館編『中世の村をあるく——紀美野町の歴史と文化——』和歌山県立博物館

藤井弘章 二〇一四「民俗調査からみた神野・真国荘地域の生業」高木徳郎編『紀伊国神野・真国荘地域総合調査』（科研報告書）

藤井弘章 二〇一五「民俗事例からみた高野山への納骨習俗」和歌山県立博物館編『弘法大師と高野参詣』和歌山県立博物館

藤並武文編 一九三九『田中村郷土誌』田中尋常高等小学校

松本保千代 一九七九「和歌山県の葬送・墓制」堀哲ほか『近畿の葬送・墓制』明玄書房

宮本常一 一九三七『アチックミューゼウム彙報 二三 河内国瀧畑左近熊太翁旧事談』アチックミューゼウム（宮本常一 一九九三『宮本常一著作集 三七』未来社 に収録）

桃山町企画室町誌編纂班編 二〇〇二『桃山町誌 歴史との対話』桃山町

柳田國男 一九三七『葬送習俗語彙』民間伝承の会

由良町誌編集委員会編 一九九一『由良町誌 通史編 下』由良町

与田倉之助 一九一七「骨上り」『郷土研究』四一九

和歌山県教育委員会社会教育課編 一九六五『和歌山県民俗資料緊急調査報告書』和歌山県教育委員会社会教育課

和歌山県教育委員会編 一九七九『和歌山県民俗分布図 民俗文化財緊急分布調査報告書』和歌山県教育委員会

（兵庫県教育委員会・大阪府教育委員会・和歌山県教育委員会編 一九九九『都道府県別 日本の民俗分布地図

集成 九 近畿地方の民俗地図 二 兵庫・大阪・和歌山』東洋書林 に収録）

- 和歌山県教育委員会編 二〇一五 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 和歌山県教育委員会  
和歌山県那賀郡編 一九二三 『和歌山県那賀郡誌 下』 那賀郡  
和歌山県民話の会編 一九八五 『きのくに民話叢書 四 高野・花園の民話』 和歌山県民話の会  
和歌山県立博物館編 二〇一五 『弘法大師と高野参詣』 和歌山県立博物館  
和歌山市伝承文化調査委員会編 一九八八 『和歌山市民俗歳時記』 和歌山市

高野山霊宝館HP

<http://www.reihokan.or.jp/yomoyama/various/addition/recofbone/nobose.html> (二〇一五年七月五日閲覧)

九度山町役場HP

<https://www.town.kudoyama.wakayama.jp/dd.aspx?menuid=1667> (二〇一五年七月三日閲覧)

(付記)

事例に挙げさせていただいたように、多くの方々からお話をうかがった。すでに故人になられた方もおられる。すべての方に心から感謝申し上げたい。このほか、以下の機関や個人にもお世話になった。有田市教育委員会・海南市教育委員会・かつらぎ町教育委員会・かつらぎ町花園地域振興課・紀の川市教育委員会・紀美野町教育委員会・九度山町教育委員会・高野町教育委員会・高野町史編纂室・セミナーハウス未来塾・丹生都比売神社・橋本市歴史民俗資料館・りら創造芸術高等学校・和歌山県教育委員会・和歌山県立博物館。飯野尚子氏・笠原正夫氏・木谷智史氏・鞍雄介氏、坂本亮太氏・蘇理剛志氏・高木徳郎氏・田中久夫氏・田村幸美氏・長岡弘樹氏・中野栄治氏・平井二嗣氏・前田正明氏・森本一彦氏・矢倉嘉人氏・和田大作氏。また、以下の近畿大学文学部文化・歴史

学科（文化学科）学生（卒業生含む）による聞き取りや情報提供も使用・参照させていただいた。足立大輔氏・井澤伸矢氏・稲葉綾乃氏・大島百合恵氏・大塚彩夏氏・奥村芙美氏・音地菜美氏・川畑孝亮氏・久芳瑞樹氏・財前翔太氏・坂原幸氏・菅原綾乃氏・竹嶋千裕氏・多鹿和賀代氏・谷有未氏・谷川公浩氏・谷崎茜氏・辻本友美氏・中川咲良氏・前田亜由氏・村本結理氏・森田莉子氏・和田聡子氏。